

The Molecular Biology Society of Japan

MBSJ NEWS

日本分子生物学会

2019.2

No.122

会報

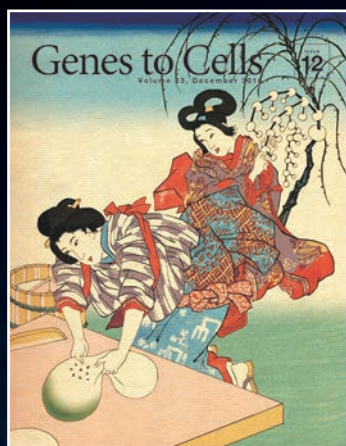
目次

■ 第21期理事長挨拶	1
■ 第21期役員・幹事・各委員会名簿	2
■ 第20期将来計画委員会提言「年会の開催方針について」 および「年会開催ルール細目」「研究発表に関する指針」	3
■ 第42回（2019年）日本分子生物学会年会 開催のお知らせ（その2）	5
【年会のコンセプト その2】	5
【プログラム】	6
【日程表（予定）】	11
■ 第41回日本分子生物学会年会 開催報告	12
■ キャリアパス委員会 年会企画報告	13
■ キャリアパス委員会 年会における発表者の属性統計調査報告 バランスの取れた研究環境を築くために～2018属性調査から学べること～	36
■ 会員専用ページ ログインパスワード再設定オンライン化のお知らせ	37
■ シニア会員・次世代教育会員のご案内	38
■ 第8回（2020年）日本分子生物学会 国際会議支援募集のお知らせ	39
■ 国際会議支援システム利用について	40
■ 第21期新理事会準備会議記録	41
■ 第20期・第21期合同理事会記録	43
■ 平成31年度（第41回）通常総会記録	51
■ 平成30年度（2018年度）決算報告	54
■ 監査報告書	61
■ 平成31年度（2019年度）活動予算書	62
■ 学術賞、研究助成の本学会推薦について	64
■ 学術賞、研究助成一覧	65
■ 各種学術集会、シンポジウム、講習会等のお知らせ ○千里ライフサイエンスセミナー がんシリーズ第7回 「がん微小環境：がん細胞と免疫系の対峙」	69
■ 賛助会員芳名	70



特定非営利活動法人
日本分子生物学会

<https://www.mbsj.jp/>



Genes to Cells

Published on behalf of the Molecular Biology Society of Japan

Edited by: Eisuke Nishida

Frequency: Monthly | Impact Factor 2.048

日本分子生物学会の学会誌Genes to Cellsは、分子生物学の優れた研究成果を掲載し、著者にとって有益な学術情報や先見性の高い最新の研究情報を提供しています。全世界13,000以上の機関で読まれており、年間260,000件以上のダウンロード数を誇ります。是非Genes to Cellsにご投稿ください。

Genes to Cells 投稿の利点

- わかりやすく便利なオンライン投稿システム
- カラー掲載料無料
- 出版までの過程をお知らせするAuthor Servicesをご利用いただけます
- 早期出版EarlyViewサービスにより、最新号への収載を待たずにオンラインで出版されます
- 出版後6ヵ月経過した全論文が無償公開となり、世界中からアクセス可能になります
- オープンアクセス希望者はオプションで『Online Open』（有料）を選択できます
- 総説は日本分子生物学会のサポートをうけ、出版と同時に無料公開されます

オンライン投稿はこちら <https://mc.manuscriptcentral.com/gtc>

2016年・2017年出版 引用数TOP論文 *2018年12月現在

MicroRNA-31 is a positive modulator of endothelial-mesenchymal transition and associated secretory phenotype induced by TGF- β (Volume 21, Issue 1)

Katsura, A; Suzuki, H.I; Ueno, T; Mihira, H; Yamazaki, T; Yasuda, T; Watabe, T; Mano, H; Yamada, Y; Miyazono, K

TDP-43 binds and transports G-quadruplex-containing mRNAs into neurites for local translation (Volume 21, Issue 5)

Ishiguro, A; Kimura, N; Watanabe, Y; Watanabe, S; Ishihama, A

Highly multiplexed CRISPR-Cas9-nuclease and Cas9-nickase vectors for inactivation of hepatitis B virus (Volume 21, Issue 11)

Sakuma, T; Masaki, K; Abe-Chayama, H; Mochida, K; Yamamoto, T; Chayama, K



iPhone, iPad 用ジャーナルアプリ
を使って閲覧できます。

← 無料ダウンロード

ジャーナル閲覧ページ

www.wileyonlinelibrary.com/journal/gtc

日本分子生物学会員は無料でアクセスできます。

初回ユーザー登録は学会事務局まで (info@mbsj.jp)

登録後の問合せはWileyまで (cs-japan@wiley.com)



WILEY

第21期理事長挨拶



会員の皆様へ

私の会員番号は000004である。1978年12月5日に開催された東京での分子生物学会の発足の総会に出席し、ワクワクしながらカイコのフィブロイン遺伝子をカーネギー研究所でクローニングしていた鈴木義昭氏にインタビューしたのを憶えている。in vitro で後部絹糸腺特異的な転写制御を再構築することに鈴木氏らは挑戦していた。京大の4回生の時だった。岡田節人研究室で竹市雅俊氏と細胞接着に関する実験を卒業研究としてやっていた頃だ。1979年に大学院に進学後は、志村令郎氏から制限酵素の精製のプロトコルをもらい、50リットルに及ぶバクテリアの培養液からEcoRIやBamHIを精製しては、レンズ細胞の分化転換に関する遺伝子レベルの研究を安田國雄氏や近藤寿人氏に師事しながら始めた。主な実験材料がニワトリだったので、ニワトリのいろいろな組織からRNAを精製するプロトコルを試行錯誤しながら作っていった（当時は脊椎動物の組織からRNAを抽出した論文はほとんどなかった、）。分子生物学会で最初に発表したのが金沢での第4回年会だった。ニワトリでは、尿素サイクルのASL酵素遺伝子がduplicateし、その一方がレンズ・クリスタリン遺伝子へと進化していたので、その2つのゲノム遺伝子をheteroduplex解析して2つの遺伝子はtandemにつながっていること、exon以外はdiverseしていることを電子顕微鏡の観察から報告した（DNAの電子顕微鏡観察は山岸秀夫氏に教わった）。そして、レンズに分化転換でき得る細胞ではレンズ・クリスタリン遺伝子はleakyな転写があることを証明し、レンズへの分化転換能力を保持している細胞ではレンズ関連遺伝子のクロマチン状態がオープンになっていることを示唆して博士の学位を取得した（Agata et al., 1983, Dev. Biol.）。博士課程の3年次に基礎生物学研究所（基生研）の助手として雇われたが、当時の基生研はDNAが嫌いな研究所だったために、DNAシーケンスの設備をセットするだけでも大変だったというカイジメにあって大変だった。そんな状況下で青天の霹靂で元ボスの岡田節人氏が所長に就任し、研究所は遺伝子をやる方向へと舵が取られた。岡田門下生だった私と浜田義雄先輩とで λ gt11を用いた抗体による標的遺伝子のクローニング法を日本でいち早く立ち上げ、全国のいろいろな研究室の遺伝子クローニングを支援するとともに日本全体への分子生物学的手法の浸透に尽力した。当時筑波大学医学部生だった柳沢正史氏や客員部門にいた慶應大学医学部生の宮脇敦史氏もわれわれに分子生物学の手ほどきを受けた学生だった。

まさか40年後の2019年に分子生物学会の理事長になり、基礎生物学研究所の所長になるとは夢にも思っていなかった。しかし、感慨にふけっている暇などないのが実情だ。分子生物学会の理事会はこの1月で21期目を迎える。人間に例えると二十歳の成人になったところだ。分子生物学会は身長2mの巨人となったが、世界と戦えるだけの逞しい体になっているのだろうか？ガタイはでかくても、ぶよぶよした体つきになっているのではないだろうか。今までの理事会では、合同年会をどうするかとか、捏造問題へどのように対応するかといった内向きの議論にエネルギーを割かれ、世界を見据えた議論にほとんどエネルギーが割かれてこなかった。20期の理事会で、それらの問題に終止符を打ったことを受け、21期の理事会としては、世界を見据えた議論にエネルギーを割いていければと思っている。世界と戦える体にするには、単に英語化すれば良いというものではない。フロントのサイエンスを展開すること、次の世代へワクワク感のあるサイエンス・環境を提供していくことが不可欠である。会議が増えて研究に割く時間が少なくなったなどと弱音を吐いている暇はない。2年間の任期の間に何処まで進化できるかに挑戦したい。個々の会員の世界を見据えた奮起にも期待したい。

2019年1月
特定非営利活動法人 日本分子生物学会 第21期理事長
(学習院大学・理学部・生命科学科)
阿形 清和

第21期役員・幹事・各委員会名簿

理事長

(任期：2019年1月1日～2020年12月31日)

阿形 清和 (学習院大・理)

副理事長

佐々木裕之 (九大・生医研)、塩見美喜子 (東大・理)

理事

荒木 弘之 (遺伝研)

五十嵐和彦 (東北大・医)

石川 冬木 (京大・生命)

一條 秀憲 (東大・薬)

稲田 利文 (東北大・薬)

上田 泰己 (東大・医)

上村 匡 (京大・生命)

大隅 典子 (東北大・医)

菊池 章 (阪大・医)

木村 宏 (東工大・科学技術創成研究院)

倉永英里奈 (東北大・生命)

胡桃坂仁志 (東大・定量研)

後藤由季子 (東大・薬)

小原 雄治 (遺伝研)

近藤 滋 (阪大・生命機能)

斎藤 通紀 (京大・医)

佐谷 秀行 (慶應大・医)

中島 欽一 (九大・医)

中山 敬一 (九大・生医研)

鍋島 陽一 (FBRI・先端医療研究センター)

西田 栄介 (理研・BDR)

原 英二 (阪大・微研)

正井 久雄 (都医学研)

三浦 正幸 (東大・薬)

本橋ほづみ (東北大・加齢研)

山本 卓 (広島大・理)

吉森 保 (阪大・生命機能 / 医)

監事

小安 重夫 (理研・IMS)、町田 泰則 (名大・理)

幹事

庶務幹事 稲田 利文 (東北大・薬)、木村 宏 (東工大・科学技術創成研究院)

会計幹事 三浦 正幸 (東大・薬)

編集幹事 上村 匡 (京大・生命)

広報幹事 深川 竜郎 (阪大・生命機能)

第21期執行部

阿形理事長、佐々木副理事長、塩見副理事長、稲田庶務幹事、木村庶務幹事、三浦会計幹事、上村編集幹事、深川広報幹事

Genes to Cells 編集長

西田栄介 (理研・BDR)

賞推薦委員会

正井久雄 (委員長)、後藤由季子、近藤 滋、中山敬一、原 英二

研究助成選考委員会

吉森 保 (委員長)、上田泰己、菊池 章、本橋ほづみ、山本 卓

国際会議支援・選考委員会

石川冬木 (委員長)、荒木弘之、五十嵐和彦、一條秀憲、佐谷秀行

キャリアパス委員会

胡桃坂仁志 (委員長)、石谷 太、井関祥子、加納純子、夾生 (道下) 江利子、木村 宏、倉永英里奈、斎藤典子、鈴木淳史、花嶋かりな、林 克彦、山本 卓

研究倫理委員会

中島欽一 (委員長)、大隅典子、小原雄治、斎藤通紀、鍋島陽一

生命科学教育

胡桃坂仁志 (担当理事)、五島剛太 (委員)

「日本分子生物学会 若手研究助成 富澤純一・桂子基金」 第3期 基金運営委員会 (任期：2018年1月1日～2020年12月31日)

小原雄治 (委員長)、林 茂生 (副委員長)、大杉美穂、黒田真也、後藤由季子、東山哲也、深川竜郎、阿形清和 (職指定)

第 20 期将来計画委員会提言「年会の開催方針について」および 「年会開催ルール細目」「研究発表に関する指針」

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

第 20 期理事会において検討した結果、このたび、「年会の開催方針について」および「年会開催ルール細目」「研究発表に関する指針」が策定・承認されましたので、ここに公表いたします。

第 20 期将来計画委員会提言「年会の開催方針について」

本学会の目的は、広く一般市民に対し、分子生物学に関する研究・教育を推進するための学術研究及び普及啓発活動を行い、我が国におけるライフサイエンスの進歩に寄与することである。この目的を達成するため、年会の開催方針を以下とする。

1. 学際的立場に立脚した生命科学研究の発表・議論の場を提供することを目指し、原則として、本学会が主体となって年会を開催する。
2. 他学会との年会開催協力は今後も継続するが、その実施形態については、相手学会の規模や連携目的等に応じて柔軟に対応する。協賛や特定のセッションのみの合同開催等、従来の合同年会以外の実施形態についても検討する。
3. 他学会から共同開催や協賛等の申し入れがあった場合は、執行部と年会長でそのメリット・デメリットについて学問的な側面のみならず、予算規模・事務局負担など運営上の問題についても検討した上で方針を決定し、理事会の承認を得るものとする。
4. 年会で継続的に実施する事項については理事会で「年会開催ルール細目」を定める。
5. 年会長は上記各項目をふまえつつ、自由な発想に基づいた年会運営を行う。

《第 20 期将来計画委員会（執行部）》

杉本亜砂子（理事長）、小林武彦（副理事長）、小安重夫（副理事長）、稲田利文（理事／庶務幹事）、
深川竜郎（庶務幹事）、塩見春彦（理事／広報幹事）

2018 年 9 月 14 日
第 20 期理事会承認

年会開催ルール細目

年会の開催方針に関する第 20 期将来計画委員会提言に従い、以下の実施方針を定める。

1. 年会参加登録費

正会員の事前参加登録費は 1 万円以内とすることが望ましい。

学部学生の参加は無料とする。

なお、無料参加の学部学生は協賛企業が行うランチョンセミナーには、原則、参加できないこととする（学会企画のランチョンセミナーは出席可）。

2. 英語化

シンポジウムとワークショップ全体の 3 分の 1 以上を、英語のセッションとすることが望ましい。要旨とスライドとポスターは英語とするが、発表は日本語でも可とする（タイトルは日本語を併記）。

3. 人材育成

シンポジウム・ワークショップオーガナイザーおよびスピーカーに若手研究者・女性研究者を積極的に含めることを推奨する。

4. プログラム集

プログラム集や要旨はオンラインで公開し、継続的にアーカイブする。プログラム集は冊子体としても配布する（発表者索引を含める）。

5. 若手研究者支援

海外若手研究者招聘企画は、年会予算を勘案した上で、原則実施するものとする。

6. 国際化促進

海外講演者招聘旅費援助は、年会予算を勘案した上で、原則実施するものとする。

7. 学会企画

キャリアパスセミナー（キャリアパス委員会企画）、研究倫理セミナー（研究倫理委員会企画）は、学会企画として毎年実施する。

8. 新学術領域等による協賛企画

新学術領域等の「冠」企画の実施も可能とする。実施する場合は協賛企画として公募をし、プログラムに協賛企画である旨を明記の上、協賛金を徴収する。班会議と同様の企画にならないように、領域外の講演者を必ず含めることとする。

但し、関連学協会との共催・協賛企画は対象としない。

9. 災害対応

不測かつ突発的な事由（地震を含む自然災害等）により年会開催が危ぶまれる状況に直面した場合には、当該年会長と執行部が協議してその対応を決定するものとする。

本方針は、今後理事会において必要に応じて修正する。

《第20期将来計画委員会（執行部）》

杉本亜砂子（理事長）、小林武彦（副理事長）、小安重夫（副理事長）、稲田利文（理事／庶務幹事）、
深川竜郎（庶務幹事）、塩見春彦（理事／広報幹事）

2018年9月14日 第20期理事会承認

2018年11月27日 第20期・第21期合同理事会にて細目8.を一部修正、細目9.を追加。

研究発表に関する指針

本学会の重要な目的の一つは、未発表も含めた最新の研究成果を共有し活発な議論と情報交換を行うことである。この目的を達成するため、研究発表に関する以下の指針を定める。

1. 参加者間相互の信頼関係を著しく損なう、以下のような行為は禁止とする。
口頭発表会場とポスター会場で発表された生データを、発表者の承諾なしに写真撮影・ビデオ撮影・録音すること。
研究内容について、発表者の承諾なしにSNS等で第三者に公開すること。
2. 発表に際しては、研究の核心となる分子名、方法、理論、アイデアなどを伏せて発表することは、できるかぎり避ける。
3. 特許申請などに関わる情報の取り扱い、発表者の自己責任とする。

2018年9月14日 制定

特定非営利活動法人 日本分子生物学会 第20期理事会

第 42 回日本分子生物学会年会 開催のお知らせ（その 2）

会 期：2019 年 12 月 3 日(火)～6 日(金)（4 日間）
会 場：福岡国際会議場・マリメッセ福岡
年 会 長：佐々木 裕之（九州大学生体防御医学研究所）
演 題 登 録 期 間：2019 年 7 月 1 日(月)～7 月 31 日(水)
※延長はありません（Late-breaking abstract は例年通り 9 月に募集予定です）
事前参加登録期間：2019 年 7 月 1 日(月)～10 月 11 日(金)
協 賛 学 会：日本生態学会
年会事務局連絡先：第 42 回日本分子生物学会年会事務局（株エー・イー企画 内）
〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋 2-4-4 一ツ橋別館 4 階
Tel: 03-3230-2744 Fax: 03-3230-2479 E-mail: mbsj2019@aeplan.co.jp
年会ホームページ：<https://www2.aeplan.co.jp/mbsj2019/>

【年会のコンセプト その 2】

ようこそ、食の都福岡へ！第 42 回年会で大いに食べて、大いに飲んで、大いに議論しよう！

第 42 回年会（2019 年 12 月 3～6 日、福岡）の年会長を仰せつかった九州大学の佐々木裕之です。福岡での開催は 7 年ぶりになります。前回の第 35 回年会では運営の IT 化が強く推し進められましたが、今回は人工知能や分析・可視化技術の革新による学問分野の変貌を踏まえて、「分子生物学のネクストステージ」を基調コンセプトとしました。自分の専門分野にとどまらず、他のセッションにも足を運んで大いに刺激を受け、考え、着想していただければと思います。しかし、もうひとつの（さらに大事な？）コンセプトは冒頭に述べたとおり「大いに食べて、大いに飲んで、大いに議論しよう」です！！

本年会の開催にあたっては日本生化学会との合同開催も模索しましたが、諸々の事情により（東京オリンピック前年度ということもあり規模が大きくなると日程・会場の確保が困難）断念しました。しかし、単独開催には単独開催のよさがあります。フットワークのよさを生かして、楽しく有意義な年会になるようベストを尽くしたいと思います。例えば、従来から行われているディスカッサー制度によるポスター発表の盛り上げのほか、夕方のフォーラムやチュートリアル企画、海外在住日本人研究者への参加支援などを行う予定です。また展示ブースやランチョンセミナーにご協力いただく企業の方々にも「参加してよかった」と思っただけのよう、様々な工夫を行っているところです。会場には小腹が空いた時に立ち寄れる屋台も登場します！詳細については、今後ウェブサイトにも次々とアップしていく予定です。

皆様のご参加を心よりお待ちしております。

第 42 回日本分子生物学会年会
年会長 佐々木 裕之
(九州大学生体防御医学研究所)

【プログラム】

◆シンポジウム（全 16 テーマ）

12 月 3 日(火)（第 1 日目）

ケミカルバイオロジーと RNA バイオロジーのクロスロード

Crossroad of Chemical and RNA Biology

オーガナイザー：中川 真一（北海道大学）、萩原 正敏（京都大学）

近年のシーケンス技術の進歩は RNA 研究に様々な変革をもたらした。RNA-Seq による発現量とスプライシングパターンの解析は今や標準的な手法となり、RNA 結合蛋白質との相互作用解析、二次構造予測、翻訳や修飾塩基の解析、超多検体解析など、ここ数年で汎用化された新技術は枚挙にいとまがない。これら新技術の波及効果が大きく現れた研究分野の一つとしてケミカルバイオロジーが挙げられる。低分子化合物の中には翻訳や転写、スプライシングをはじめとした RNA 関連のプロセスを阻害するものが数多く知られており、RNA 関連の新技術を駆使することで詳細な作用機序が明らかになりつつある。一方、ノンコーディング RNA は新たな創薬ターゲットとして大きな注目を浴びており、RNA 研究とケミカルバイオロジーの連携によって新たな研究潮流が生まれる可能性がある。本シンポジウムでは、RNA 研究とケミカルバイオロジーの分野連携のポテンシャルについて議論を深めて行きたい。

ニューロン新生 ～発生期から成体まで～

Neurogenesis ～ from developmental to adult stages ～

オーガナイザー：中島 欽一（九州大学）

高次生命機能を司る脳・神経系細胞は、発生期に共通の神経幹細胞から生み出されるが、多くの脊椎動物では成体の脳にも神経幹細胞が存在し、ニューロンが新しく産生されている。本シンポジウムでは、発生期から成体にわたって神経幹細胞がどのように維持され、性質が変化し、ニューロンへと分化するのかについて、そのメカニズムをトランスクリプトームやイメージングデータなども交えて議論したい。また、脳・神経系傷害時には、損失したニューロンを補填することが高次機能を取り戻すためにも必要であることから、ここでは、成体脳において、新生ニューロンの移動や分化を人為的に操作する方法についても紹介する予定である。

モルフォスタシス：発生生物学と疾患研究のクロスロード

Morphostasis: the crossroads between developmental and disease biology

オーガナイザー：石谷 太（群馬大学）、倉永 英里奈（東北大学）

動物組織は、発生段階において多様な攪乱に晒されても、それらを乗り越えて再現よく同じ形に作り上げられる（発生ロバストネス）。また、発生を終えた成体組織も、古くなった細胞や傷ついた細胞を新たな細胞に入れ替えつつほぼ同じ形を保ち続けるが（組織恒常性の維持）、この破綻は様々な疾患へ関与する。本シンポジウムでは、発生ロバストネスと、組織恒常性維持機構の両者をつなぐ共通性に注目し、それらをまとめて「モルフォスタシス（組織形態の恒常性）」として捉える。近年のイメージング解析や数理解析、オルガノイドを用いた構成生物学的研究により、「モルフォスタシス」を支える細胞間・組織間の物理化学的コミュニケーションの存在が明らかになりつつある。「モルフォスタシス」の最新の姿を紹介するとともに、発生と疾患における、共通性と意義についても議論したい。

CRISPR の分子生物学 ～起源・機能・構造そして応用～

Molecular Biology of CRISPR ～ Origin, Function, Structure and Application ～

オーガナイザー：石野 良純（九州大学）

今から 30 年前に、大腸菌のゲノム上に、29 塩基の単位が一定の間隔を置いて何度も繰り返される独特な配列があることが報告された時には、その生物学的機能がまったく予想できず注目もされなかったが、ゲノム情報の蓄積によって、生体防御機能を担うことが予想され、それが実験的に証明されて、クリスパーという響きのいい名称とともに有名になった。その作用機構が解明されると、ゲノムの狙った部位を特異的に切断する技術へ応用されて、実用的なゲノム編集操作法として現在急速に普及している。本シンポジウムでは、「CRISPR の分子生物学」として、その起源から、その機能—構造解析に基づく分子機構の多様性、そしてその特性を生かした種々の手法開発まで、CRISPR 分子生物

学の最新情報を提供し、応用の可能性を議論しながら今後を展望したい。

12月4日(水) (第2日目)

In-cell protein science のフロンティア

Frontiers of in-cell protein sciences

オーガナイザー：稲葉 謙次（東北大学）、伊藤 隆（首都大学東京）

近年の構造生物学、分光学、超解像顕微鏡を代表とする細胞イメージング技術、ならびに細胞内環境を反映した分子動力学シミュレーションの急速な進歩により、細胞内のタンパク質の構造や動態を高精度で明らかにすることが可能な時代が到来している。その結果、細胞内でタンパク質や核酸が膜に包まれない状態で集合体を形成した液-液相分離なども次々発見され、その生理的機能や病気との関連性が注目されている。このような背景のもと、最先端の実験技術と情報解析法により、細胞内のタンパク質の振る舞いについて分子構造レベルで解明を試みている新進気鋭の研究者を国内外から招聘し、最新の情報交換と活発な議論を行う。

多能性を司る分子機構はどこまで解明されたのか？

Molecular mechanisms governing cellular pluripotency

オーガナイザー：丹羽 仁史（熊本大学）

2006年のiPS細胞作成報告から10年以上が経過した。iPS細胞研究が応用に向けて展開する一方で、多能性を規定する分子機構の研究もまた、着実に進展している。たった4つの転写因子の強制発現で、なぜ多能性幹細胞へのリプログラミングが起こるのかを考える上でも、そもそも多能性幹細胞という細胞の状態が、どのような分子機構で規定されているのかを知らなければならない。

本シンポジウムでは、iPS以後の本分野における研究を総括し、多能性を規定する分子機構（シグナル伝達、転写因子、エピジェネティック制御など）の全貌の解明に向けた研究の、現在の到達点を明らかにしたい。

動植物の生き様における力の役割と仕組み

Functions and Mechanisms of Force in Animal and Plant Live

オーガナイザー：森田（寺尾）美代（基礎生物学研究所）、豊田 正嗣（埼玉大学）

生物のかたちやその変形（成長）を理解する上で、力の役割や細胞・組織・器官の力に対する応答メカニズムの解明は欠かせない。それには、ミクロな物理環境の変化に対する細胞レベルでの応答メカニズムを遺伝子や分子といった要素を組み上げ解き明かしていくボトムアップ的研究と、物理法則が生物のかたちに与える制限を考慮するトップダウン的研究の両輪が必要である。本シンポジウムでは、直面する力のダイナミックレンジが大きく異なる動物と植物における、力の役割と応答メカニズムの多様性と共通性について議論したい。

データ駆動型アプローチによるバイアスのない生命科学

Unbiased life sciences by data-driven approaches

オーガナイザー：中山 敬一（九州大学）、夏目 徹（産業技術総合研究所）

21世紀になって生命科学が大きく変わりつつある。今までは、研究者がその興味や偶然の発見による仮説を基に、一步一步研究対象を拡げていく「仮説駆動型アプローチ（hypothesis-driven approach）」が生命科学の主体であった。しかし近年の次世代シーケンサーや質量分析計の性能向上と取得データ量の飛躍的増大によって、特定の分子に着目せずに全データを取得し、その中から研究対象を絞り込む「データ駆動型アプローチ（data-driven approach）」が凄まじい勢いで生命科学を席卷しつつある。本シンポジウムでは、これらを可能にしたオミクスバイオロジーやロボティクス、人工知能を使った新しい生命科学の切り口を紹介したい。

代謝ダイナミクスとがん細胞の可塑性

Metabolic dynamics for cancer cell plasticity

オーガナイザー：鈴木 聡（神戸大学）、平尾 敦（金沢大学）

近年、がんの全ゲノムシーケンスにより、がんの原因となるドライバー遺伝子が次々と発見されてきた。また、これらのドライバー分子に対する特異的阻害剤の開発とその成功は、がん分子標的治療時代へと導く原動力となった。しかし、これまでの精力的な研究にも関わらず、薬剤耐性や転移という悪性形質の本態は謎のままである。ひとつの原因は、がん細胞の可塑性にある。がんは、環境の変化に適応し、生き残り、そして姿を変えて出現する。その可塑性の鍵となるのががん特有の代謝調節と考えられる。本シンポジウムでは、このようなダイナミックな代謝変化とがん細胞の可塑性について議論したい。

免疫系の成立と疾患

Immune system in health and disease

オーガナイザー：河合 太郎（奈良先端科学技術大学院大学）

免疫系は大きく自然免疫と獲得免疫に大別できる。自然免疫はマクロファージや樹状細胞に発現するパターン認識受容体を介し病原体の初期認識や炎症惹起を行う一方、獲得免疫はB細胞やT細胞上に発現する抗原受容体を介して抗原を認識し、抗体やキラーT細胞活性を介して感染病原体排除を行う。いずれの免疫系も自己—非自己認識を行う上で中心となる受容体システムを持っているが、これらを介した認識機構、シグナル伝達経路、転写後調節機構等の破綻により様々な炎症性疾患や自己免疫疾患が生じることが示されている。また、最近の研究から微生物叢と宿主免疫系の相互作用が健康維持や疾患発症に深く関わっていることも明らかにされつつある。本シンポジウムでは、免疫応答制御の分子機構、免疫系の破綻により生じる疾患の機序、微生物叢—宿主間相互作用と疾患との関係を中心に議論を行う。

計測、数理、制御の三位一体による生命動態の解明

Understanding biodynamics by the trinity of measuring, mathematical, and controlling techniques

オーガナイザー：影山 龍一郎（京都大学）、望月 敦史（京都大学）

生命システムのダイナミクスを解明するための手法として、1) 動態を捉えるための計測技術、2) 理解のための数理科学、3) 検証のための制御技術の、いずれもが重要だとみなされるようになってきた。その一方で、これらの手法は、技術的バックグラウンドが異なることもあり、異なる研究者によって、それぞれ独立に発展してきた経緯がある。生命システムの振る舞いを統合的に理解する目的で、これらが一体となった研究領域を推進していく必要がある。本シンポジウムでは、計測、数理、制御を用いて総合的理解を進めている研究者や、それぞれの手法において先鋭的研究を進めている研究者を招待し、講演を行う。本企画が講演者や聴講者を巻き込んだ研究交流のきっかけとなり、この領域の発展につながれば幸いである。

統合1細胞解析の技術革新の最先端

Cutting edge of technical innovations in integrated single cell analysis

オーガナイザー：馬場 健史（九州大学）、Piero Carninci（理化学研究所）

生命体の最小単位である細胞は特異的な機能を持つ細胞集団に分類することができるが、近年の研究から同一細胞集団であっても多様性・不均一性を有することが知られている。この多様性が環境適応や疾患発症などにおいて重要な役割を担っていると考えられており、そのメカニズムの解明に向けた1細胞単位での細胞内各種分子の包括的な解析が注目されている。

本シンポジウムでは、最先端の1細胞解析技術について紹介し、統合1細胞解析研究の可能性について議論を深めたい。

エピゲノム制御による表現型バリエーションの分子基盤

Molecular basis of phenotypic variation regulated by epigenome

オーガナイザー：中尾 光善（熊本大学）、稲垣 毅（群馬大学）

生命体は、環境との相互作用という普遍的問題を抱えている。その分子基盤には、エピゲノムが重要な役割を果たし、

その維持と変化のダイナミズムがある。例えば、生物種の保存と進化は「ゲノムの編集」、個体発生と環境適応は「エピゲノムの編集」と考えることができる。とりわけ、栄養・代謝物に由来する化学修飾を受けたエピゲノムが遺伝子機能を調節して、表現型を変化させる。本シンポジウムでは、エピゲノム制御による表現型バリエーションとその生物学的な意義について議論したい。

行動を制御する脳情報処理の解読

Decoding informational processing in the brain that underlies behavioral regulation

オーガナイザー：石原 健（九州大学）、飯野 雄一（東京大学）

動物は、感覚神経細胞で内外の情報を受容し、中枢神経回路において取捨選択・統合などの処理を適切に行うことによって、環境に適応している。分子生物学・光学技術・神経科学を融合し、全脳イメージングや光遺伝学などの手法を適用することによって、学習や記憶をはじめとする高次情報処理機構の解明が進んできている。本シンポジウムでは、線虫から高等動物まで様々なモデル系における情報処理機構解明の最先端について議論したい。

12月6日(金) (第4日目)

超細胞工学

Augmented Cell Engineering

オーガナイザー：武部 貴則（東京医科歯科大学 / 横浜市立大学 / シンシナティ小児病院）、谷内江 望（東京大学）
生物学には私達を魅了する多くの大課題が残されている。組織はどのような細胞と分子の協奏によって作り上げられるのか？哺乳動物の全身を作り上げる細胞系譜はどのようなものか？もはや現存しない絶滅種はどのような機能をもっていたのか？これらに取り組むことが難しい本質的な理由は、もちろん十分な観測体系がないということである。今日、超並列シーケンシング、シングルセル技術、1分子計測などの工学技術が登場するなか、幹細胞技術、オルガノイド技術、ゲノム編集技術、DNA分子タグ法などは、対象となる細胞、組織、動物個体の方を進化する観測手法にさらに適したものに改変することを可能にしつつある。本シンポジウムでは、大胆に細胞を工学し、新しい観測体系の樹立を狙う新進気鋭の研究者達とともに、既存のディシプリンを越えた生物学に挑戦する機運を高めたい。

生殖系列サイクルのロバストネス

Robustness of germline lineage

オーガナイザー：林 克彦（九州大学）、伊川 正人（大阪大学）

人間を含む哺乳類の生命は、精子と卵子が融合する受精に始まり、細胞分裂を経て個体に発生する。約200種類もの細胞種から成り立つ個体において、体細胞が世代限りであるのに対し、唯一、生殖細胞系列のみが次世代に遺伝情報を伝達することができる。そのため、各世代において、体細胞系列と生殖細胞系列への運命決定、雌雄生殖細胞としての分化、減数分裂と精子・卵子への最終分化、受精による初期化を繰り返すことにより、存続がなされる。本シンポジウムでは、哺乳類における生殖細胞系列の世代サイクルの分子基盤について主要なステップにおける最新情報を提供するとともに、その制御による試験管内再構築や応用など展望を議論したい。

◆ワークショップ（最大 80 テーマ）

多数のご応募をいただき、1 月 31 日に募集を締め切りました。採否結果は 2 月下旬に応募者へご連絡いたします。

◆フォーラム

現在、日本分子生物学会、日本生態学会の会員の皆様より企画の公募を受け付けています。後述の募集要項を参照の上、奮ってご応募ください。

◆一般演題（ポスター・ワークショップ口頭発表）

公募ワークショップでは一般演題から複数演題を採択いただきます。また、ポスターセッションにはディスカッサー制を導入します。演題投稿期間は 7 月 1 日(月)から 7 月 31 日(木)となります。本年会では演題投稿期間の延長はいたしませんので、十分お気を付けください。投稿手順などの詳細は 6 月発行の次回会報、および年会ホームページにてご案内いたします。多数の演題投稿をお待ちしております。

◆バイオテクノロジーセミナー

企業との共催によるランチョンセミナーを開催いたします。

◆その他の企画

その他の企画は詳細が決まり次第、年会ホームページにてご案内いたします。

【フォーラム企画の公募について（応募締切：2019 年 6 月 13 日(木)）

生命科学と関連するが、シンポジウムやワークショップ形式にとらわれない、比較的自由度の高い企画や技術開発や社会との関連が深い企画を「フォーラム」と位置づけ、1 テーマ 60 分～最大 90 分の時間枠（18：30～19：30、最大 20：00 まで延長可）で、日本分子生物学会ならびに日本生態学会の会員の皆様より企画を公募します。奮ってご応募ください。

新学術領域等の「冠」企画の実施も可能とします。ただし、班会議と同様の企画にならないよう、領域外の講演者を必ず含めてください。ホームページやプログラム集への冠表記には、10 万円の協賛金の負担をお願いいたします。冠表記を希望する方は、フォーラム応募フォーマットの該当欄へ掲載を希望する団体名を記載し、併せて「フォーラム冠企画申込書」を年会事務局にメール添付で提出してください。

◆応募要領

年会ホームページより応募フォーマットをダウンロードし、必要事項を記入のうえ、6 月 13 日(木)までに年会事務局宛、E-mail にて提出してください（E-mail：mbsj2019@aeplan.co.jp）。

- 1) テーマタイトル（和文・英文）
- 2) オーガナイザーの氏名（和文・英文）・所属（和文・英文）
- 3) 概要（文字数：日本語 全角 400 文字程度）
- 4) 予定演者の氏名（和文・英文）・所属（和文・英文）
- 5) 連絡窓口となるオーガナイザーの氏名、連絡先
- 6) 開催時間（60 分～最大 90 分まで）
- 7) 予想される聴衆数
- 8) 冠表記希望の有無、希望する場合の団体名

問い合わせ先：第 42 回日本分子生物学会年会事務局

Tel：03-3230-2744 E-mail：mbsj2019@aeplan.co.jp

【日程表（予定）】

	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
12月3日(火)	シンポジウム ワークショップ 9:00-11:30 ハイテク セミナー 12:10-13:00 学会企画 11:45-13:00 シンポジウム ワークショップ 15:45-18:15 フォーラム 18:30-19:30 最大90分 (20:00)まで 貼付 見学会 13:00-13:30 ポスター 発表・討論 13:30-15:30 撤去 機器・試薬・書籍展示 9:30-17:00													
12月4日(水)	シンポジウム ワークショップ 9:00-11:30 ハイテク セミナー 12:10-13:00 学会企画 11:45-13:00 シンポジウム ワークショップ 15:45-18:15 フォーラム 18:30-19:30 総会 富澤基金 贈呈式 18:30-19:40 最大90分 (20:00)まで 貼付 見学会 13:00-13:30 ポスター 発表・討論 13:30-15:30 撤去 機器・試薬・書籍展示 9:30-17:00													
12月5日(木)	シンポジウム ワークショップ 9:00-11:30 ハイテク セミナー 12:10-13:00 シンポジウム ワークショップ 15:45-18:15 フォーラム 18:30-19:30 最大90分 (20:00)まで 貼付 見学会 13:00-13:30 ポスター 発表・討論 13:30-15:30 撤去 機器・試薬・書籍展示 9:30-17:00													
12月6日(金)	貼付 ポスター 発表・討論 9:30-11:30 撤去 シンポジウム ワークショップ 13:00-15:30 高校生 研究発表 16:00-17:30 市民 公開講座 17:30-19:00 機器・試薬・書籍展示 9:30-12:45 撤去													

※あくまで2019年2月時点での予定であり、今後変更される可能性があります

第 41 回日本分子生物学会年会 開催報告

昨年 11 月 28 日(水)～30 日(金)の 3 日間、パシフィコ横浜にて開催した第 41 回日本分子生物学会年会は、7,519 名の参加者を迎えて盛会のうちに終了いたしました。

第 41 回年会では、「日本からオリジナリティーを発信しよう」というテーマを掲げました。世界がグローバル化する中で、日本が本当に貢献できることは、日本人独特の感性でとらえた世界の見方を発信することであり、特に、日本人の「自然」や「生物」との向き合い方に西洋の科学の精神とは異なる面が多くあることを踏まえると、生物学の分野で日本人の発想力を生かした仕事をもっと世界に向けて発信できるのではないかとこのテーマに込めた想いでした。年会開催を目前に控えたタイミングで本庶佑先生のノーベル医学生理学賞受賞という素晴らしいニュースが飛び込みましたが、まさにこのような理念を实践されてきた本庶先生のご業績が評価されたものと、大変嬉しく思いました。

このテーマと関連して、年会最終日に作家の佐藤優さんに「科学に潜む宗教的思考の危うさ」という特別講演をお願いしました。宗教観に由来する「日本と西洋」における「ヒトの位置づけ」の違いが思想活動全般に影響を与え、それが無意識のうちに科学にも及んでいるということを理解しておくことは大事だと思っています。ここに日本からの積極的な発信の意味があります。この講演では、さらに思想活動そのものに潜む盲点にまで踏み込んだ講演をしていただきました。講演後の質疑応答では日本における研究活動のあり方の理想像まで議論が白熱し、時間を延長して多くの参加者の質問にお答えいただきました。本学会では、研究不正問題をこれまでも正面から扱ってきましたが、この問題に対しての良いアドバイスもいただけたと思っています。

シンポジウムはプログラム委員に企画いただいた 21 テーマ、ワークショップは会員からの公募による 110 テーマの、いずれも刺激的かつ魅力的な企画が開催されました。テーマの多様性・先進性だけでなく企画・構成におけるオーガナイザーの意図など、参加者に充分満足いただけたのではないかと考えております。特筆すべきは、シンポジウム・ワークショップ全体の 1/3 で、女性

や若手にオーガナイザー・座長を務めていただいたことです。国際学会と比較するとまだ十分とは言えませんが、この流れが日本の学会の新しい形になっていくことを期待しています。

一般演題には Late-breaking Abstracts を含めて 2,872 演題の投稿があり、このうち 163 演題がワークショップでの口頭発表に採択されました。ポスター発表を年会のメインイベントとして位置付け、Late-breaking Abstracts を含めすべてのポスターにディスカッサーが付き、皆様に活発な討議を行っていただきました。昨年同様、午後一番の時間帯に設定しましたので、本当にポスター会場は大いに盛り上がり、発表者・ディスカッサー双方が充実した時間を持てたことを喜んでいただけたと思います。ディスカッサーには 293 名にのぼる中堅、シニアの会員に加え学会理事や年会組織委員までご尽力いただきましたが、本当に感謝いたします。

奇しくも平成で最後の年となった 2018 年は、西日本豪雨、北海道地震、数々の台風など多くの災害に見舞われた年となりましたが、年会では被災された学生会員 26 名の参加費を免除いたしました。また、海外若手研究者に対する旅費補助の企画も再開し、選考の結果、20 名に対する旅費支援を行いました。本年会に参加された全ての皆様が、有意義な時間を過ごされ、研究の発展につながる知見や交流を深めていただけたようでしたら幸いです。

最後に、依然厳しい経済情勢の中、本年会の趣旨に賛同いただき協賛いただいた企業・団体の皆様、年会の企画・運営にご協力いただいた年会組織委員、プログラム委員、オーガナイザー、講演者、ポスターディスカッサー、裏方で運営を支えていただいた学会事務局、エーイー企画の皆様、そして年会にご参加いただきました皆さまに、心よりお礼を申し上げます。

2019 年 2 月
第 41 回日本分子生物学会年会
年会長 石野 史敏
(東京医科歯科大学難治疾患研究所)

キャリアパス委員会 年会企画報告

4年間のキャリアパス委員会の活動を振り返って —将来にどう繋げるか—

小林 武彦

2018年のキャリアパス委員会主催のランチョンセミナーは、例年通り2つの企画を行いました。1つはサイエンス企画と称し、今年が岡崎フラグメントの発見50周年に当たることから基礎研究の素晴らしさを若い方に紹介させていただく企画にしました。もう一つは研究費や給与に関する企画で、事前アンケートの結果の分析から、普段聞きにくい「お金について」のセミナーを行いました。共に参加者とパネリストが双方向に意見を交換する「ケータイゴング」を使い、多くの意見が飛び交う大変盛り上がった会になりました。それぞれセミナーの詳しい内容につきましては、山本委員と大谷委員のまとめの文章と全文記録（学会HP）をご覧ください。ここでは私の4年間のキャリアパス委員会の活動を通して感じたことを少し書かせていただきます。

若者はなぜ研究者になるのをやめたのか？

まずはキャリアパス関係から。4年間の議論で一番重たかったのは、博士課程進学率の低下とポストドク問題です。アンケートなどの結果から、進学率の低下については、大きく2つの理由があることが判りました。1つは経済的な問題。もう一つは就職の問題です。実はどちらも、我々が活動を始める以前に比べて、かなり改善されてきています。博士課程の経済的な問題については、RA、TAの一般化、卓越大学院、学振のDC制度など、調べると結構なサポートがあることが判ります。大学は情報提供にもっと力を注ぐべきでしょう。もちろん欧米並みのサポートには、まだまだ及びません。目標は、博士課程学生に授業料を払わせない、生活費として15万円以上のサポートをする、ことです。これらの達成に向けて大学教員は努力すべきです。私も頑張ります。もう一つの博士課程進学率の低下の原因は就職に関する不安ですが、これは「ポストドク問題」の影響が尾を引いていると思います。ポストドク問題とは、1990年代後半から始まった大学院重点化（大学院生の数を増やす）とポストドク1万人計画により、急激に増えたポストドクがなかなか終身雇用になれないという問題で、社会現象化しました。結局打つ手がなく、未だに生命系では任期付雇用の割合は高く、あるいは転職を余儀なくされた方が少なからずおられます。特にポストドク第一世代である現在40～45

歳の方は、「団塊の世代ジュニア」と言われ、もともと人口が突出して多いこともあり、すべての分野で就職難な世代です。40代の研究者が多く応募する准教授やPIの公募は、募集1名に対して応募者数が3桁になるところもあるそうです。このポストドク問題のイメージが以降の世代にも影響を与え「博士に行っても就職がない」という風評が広がり、修士を出て就職するという流れを助長したのでしょう。

しかし、現状はどうかということ、実は博士の就職状況はかなり好転してきています。というか逆に博士修了者が減りすぎてしまって、若手の助教を公募しても一桁の応募しか集まらないというのはよく聞く話です。また本委員会の活動も影響してか、30代の研究者の雇用の安定化政策が打ち出されました。以前セミナーで紹介した「卓越研究員制度」もその1つです。また2019年1月14日の朝日新聞の朝刊にも特集（「博士求ム！企業の採用活発」）されていましたが、企業の博士採用も着実に増えています。ですので、学部生や修士過程の学生で将来の進路に悩んでいる人がいたら、私は企業に就職することを視野に入れて博士課程に進学する選択肢があることを伝えています。人生100年時代、勉強できるときに思いっきりやりましょうよ。

日本が技術立国であり続けるためには

次に、視点を広げて、現在の若手が担う日本のサイエンスの将来についての私見を述べます。「日本から将来ノーベル賞級の研究は出ない」と言われています。今のままでは、おそらくそうなると思います。原因として基礎研究の予算が少な過ぎる、結果をすぐに求めるような研究に力点が置かれ過ぎる、などがあると思いますが、キャリアパス委員会の委員長としては、別の要因も考えています。それは若者のメンタリティーです。ひとことで言えば、熱くない。そしてこれは若者だけの問題ではなく、私も含めた少し上の世代にも責任があると思っています。「カッコ良くない」「オピニオンリーダーがない」「研究費のこと、大学の雑務でいつもバタバタしている」「どっしりと腰を据えた研究ができていない」。いつの時代も、若者は憧れとパッションに突き動かされています。大隅先生や本庶先生は、「The研究者」という感じでカッコいいです。女性では岡崎恒子先生は、繊細でありながらも、ものすごく強い情熱をサイエンスに対して持っておられます。この先生方のように、同じ空気を吸えるだけでインスパイアされるような強いオーラを持った研究者が、私（55才）の上の世代には

おられますが、我々の世代には少ないです。50代の研究者、もうひと頑張りです。

生命科学はどこへ行くのか

最後に未来予測です。未来予測の書籍をみると、今後50年間で発展する科学は「生命科学」と「AI」が有望なようです。生命科学は、医学の分野ではもちろん大切ですが、別の分野でも重要です。プラネタリー・バウンダリー（地球の限界）という概念があります。簡単に言えば人類（地球）を滅ぼす可能性がある環境変化は何かということです。CO₂の増加などがすぐ頭に浮かびますが、実は最も深刻なのは、生物の多様性の減少だと言われています。新種はなかなか現れないわけで、生物種は減る一方です。しかも人間活動は凄まじい勢いで環境に負荷をかけています。生物の多様性の減少がいつどんな形で人類を危機に追い込むのか想像すらつかない状況です。生物学を少しでもかじった我々は、生物多様性という環境のバッファーが機能しなくなったとき、どんなに悲惨なことが起こるか想像できます。基礎研究はすぐには役に立たないが、そのうち役に立つと言われているが、「そのうち」が案外近くに来ているのかも知れません。

いろんな方面で今後さらなる発展を遂げる生命科学を、「選択と集中」のような思考ではなく、まさに多様性を許容し広い視野を持った、いい意味での拡散拡大路線に変更して、この地球を、人類を、持続可能なサイクルへと導きたいものです。それが全ての生命科学者の務めですね。

共に頑張りましょう!!

【日本の基礎生命科学の源流と未来】

- 日 時：2018年11月28日(木) 11:30～12:45
- 会 場：パシフィコ横浜 会議センター3階301
- 参加者：約280名
- 講 演：木村 宏（東京工業大学科学技術創成研究院）
石野 良純（九州大学農学研究院）

2018年のキャリアパス委員会では、「日本の基礎生命科学の源流と未来」と題し、日本の分子生物学の源流から現在のゲノム編集までの最新技術、さらにはAIなどを駆使した情報システム生物学への発展を予見し、未来の基礎生命科学について考えることを目的としてランチョンセミナーを開催した。

まずキャリアパス委員の木村宏先生から、日本の分子生物学の源流から今日に至るオーバービューとして、岡崎令治先生のDNA複製機構の解明について詳細な解説が行われた。加えて、サンガー法やPCR法などDNA

複製関連の分子生物学の発展が重要な技術開発につながっていることが紹介された。講演後半では、基礎研究は厳しい状況であるが、研究の妥当性や独創性を、信念を持って伝えることの重要性が熱く語られた。また、「本当に重要な問題を解くことができれば、非常に大きな波及効果が期待できるということを語ることが重要である」という言葉がとても印象的であった。

続いて、九州大学の石野良純先生に「CRISPRの発見」として、30年前のCRISPR配列発見の経緯やその後CRISPR-Cas9がゲノム編集に利用されるようになってきた歴史について紹介して頂いた。発見当時、その機能がわからなかったものの、論文にこれらの繰返し配列について記載することができたことなど、発見者しかできない実感のこもったお話であった。講演の最後には、「今までのバイオテクノロジーの遺伝子組換え実験、それからPCR、ゲノム編集といったキーになるテクノロジーは、すべて原核微生物の分子生物学から始まっている」という内容はとても説得力のあるものであった。私自身ゲノム編集ツールの開発を行ってきたが、第一世代や第二世代は、細菌の制限酵素を改変したものであり、細菌が宿主を制御するために進化させてきたことに、なるほどと思わされる内容であった。

この後キャリアパス委員が登壇し、パネルディスカッションが始まった。このパネルディスカッションでは、ケータイゴングを用いてフロアからのアンケート結果や自由意見を取り上げながら進めた。参加者の属性は、大半がアカデミアの研究者（PIと非PI）、学生（博士あるいは修士）であったが、企業研究者の参加も見られた。今回、修士学生の参加が多かったが、これは本ランチのテーマが自身の進路を考えることにつながると考えたからかもしれない。現在「基礎研究」を行っている回答した参加者が多い中、今後携わりたい研究では、「基礎研究」に次いで「医学への応用研究」や「まだ姿が見えない新分野・異分野融合研究（基礎寄り）」を選択した方が多く、今後応用研究寄りに進みたい（進まざるを得ない?）と思う人も増える傾向が感じられた。さらに、「今後の分子生物学で発展すると思われる（興味のある）研究は？」については、「ゲノム・核酸・蛋白質科学」「疾患・発生・神経・代謝科学」と「物理・数理・情報科学・AIとの融合」が多かった。これらの結果は、分子生物学会においても応用研究に重きをおく研究者が増える傾向（の一端）を示しているかもしれない。融合研究については、AIや新技術を加えた研究について期待が大きいものの、簡単なものではないことが司会者やパネリストから実体験を含めて紹介された。

続いて行われたアンケートでは、「基礎研究をとりまく状況」についての複数の質問がなされた。回答では全体として基礎研究環境が（徐々に）悪化していると感じ

る傾向が見られた。しかし、そもそも基礎研究と応用研究を切り離すことはできず、「やはりその基盤となるべき基礎研究が大多数あって、その中から応用となり得るものが出てくる」など小林委員長からコメントされた。また、“このままでは基礎的研究が終わってしまったというような風潮”に対して、今後研究の問題設定を考え直す必要性についてもコメントされた。

国の研究への投資に関する質問では、2020年に向けて研究開発への投資が増額されることについて十分とは考えられないとの回答が多く見られた。さらにパネルディスカッションでは、研究費と任期制について議論がなされ、研究者の任期制の問題が大きく、余裕がないところでは多様な基礎研究も融合研究も進まないことが浮

き彫りになった。一方、最後の設問「独創的で科学の発展に大きく貢献できる研究ができていますか？」について、「できている」との回答が予想より多く、これは分子生物会の基礎研究を重要と考える意識の高さを反映したものと思われた。

本ランチョンセミナー全体を通して、解明すべき基礎的な問題はまだまだ多くが残されており基礎研究は決して終わっていないこと、基礎研究が進まなければ応用研究は生まれないこと、など多くのことが印象に残った。フロアとパネリストがケータイゴングを通して一体となって議論できたことにも大きな意義があったと言える。

(文責：座長・山本 卓)

〈アンケート〉 集計結果（四捨五入しています）

【問1】 あなたの年齢は？

① 24歳以下	49	27.4%
② 25～29歳	19	10.6%
③ 30～34歳	15	8.4%
④ 35～39歳	13	7.3%
⑤ 40～49歳	35	19.6%
⑥ 50～59歳	34	19.0%
⑦ 60歳以上	14	7.8%
計	179	100.0%

【問2】 あなたの身分・職階は？

① 学部学生	21	11.7%
② 大学院生（修士）	32	17.9%
③ 大学院生（博士）	10	5.6%
④ ポスドク	14	7.8%
⑤ 大学教員（助教・講師・准教授）	38	21.2%
⑥ 大学教員（教授）	31	17.3%
⑦ 研究員	10	5.6%
⑧ 主任研究員・チームリーダー・室長以上	7	3.9%
⑨ 企業	10	5.6%
⑩ その他（技術員・テクニカルスタッフ）	2	1.1%
⑩ その他（医師）	2	1.1%
⑩ その他（大学職員）	1	0.6%
⑩ その他（retired researcher）	1	0.6%
計	179	100.0%

【問3】 このセッションを何で知りましたか？（※複数回答可）

① 学会ホームページ	51	23.6%
② 年会ホームページ	57	26.4%
③ 会報	9	4.2%
④ プログラム集	62	28.7%
⑤ ポスター	9	4.2%
⑥ 会場内の広告	11	5.1%

⑦ フェイスブック	0	0.0%
⑧ クチコミ	11	5.1%
⑨ その他（アプリ）	1	0.5%
⑨ その他（通りすがり）	2	0.9%
⑨ その他（ランチョンセミナー当日配付）	1	0.5%
⑨ その他（記述なし）	1	0.5%
※ 未記入	1	0.5%
計	216	100.0%

【問4】このセッションを開催した時間帯はどうでしたか？

① ランチョン形式でよかった	173	96.6%
② ランチョン以外の時間帯がよかった	5	2.8%
※ 未記入	1	0.6%
計	179	100.0%

【問5】前半の講演はいかがでしたか？

① とても面白かった	115	64.2%
② まあまあ面白かった	53	29.6%
③ 普通	5	2.8%
④ あまり面白くなかった	1	0.6%
⑤ つまらなかった	0	0.0%
※ 未記入	5	2.8%
計	179	100.0%

【問6】後半のディスカッションはいかがでしたか？

① とても面白かった	74	41.3%
② まあまあ面白かった	67	37.4%
③ 普通	13	7.3%
④ あまり面白くなかった	4	2.2%
⑤ つまらなかった	0	0.0%
※ 未記入	21	11.7%
計	179	100.0%

【問7】今後このような試み続けるべきだと思いますか？

① 是非続けるべき	150	83.8%
② 続けるべきだが方法を変えた方がよい	23	12.8%
③ やめた方がよい	0	0.0%
④ わからない	1	0.6%
※ 未記入	5	2.8%
計	179	100.0%

【問8】このセッションに関する感想をお聞かせください。

- ・基礎研究は研究を行うのに最も重要、基盤となるのだということを再確認しました。
- ・基礎が如何に重要かという事。いくら重点を置いても過ぎる事はない。基礎の基礎は生命の根元。
- ・重要な知見の発見者の先生のお話は含蓄があった。
- ・大分ニッチな研究をしていて、個人的には面白いのですが社会の役に立つ研究になるのか不安もあったのですが、少し心のつかえがとれた気がします。ありがとうございました。
- ・時間がない中で、大事な話題がとりあげられていてよかった。
- ・木村先生の講演は短くまとまっていて素晴らしかった。ぜひ学会 HP で公開してほしい。講義で使用したい。
- ・分子生物学の歴史をエピソードを織り混ぜながらディスカッションできる良い機会です。

- ・改めて研究事情、特に基礎の領域の厳しさを痛感しています。ただそれでも基礎研究をします（医学部出身ですが）。
- ・知的好奇心が満たされれば役に立っている、という言葉に、勇気づけられました。
- ・若手からシニアまでの様々な世代の意見を聞くことができ、生物学の研究者を目指すうえで、何を考える必要があるのかを、見つけ直す機会になった。
- ・基礎研究の重要性や魅力をこのようなセッションで再確認・共有することは、次世代の優秀な若手を基礎研究に呼び込むためにも非常に重要だと感じました。雇用や研究費の問題など日本のアカデミアが抱える負の側面が強調されがちですが今回はこのような基礎研究の夢や責務を再確認できるよい機会になったと思います。
- ・研究への姿勢について考え直させられる良い講演でありました。
- ・山本先生の司会がお上手。
- ・いろいろな話を聞けておもしろかった。
- ・研究者の意見が聞けたのがよかったです。
- ・様々な分野の話しが聞けておもしろかった
- ・若手にとっても非常に有用であった。
- ・研究者の意識を高めるには必要かも知れないと思った
- ・自分の研究がどのようにおもしろいか、アピールすることが大切だと思いました。
- ・大変会の内容に創意工夫があり良かった。学問の源流に立ち返るような話題提供であり今後もそのような傾向で会のオーガナイズをお願いしたい。
- ・委員の中だけでなく、このように匿名で話し合う機会があることは、大事なのではないかなと思いました。
- ・基礎研究をまさにやっている生の声が聞けたことが楽しかったです。リアルタイムの意見や投票を使いながらのセッションは初めて。
- ・自分で投票することで、討論への理解度が増し、現代の研究をとりまく環境について理解することができた。
- ・様々なキャリアの方々の意見を聞け、参考になりました。匿名での一般からの主張・疑問を共有できたのはよかったと思います。
- ・コメントの中に非常にしっかりとした意見が並べられていたことをたのしく思います。
- ・会場からのコメントに先生がたが丁寧に応じて下さっていて大変勉強になりました。
- ・登壇している先生方が率直なコメントをしてくださっている点がとてもよかった。
- ・視聴者の率直な意見を見ることができて、とても興味深かった。
- ・参加型セッションでたのしく参加できた。同じ立場の院生のコメントがきけたのも共感したりできてよかった。
- ・コメント投稿式で聴衆が参加できるセッションはとてもおもしろかった。徐々にコメントが増えてきてもり上がっているのがわかった。
- ・この形式のディスカッションは初めて参加したが、とても興味深かった。なんならあと2時間くらい欲しかった。
- ・後半になるほどウェブのコメントも本音が出始めてると感じた。さらに話を聞きたい興味深いコメントがたくさんあった。
- ・基礎研究の人が多いのは意外でした。リアルタイムで結果やコメントが反映されるのがおもしろい試みでした。今回、キャリアパスの方の参加は初めてだったので、今後も参加したいと思いました。
- ・Web からコメントを投稿できることで、忌憚のない意見がきけた。
- ・聴衆参加型のディスカッションは初めてで新鮮でした。
- ・参加型のセッションで面白かったです。
- ・会場の意見をリアルタイムでみれるのは興味深い
- ・インタラクティブでフロアの声がリアルタイムできけて興味深かった。
- ・参加のみなさんの意見をリアルタイムで知ることができると、楽しかった。
- ・フロアからのコメントが、結構おもしろかったです。
- ・スクリーンに映し出されるコメントも参考になった。これまでの本学会の同様のキャリアパスセミナーの中で秀逸であった（優れていた）。今回のセミナーの報告書を会員に配布、発表するのがよい（考えられていると思いますが）。Academic な事がきちんと議論されていました。
- ・とても貴重な、また、スマートホンでアンケート形式は斬新でおどろきました。非常にすばしかったです。他の学会でも行ってほしいです。
- ・パネラーの半分が女性研究者であり、そのあたりの配慮も充分なされていた。それぞれの立場で意見を述べられていて大変参考になった。今後とも本企画をがんばって下さい。
- ・コメントの機能、便利ですね。もっとうまく使えるかもしれませんので今後に期待します
- ・非常に興味深かった。パネラーのバランス（背景、男女、Senior or Junior）も良い。
- ・面白かった。パネラーのスタンスも良い。
- ・基礎研究を志す者として皆同じようなことを考えているなという安心感とともに、傷をなめあっている感もした。今回の議論で現状がかわれば良いと思う。
- ・コメントについては大きなテーマがあってもいいかと。自由にかくことができるので、ひろくなりすぎるのでは？
- ・具体的なテーマにしぼると参加者にもメリットが有ると思う
- ・大多数が一部の解答に偏っていた一方で、一部にも一定数の票が集まっていたことについて、そうした少数の意見も、なぜその解答を選んだかという理由を含めて、大多数派と比較したい。
- ・コメントをもう少しすく上げてほしい
- ・設問とライブコメントにつながりがうすかった。ライブコメントに対するパネリストのコメントをもう少し聞きたかった
- ・もう少しディスカッションでのパネラーは要点を端的に話してほしい。（テンポを早くして）
- ・パネリストさんは多分、研究費をたくさんもらっている方々なので、ちょっと感覚の隔たりを感じた。
- ・文科省への提言と、その結果を、セッション始めに示してもらいたい。机上の空論になってしまう。
- ・他の学会でも似たような話をきくので状況を打開する具体的な行動までつながればよいと思います
- ・全体的に参加されている方が感じている現状への危機感、問題点は同じ、という印象を受けました。コメントにあったようにこれらを打開することが出来る外部の方を招致したらよりよいものになると思います。
- ・ディスカッションのパネリストがPIばかりで多様性に欠ける。博士課程学生、報道関係者、文科省の方を呼んでもよかったのでは？
- ・今後もこのような試みを続けるべきだが、ディスカッションで出ている各省庁役人をまねく等、方法を変えた方が良い
- ・パネリストに予算を決める側の人&マスコミの人を呼んではどうでしょう？
- ・行政関係者、一般市民等もう少し幅広いパネリストで行っても良いと思う。

- ・パネリストの人選に問題がある。座長は話し過ぎない方がよい
- ・現場の声ではなく反応を見てもらうには、省庁・企業の関係者を招くべきではないか。
- ・学会として行政に働きかける必要もあるのではないかと感じた。
- ・セミナーはおもしろかったが、この結果が、将来どのように反映されるのかが重要
- ・セミナーで終わるのではなく何らかの成果として報告してほしいです。
- ・省庁をからめるとよさそう
- ・国（財務省）の役人に入ってもらったどうか？ 応用研究に対応するのは純粋研究ではないだろうか？ 例：IUPAC 基礎は応用を意識したことではないか？
- ・基礎研究でも人にうける研究をする必要があるのでしょうか？
- ・基礎科学の重要性を社会に伝えるためのしくみを作りたい、できてほしいと思います。（メディアの協力など）
- ・基礎研究の重要性は、研究者は知っていると思います。一般の人+省庁の人々がどうやったら理解してくれるのか。
- ・安定しなくてもいいから職を増やしてほしい。
- ・若手研究者のポジションの少なさを感じました。研究はお金がかかるから、研究者が多ければ多い程プロジェクトあたりのお金が減ってしまうのはどうにかならないだろうか。
- ・設問8は、自身の研究についてなのか日本全体についてなのかが分らなかった。明記してほしい。
- ・時間の関係で取り上げられなかったコメント・質問にもパネリストの先生のコメントを頂いて、後日みられるようになどしてもらいたいです。
- ・時間に対してパネリストが多いと思う。本音は時間を増やして欲しいが難しいならパネリストをへらすべきかと。
- ・ネットのアンケートは切実さが出ない。→心にひびかない。会場からも生の声を拾うべき。せっかく会場に来た人たちがかやの外に感じる。
- ・コメント一覧を映しているとき、わざわざ個別コメントをクリックしない方が良いです。
- ・スマホもってなくて参加できなかった。PC 使えず。
- ・サブパネルが小さくて見えなかったのが残念
- ・時間が足りない。毎年のことですが。
- ・もっと時間をとった方が良い。
- ・面白いのに時間が短いのが残念だった。
- ・融合といいながら分業になっていないか
- ・なんとなくまとまりがないような。問題は数多いので仕方ないですが…
- ・今年はテーマがイマイチわかりにくい。何を議論したかったのか？
- ・毎年参加しています。今後この世界で生きていくにあたり今何が問題なのか勉強させていただいております。
- ・異なる視点からの意見もききたい。
- ・もっと過激な意見が欲しかった。
- ・面白く聞きました。
- ・新鮮で面白かったです。
- ・非常に興味深いです
- ・たいへん勉強になりました。ありがとうございました。
- ・共感できた。
- ・good.
- ・未来志向のあるすばらしい会

【問9】 来年以降のセッションで取り上げて欲しいテーマがあれば教えてください。

- ・大御所あるいは教授レベルの人たちと若手研究者、学生間での意識のギャップ。そのギャップを相互に知ることはとても意味があると思う。また匿名でないとできない内容なので。
- ・Junior Scientist Group と Senior (established) Scientist Group でのパネルディスカッション。“キャリアパス”について。
- ・修士、博士、若手のキャリアについて。何が魅力なのか、シニアの方々から聞きたい。
- ・博士へ進学したいと思うか、進学して良かったと思うか。
- ・学生によせたテーマもほしいです。（将来見すえるべき点等）
- ・次世代の育成についてとりあげては？ あらかじめアンケートにこたえてもらったら？
- ・大学教育について（学部生の知識がなさすぎて、どこまで話せばいいのかわからない）
- ・基礎研究への資金の供給。若い人にどうすれば興味をもってもらえるのか。院生の就職先
- ・基礎研究と就職
- ・任期制。PI 以外のシニア研究員の進路。
- ・40代で任期なしポジションにつけない人はどうすべきか。
- ・教員（研究）の評価とは、どうあるべきか？
- ・研究費の獲得の仕方
- ・海外と日本の研究環境の比較
- ・日本の研究環境と海外との違いの問題。それに伴う研究者の海外への流出
- ・研究力、日本から外国への留学、外国から日本への留学生
- ・国際化の問題
- ・地方大と中央との研究環境の差について。
- ・企業、大学での研究の差、両者がどのように協調できるか。
- ・参加者の出身学部が知りたいです。
- ・学生と教授のキョリのとり方について
- ・文化としての科学
- ・続きを！
- ・このテーマは毎年やっていてもよいと思う。
- ・異分野（物理学・数学・コンピューター）の方もパネリストにおよびして、「本当の融合研究は可能か？ 融合研究とは何を指すのか？」

- ・医学研究の位置づけ。医学部の目から見ると予算や意識？が極端に高い。医学は実学、Science とは異なると思っている。
- ・私は留学の形で一時的に研究に携わっている身です。学生さんも多いようなので、遺伝子工学などのテクニックや基礎的なプログラムもあると思います。
- ・AI の利用について。
- ・最近の細胞死についての知見
- ・Epigenetics
- ・miRNA の今後
- ・エルゼビアと研究者コミュニティの関係。Nature, Cell, Science とオープンアクセスジャーナルの位置づけ。
- ・働き方改革と、研究職について
- ・働き方改革と研究時間の確保
- ・なぜ余裕が無いのかと議論した方が良い。色々あるはずで、本質的な問題も見えてくるかも。
- ・教育と研究の両立。教育負担の軽減方法。研究所がうらやましい。
- ・育児参加の実体
- ・女性研究者（子育て中）のキャリアパス
- ・女性研究者のキャリアパスについてお聞きしたいと思いました。
- ・（重要な知見の発見者の先生のお話は含蓄があったが）それでもワークライフバランスのお話し
- ・過去にあったのかも知れませんが、研究不正の多さと、それが正しく処分されていない現状から、研究不正を取り上げてほしい。
- ・どうしたら文科省を変えられるのか
- ・財務省・文科省の役人をよんで研究の危機的状況の理解を深めてもらう
- ・コメントにもあったように役人を交えての討論があつてほしい。

【問 10】 本年会での属性調査（添付資料）をご覧ください。感想をお聞かせください。

- ・女性の PI を増やすことが重要だと思う。
- ・女性のスピーカーが極端に少ないように感じた。
- ・「正会員」の中の女性率が低い。原因は何でしょうか。
- ・女子学生は多いのに、大人の女性は少ないですね。女性は、研究を続けるのは、難しいのでしょうか。
- ・学生会員は女性が 1/3 以上いるが正会員は 1/4 程度。それはなぜなのか。
- ・男女比について学生会員に対して正会員の女性の割合が低い点が印象的だった。
- ・学生は 38%いた女性が正会員では 20%しかいない。今後 20%がどんどんあがっていくと良いと思う。
- ・やはり学生以降の女性は少ない。
- ・男性の教授が多い
- ・男性が多い
- ・6～7 年前、EU から一時帰国で参加した時には女性の chair がほぼ“0”で驚いたが、かなり状況が変化していて安心した。
- ・女性の活躍が前年以前と比べ促進されているというのは喜ばしいことだと思います。
- ・オーガナイザー、スピーカーの比率が会員の男女比と近い比率になっているのは好印象だった
- ・オーガナイザーだけでなくすべての男女比は個人会員の男女比と相関しています。女性は若い年代が多いが、30 歳以上から激減している。基礎研究は何のためにするのか不確かな時が多いので、女性には基本的に向かないのではないだろうか。直接医療の改善、向上と結び付くテーマでなければ女性研究者は増えないことでしょう。
- ・そもそも女性で会員になっている人が少ないのは何故だろうか。女性は学生と正会員で比率が大きく変化している。これは企業へ就職する比率が女性が高いのか。
- ・男女比の点では適正なのだと思う。
- ・かなりバランスがとれてきた。
- ・よそうどおり。
- ・予想通りだった
- ・他の学会と比較すると、比較的、女性が多い印象を受けた。
- ・元々生物学を志す男女の母数に差があると思うので、特に、女性だから不利だ、というようなことはないように思う。
- ・男女を意識しないことが均等化につながるのではないかと感じた。
- ・女性研究員が少ないため、女性の数を上げるために、募集要項に「女性優先」と書くことはしかたがないと思うが、逆差別になっていると思う
- ・思っていたよりも女性発表者が多く、性差関係なく発表できる場だと思った
- ・最も参加すべき博士課程の方の出席が少ないので気になります。
- ・博士課程の人がもう少し多くてもよいと思う
- ・博士課程の学生が少ないのは心配
- ・修士の若い大学院生が学会に来られるのはすばらしいと思う。自分が院生のときはなかなか行かせてもらえなかった。DC1 とれてやっといけるようになった。
- ・男女比についての結果が可視化されており、分かりやすくよかったです。学生会員の割合が、思っていたより多かったです。
- ・これまでの調査とあわせれば、若手や女性がどの時点で壁があるのかわかりそう。
- ・男女比について、焦点をあてていますが、海外ではどうなのか、参考として載せてくださると日本の立ち位置がわかると思います。学生では女性が多いですけど、それ以降になると割合がかなり減っていることが印象的でした。
- ・高齢化しているようです
- ・どう読みとれば良いか困りました。
- ・今ひとつ意味がわかりにくかったです…
- ・結論がちょっとよくわからない
- ・想像していたセッションの内容と違ったので、あれまちがえた？とあせりました。内容はおもしろかったです。
- ・少し見づらい部分もあった。
- ・ま、分子生物は大きい学会ですから。
- ・なし

【問 11】 その他、ご自由にどうぞ。

- ・クレジットカードをもっと使えるようにしてほしい。どの列がクレジットを使用できるかわからなかった。
- ・学会の Free WiFi が会場で接続できなかったので接続できる会場で実施してほしかったです。
- ・もっと大きい箱で、人数をふやしてやるべえ！
- ・会場が狭い。もっと広い会場が必要。
- ・Twitter のハッシュタグ付きで、コメントをひろってほしいのかなと思いました。LIVE 配信して、より一般に向けて発信していてもいい内容だと思った。
- ・このアンケートもウェブで答えるようにすると手間が省けます。
- ・個別意見としてでてきたものを次期テーマに反映しては？
- ・後半の設問に「その他」の項をつくり、コメントを入れてもらおう、などのサイトの工夫があってもいいかと思います。研究費で雇用していただいている身なので、産休・育休後が不安です。
- ・とくに大学の場合ですが、優れた結果を出した方ほど実験からはなれていくことが多いのはもったいないと思います。
- ・大学教員の研究以外の業務の拡大が研究時間をへらす要因になっており、さらに働き方改革の波もしのびよっており、研究者の生態には全くそぐわないモノなので不安です。
- ・はやりでなくまんべんなく研究を支援してもらいたいと思います。なかなか人にうけいれられない研究はどうしたらよいのでしょうか
- ・私個人としては研究は個人に属するべきものであり、社会や政治などと無関係であることが重要だと考えている。学問の多様性が最も重要で、その中で淘汰されていけばよい。しかしあくまで研究のオリジンは個人の興味にあるべきである。しかし最近では未知のものを研究することに対してリスクしか評価されないで研究費は配分されないでしょう。これからは社会への貢献が期待されるものばかりの研究しか日本にはなくなります。新規の研究は消えるはず。
- ・国際化を推進することも重要。外国人研究者を多く呼び寄せることが日本の科学にとって大事。
- ・私の恩師が繰り返しおっしゃったことを書きます。「基礎研究は何が当るかわからないので、少額でいいから、できるだけ多くの人に配分すべき。その中でヒットが出たら、多額を投入すべき」です。

〈ケータイアナライズシステム〉

〈アンケート〉 集計結果（四捨五入しています）

練習設問：皆さんの属性について教えてください。

・学部学生	25	12.3%
・大学院生（修士）	41	20.1%
・大学院生（博士）	16	7.8%
・ポスドク、助教、講師、准教授、研究員等の非 PI 職	40	19.6%
・独立助教・講師・准教授、主任研究員等の junior PI 職 （非テニュア・テニュアトラック）	11	5.4%
・教授等の PI 職（テニュア）	25	12.3%
・企業	16	7.8%
※未入力	30	14.7%
計	204	100.0%

設問 1：現在のあなたの研究は次のどれに属しますか？

・基礎研究	133	73.5%
・医学への応用研究	26	14.4%
・疾患検体などを用いたトランスレーショナルリサーチ	2	1.1%
・農学・工学への応用研究	10	5.5%
・その他	10	5.5%
計	181	100.0%

設問 2：あなたが実際に携わりたい研究はどれに属しますか？

・基礎研究	72	37.9%
・医学への応用研究	44	23.2%
・疾患検体などを用いたトランスレーショナルリサーチ	7	3.7%
・農学・工学への応用研究	13	6.8%
・まだ姿が見えない新分野・異分野融合研究（基礎寄り）	38	20.0%
・まだ姿が見えない新分野・異分野融合研究（臨床寄り）	12	6.3%
・その他	4	2.1%
計	190	100.0%

設問 3：今後の分子生物学で発展すると思われる（興味のある）研究は何ですか？

・ゲノム・核酸・蛋白質科学	45	23.2%
・疾患・発生・神経・代謝科学	69	35.6%
・物理・数理・情報科学・AI との融合	64	33.0%
・農学・植物学	5	2.6%
・宇宙学	9	4.6%
・その他	2	1.0%
計	194	100.0%

設問 4：研究成果の速やかな社会応用を求める風潮は、特に基礎科学研究者のマインド低下をもたらしています。基礎研究をとりまく現状をどう感じていますか？

・楽観できる状況にある	9	4.8%
・徐々に悪化している状況にある	64	34.0%
・危機的な状況にある	115	61.2%
計	188	100.0%

設問 5：公的研究費の基礎研究と応用研究の配分比率は現状のままでいいと思いますか？

・いいと思う	24	13.6%
・いいとは思わない	152	86.4%
計	176	100.0%

設問 6：2017 年度版の「科学技術白書」（文部科学省）では、日本の科学研究がこの 10 年間で低下していること、イノベーションを生み出す基盤的な力が急激に弱まっていることが指摘されています。これを立て直すための取り組みとして、2020 年に向けて研究開発への投資が増額されることになりましたが、この取り組みで十分であると思いますか？

・十分だと思う	26	14.9%
・不十分だと思う	149	85.1%
計	175	100.0%

設問 7：（設問 6 で「不十分だと思う」と回答され方は）必要だと思う取り組みをお答えください。

・研究費の増額	32	20.0%
・適正な競争原理の導入	17	10.6%
・積極的な任期制の導入と人材の流動性	24	15.0%
・（長期安定した研究環境を保証するための）任期制の撤廃と運営交付金などの一律増額	87	54.4%
計	160	100.0%

設問 8：現在、（ノーベル賞につながるような）独創的で科学の発展に大きく貢献できる研究ができていますか？

・できている	47	27.0%
・できていない	127	73.0%
計	174	100.0%

コメント一覧

No	ハンドルネーム	コメ ン ト
1	TT	テニユアトラックは本当に機能しているのだろうか？
2	かねつぐ	基礎研究の重要性を社会的に周知するためにも、研究機関とメディアとの付き合い方が重要だと感じる。
3	具体的に	融合はどうやって推進していくのか？
4	GTC	CRISPRの話は、非常に参考になりました。わけのわからないものを研究している身として勇気付けられました。
5	アップルウォッチ	修士は就職すべきか進学すべきか？
6	のん	基礎研究は何の役に立つかわからないのは最もであるが、役に立たなくて良いと開き直っている研究者がいるのは問題だ。昨今の風潮を受けて、社会貢献のビジョンを自ら示して行く必要はあると思う。
7	そもそも	基礎研究と応用研究とはどうわけなのでしょう？
8	コロン	アンケート結果で「トランスレーショナルリサーチ」への興味が低いことにコメントをお願いします。
9	日本の科学におけるプレゼンスが低下しつつあることについて	お金で解決できるなら予算をつぎ込めば良いのですが、大学教員に余裕がなかったり、志望者の減少ということが原因なら、方策を真剣に考えなければならないのでは？
10	咲良	分野を横断することが重要と仰っていましたが、その一つの手段である留学に関して、そのメリット等を先生方自身の経験からお話いただけると幸いです。
11	a	日本初の研究が欧米でビジネス化され日本の基礎研究への還元が割合として少ないのではないか
12	とても良いディスガ ション	I am a scientist from China. We never had this kind of discussion in Chinese academic meetings. I think it is a very good experience for me. This kind of discussion will stimulate the young scientists to think seriously how to contribute to innovative science
13	学	現代の社会（一般の方々）は知的好奇心を満たしたいのだろうか。情報過多すぎて、研究に興味を示す人が年々少なくなっている気がします。研究者はどのような情報発信をすればいいのでしょうか？
14	SK	社会貢献が先んじると謎なものに対する興味が薄れてしまう。謎の解明への好奇心+応用力をパ ラレルで発揮するのが大事だと思う
15	実験系の	這い上がりはむずかしいですね
16	元サラリーマン	ヒトは何かを役立てたいと思った時、研究にバイアスが生じる可能性がある。したがって、基礎研究は何か役に立てるといよりは真実を追求することを目的として欲しいです。バイアスのない基礎研究の積み重ねが応用研究に繋がると信じています。
17	基礎研究費	いくらあれば十分？
18	C	現在修士で進学を予定しています。女性研究者は非常にかっこ良いと思い憧れです。研究者として生きていくためには海外でポストドクなど今後経験を積むべきと思いますが、出産・育児など年齢を考えてしまう部分もあります。
19	らんた	応用研究に多額を投資するのは構わないと思うが、現場での無駄遣いが過ぎると感じている。それなら、基礎研究にももう少し配分してよと思う。
20	ぶろっこりー	若手研究者は基礎研究費の配分を増やすために何ができるのでしょうか
21	匿名	役立つべきという風潮に引っ張られた結果、ただの細胞やマウスで出た成果が、あたかも「ヒトのXX疾患に役立つ（かも）！」というような大風呂敷なプレスリリースは、結果として基礎研究の価値を下げると思います
22	学生	比較的新しいテクノロジーの原理や使い方、グラフの見方についての授業がほぼなく、20世紀の研究についていけない。
23	やりたい研究を決めるには	医学に応用できるような生物学基礎研究をしたいとは考えていますが色々なアプローチ法があり具体的にどんな研究をしたいかまで決められません。大学院進学を考えているので決めた方がいいんですがどうしたらやりたい研究を決められるのでしょうか？
24	Ma	科研費申請で、波及効果を重要視して書かせる印象があるのですが、

No	ハンドルネーム	コメ ン ト
25	シルバーポストク	任期付きのプロジェクト研究で雇用される不安定な身分が多く、若い人が基礎研究に没頭できる環境にないのが問題
26	部外者	基礎研究を本当に盛んにしたいなら、このセッションに各省庁の役人をパネリストに招かないも、内輪で話しても進みません。または、ノーベル賞受賞者に働きかけて声明を出すことを検討すべきです。
27	そもそも	上限なんてないので十分と思うことはない
28	匿名	大学の教職員は、会議や雑用に追われて、満足な研究をする余裕が無いのが現状です。文科省が大学をコントロールしようと過剰な干渉をしている事が問題ではないでしょうか。
29	修士	基礎研究は面白いし続けたいけど、ドクター行った後の先が見えないのが怖いです
30	博士学生	役に立たない、知的好奇心を満たすためだけに、税金をどのくらいつかうのか、と言われると、国家としてはすでに余裕がないようにおもいます。やはりなんらかの形で役に立つ可能性がある、というプレゼンテーションが必要だとも思います。実際に役に立つかは別でよいのですが。
31	教授	うちの大学では 20 代 30 代の若手研究者向けのポジションが非常に不足しており、深刻な問題だ。
32	企業は	現状、基礎研究にどのくらい寄付をしてくれているのでしょうか？
33	学会が研究支援の団体となつては？	良い研究に対する支援を学会が積極的に担うため、クラウドファンディングなどを含めた支援の仕組みを提案したい。ただ、今のようなボランティアベースの運営では難しいと思うので、アドバイスや審査のできる専任者のいる事務局があると良いと思います。そういう団体へのキャリアパスも生まれます。
34	納税者	私の血税はあなたを教授にするために払ってるんじゃない。還元してくれ。
35	こ	研究費もちろん大切ですが、基礎研究にじっくりと取り組むためには、任期付きでない常勤のポストに若い方が着きやすくすることが何よりも重要だと思います。
36	匿名	試薬等々が非常に高価に感じて購入を渋ります
37	基礎研究費	長期安定は、本当に重要です。
38	修士の学生	特にポストクの人達の不安定さや将来のポストの少なさを見ているとどうしてもドクター進学を躊躇してしまいます。
39	学	ダーウィンの様に、一生定職に就かずに、研究に取り組みたい（夢）
40	佳境	やる気のある人が残るのはいいが、研究進める気がない人が任期なしで居座っていると若手にとってはとても厳しい
41	シニア助教をきらないと	人材の流動はうまれない
42	男性研究者の方々	若手研究者の時、結果が求められる中、家族サービス等は充分にできましたか。
43	シルバーポストク	任期と流動で研究キャリアが積み上がらない
44	某准教授	研究費があれば改善するものでしょうか？新学術の計画班の先生方、実感はいかがですか？
45	それでも基礎研究	自分の在籍する大学では、アントレプレナー養成や産業界で活躍するイノベティブな人材を育むことばかりに尽力していて、知的好奇心を満たすことや純粋に研究がしたい学生を支援するシステムが皆無に近い。こういった状況がさらに基礎研究を志すモチベーションを低下させる。
46	KS	海外の雇用システムと比べるとどうなのですか？
47	部外者	大きな成果を生み出す基礎研究を振り返ると、成果の創出に時間を要しています。省庁は 3～5 年での数字での成果を財務省などから求められるため、数字に繋がる短期的な成果を生み出しやすい小ぶりの研究に注力する傾向が強いです。個人単位でのアプローチでは、財務省を含めた省庁は動きません。
48	地方私大	うちは任期なしですが、怠けて研究をやらない人がいるのも事実。業績評価をボーナスに反映させるなど、適切な評価方法が必要では？
49	ノーベル賞	国家としては、ノーベル賞受賞者を輩出することにより、経済的にはどのようなメリットがあるのでしょうか？
50	fy	誠実な研究者を選別するためにも研究者の評価を何によってなすのかというのが、大切なのだと思う。評価軸は何が適切だと考えますか？

No	ハンドルネーム	コメント
51	評価しぱり	大学は自己評価外部評価など評価評価で金縛り、これは研究費や大学院生の処遇にも波及していて、論文発表、学会発表の数を競う風潮、セコイ発表がふえている。
52	某私立大院生	生命分野ではやはり国立大学が国から多くお金をもらえていると思います。私は私立大学の院生ですが、お金がないことには研究ができません。この差は仕方ないのでしょうか。
53	業績評価	業績は論文数だけでなく使ったお金、人数で割ってみたら？
54	コアファシリティ	共同で使える施設にもっと予算を。
55	p	研究費など既に研究携わっている人への投資もだが、高校生などが早いうちから将来の研究に興味を持てるような制度への投資も不十分だと感じる。
56	普及のために	ホリエモンのようなマネジメント上手を呼べばいいのでは。
57	図書委員	ジャーナルの購読費、論文掲載費用の高騰も問題だと思います。大学教員に配分される運営費の4割以上がジャーナル契約用の費用として引かれています。
58	ポスドク	優秀な学生さんが研究者の不安定な立場を嫌って博士課程にすら行かなくなっているのが現状と思う。いかに身分を安定させるかが、優秀な人材の確保に重要だと思う。
59	任期制	任期制が素晴らしいシステムならば、官僚が身を以て証明してほしいですね。

【研究にまつわるお金の話】

- 日 時：2018年11月29日(木) 11:30～12:45
- 会 場：パシフィコ横浜 会議センター 3階 301
- 参加者：約280名
- 講 演：小林 武彦（日本分子生物学会キャリアパス委員会 委員長）

ランチョンセミナーでは、まず小林委員長から、第4回日本分子生物学会男女共同参画実態調査(回答数1,788名)の結果をサマライズしていただきました。女性の研究者が少ない理由として、「家庭と仕事の両立が困難」「育児・介護期間後の復帰が困難」。対策としては「可能な限り業務の効率化を図る」「ライフイベント中の研究者の生活環境を整備する」という、これまでも当委員会で提唱してきたこと以外に、生命科学系では他分野と比べて「任期付き」の職が30代を超えても多いという特徴が紹介されました。また、指導的地位の女性比率が低い理由として、男女の意識のずれがある、つまり「上司として女性が望まれない」「評価者に男性を優先する意識がある」と女性は思っているが、男性は必ずしもそのようには思っていないという結果が示されました。そして先進国で女性研究者の割合が最低の日本で、女性比率改善のために行うべき措置として、「業績評価におけるライフイベント等の考慮が必要ではないか。研究支援者の配置。女性を積極的に採用する」こと、そして、「多様性の受け入れ。無意識のバイアスの自覚から離れていく」ことが重要だろうということでもとめられました。

次に今回のテーマ『研究にまつわるお金の話』に関するアンケート結果の分析に移りました。例年のアンケート調査からここ数年で関心が増えていたものの、取り上げにくいテーマであった研究に関する「お金」を今回テ

マとして取り上げ、8月30日～9月12日にアンケートを実施しました。回答者数は608名（学生111名、管理職でない方（NPI）257名、管理職の方（PI）240名）で、最近のアンケート調査の中でもかなり多くの回答が寄せられ、皆さんの関心の高さがうかがわれました。まず小林委員長から、このお金に関するアンケート結果のサマリーをしていただきました。前半は、大学院生の生活費に関するお金の話、後半は研究費に関する話です。大学院生で学振のDCをもらっている人は回答者の3分の1で、DC以外の方でサポートを受けている人の金額は4万～20万円と大きく差がありました。卒業後の進路は以前に比べて、アカデミア指向が若干減り、企業や公務員への進路希望も増え、進路に多様性がでてきていると分析されました。非アカデミアで就職を決めている方・企業にお勤めの方のアカデミアに行かない理由は「収入が不安定」だからというのが一番多かったです。また、「減少傾向にある博士課程進学率は、どうしたら増加すると思うか」については、「経済的サポートを充実させる（授業料も取らない）」「博士号取得者の就職を有利にする」という2つの方向性が示されました。「PIになるために必要なものは何だと思うか」について、Non-PIは、「研究実績、人脈、研究費、人間性」と回答、PIは「研究実績、運」でした。また、PIに対して「研究室運営について困っていること」は、「継続して研究費を獲得する難しさ」「PIが研究・教育以外の雑務にやりくりする時間の多さ」「研究費の採択率の低さ」が上位3つでした。研究費については「競争的資金の集中」「競争的資金の配分額」「研究分野の多様性の欠如」が起こっているのでは、との不安・不満の声があり、ランチョンではトップダウン形式で研究分野がきまる日本医療研究開発機構（AMED）や、新学術領域研究について取り上げることにになりました。

その後、パネリストが登壇し、ランチョンセミナーの参加者とケータイゴングを利用した双方向性のパネルディスカッションが行われました。議論のテーマとして、事前アンケートの結果や自由記載の内容を踏まえて、以下のトピックスを取り上げました。

「大学院生の生活費と研究を支える学振特別研究員DC（若手研究者への提言）」「若手向けの研究費は必要だけどシニア・ミドル向けの研究費って必要？」「AMEDと新学術領域研究の紹介」「研究費が不足して困ったときの対処法」「研究費の選択と集中に関する是非」「科研費審査システム改革 2018 の紹介」、そして最後に、「公的研究費でどのような研究を主としてサポートすべきですか？」という質問を問いかけました。

「大学院生の生活費と研究を支える学振特別研究員DC（若手研究者への提言）」については学振の審査の公平性について、ケータイゴングの質問に入りましたが、パネリストたちからは①申請書の体裁と内容がまず基本として重要、そして、②業績は学会発表もありだから、学会に行こう、そして、③学会で発表や質問を積極的に行い、ビジビリティを上げよう、特に「質問」でもビジビリティは十分に上がる、若手の皆さん頑張りましょう、ということで意見がまとまりました。

「若手向けの研究費は必要だけどシニア・ミドル向けの研究費って必要？」のテーマでは、①若手向けの研究費は必要だけど、同時にアイデアがないと有効には使えない、②シニア・ミドル向けの研究費も重要で、それは若手の雇用費につながり、これも結局若手のサポートにつながるというご意見ができました。

次に、事前アンケートで新しい研究費の紹介をしてほしいという意見を踏まえて「AMEDと新学術領域研究の紹介」をしました。まず小林委員長から、AMEDについて、医療に関係する9個の統合プロジェクトを見識のある専門家をボスとしてトップダウンで研究を組織するというAMED特有のしくみを説明していただき、採択経験のあった司会から、設立当初と比べて現在は、臨床の出口指向だけでなく、基礎研究が重視されていること、現状として若手研究も多く採択され、若手研究者が応援されていることが紹介されました。一方、トップダウンではなく、ボトムアップ式の科研費の利点（応募者が多いと研究費が増えるなど）も分析・紹介されました。新学術領域については、同じようなテーマでチームを組んで行う研究、という基本概念が領域代表経験者から説明されました。しかし、枠が少なすぎる、若手が入る余地がない、と問題点が指摘された一方で、新学術の最終評価には、若手育成をしたかが問われる、という矛盾が指摘されました。新学術は枠が小さいが、やはりビジビリティを上げるため、申請することは必要、との意見が繰り返されました。

次の話題「研究費が不足して困ったときの対処法」については、パネリストと会場の参加者から意見をいただきました。①共同研究をやる、という意見は多く、②科研費（や民間助成金）を次年度に繰り越しておく、③限られたお金の中でできる研究を絞る、③論文を書く、あるいは新しいことを勉強する、などの意見がだされました。パネリストから、「研究費の話は、この業界の偉い先生がたくさん国会議員になって、財務省に影響力を及ぼさないとダメじゃないですかね」、という発言があり、お金の問題は文科省のみに働きかけてもだめで、財務省に働きかける動きを作らないとだめではないか、との意見もできました。実際にアメリカではこのようなことは行われていて、それくらいやらないと、国家のポリシーは変わらないだろうとなりました。この流れを受けて、会場から、「分生党の結成」、「胡桃坂先生、ぜひご出馬を」とのコメントが出てきて、会場は大いに盛り上がりました。

次に「研究費の選択と集中に対する是非」についてのトピックスを取り上げました。その結果、高採択率・低額な研究費を、という回答が圧倒的に多くなりました。研究費という研究基盤が保証されていないというのは大きな問題、もちろん低額でも安定的にもらったほうがいい、という意見が大半でした。次に、分科細目がなくなって大きな枠組みに変わり、異分野の審査員が審査することになる「科研費審査システム改革 2018」については、①知り合い同士の談合みたいなものなくなる、②異分野の研究者にもわかりやすい提案をするようになる、という肯定的な意見が多くなりました。

そして最後に、「公的研究費でどのような研究を主としてサポートすべきですか？」という質問に対しては、「将来実用化につながる可能性のある研究」「実用化には関係なくても生物学の神秘を追求する研究」の両者をバランスよく(50:50)といった意見が最も多くなりました。「実用化には関係なくても生物学の神秘を追求する研究」が二番目で、「将来実用化につながる可能性のある研究」のみをサポートする意見は非常に少なかったです。

まとめると、学振特別研究員申請に向けても研究費獲得に向けても、若手研究者が人前で発表や質問する機会を与えることが、学会の重要な役割のひとつで、それはその研究者のビジビリティにつながり、それが将来につながるということが認識されました。そして実際に研究費を増やすには、文科省だけではなく、財務省にも働きかけなければ、研究費のことは何も変えられない、ということが指摘されました。また、研究費がないときの対処法の提案や、若手研究者の姿勢についての提言も多く共有され、若手研究者に対し、今後の研究費獲得に向けて、様々な面で積極性が必要である、ということを示すよい機会になったと思います。

（文責：座長・大谷 直子）

〈アンケート〉 集計結果（四捨五入しています）

【問1】 あなたの年齢は？

① 24歳以下	27	17.0%
② 25～29歳	13	8.2%
③ 30～34歳	24	15.1%
④ 35～39歳	16	10.1%
⑤ 40～49歳	41	25.8%
⑥ 50～59歳	29	18.2%
⑦ 60歳以上	7	4.4%
※ 未記入	2	1.3%
計	159	100.0%

【問2】 あなたの身分・職階は？

① 学部学生	11	6.9%
② 大学院生（修士）	18	11.3%
③ 大学院生（博士）	16	10.1%
④ ポスドク	21	13.2%
⑤ 大学教員（助教・講師・准教授）	39	24.5%
⑥ 大学教員（教授）	27	17.0%
⑦ 研究員	8	5.0%
⑧ 主任研究員・チームリーダー・室長以上	6	3.8%
⑨ 企業	9	5.7%
⑩ その他（技術員・テクニカルスタッフ）	3	1.9%
⑩ その他（記述なし）	1	0.6%
計	159	100.0%

【問3】 このセッションを何で知りましたか？（※複数回答可）

① 学会ホームページ	38	20.7%
② 年会ホームページ	36	19.6%
③ 会報	6	3.3%
④ プログラム集	63	34.2%
⑤ ポスター	8	4.3%
⑥ 会場内の広告	25	13.6%
⑦ フェイスブック	1	0.5%
⑧ クチコミ	5	2.7%
⑨ その他（ランチョンセミナー当日配付）	1	0.5%
⑨ その他（記述なし）	1	0.5%
計	184	100.0%

【問4】 このセッションを開催した時間帯はどうでしたか？

① ランチョン形式でよかった	152	95.6%
② ランチョン以外の時間帯がよかった	6	3.8%
※ 未記入	1	0.6%
計	159	100.0%

【問5】 前半の講演はいかがでしたか？

① とても面白かった	67	42.1%
② まあまあ面白かった	62	39.0%

③ 普通	26	16.4%
④ あまり面白くなかった	0	0.0%
⑤ つまらなかった	0	0.0%
※ 未記入	4	2.5%
計	159	100.0%

【問6】 後半のディスカッションはいかがでしたか？

① とても面白かった	87	54.7%
② まあまあ面白かった	51	32.1%
③ 普通	10	6.3%
④ あまり面白くなかった	3	1.9%
⑤ つまらなかった	0	0.0%
※ 未記入	8	5.0%
計	159	100.0%

【問7】 今後このような試み続けるべきだと思いますか？

① 是非続けるべき	134	84.3%
② 続けるべきだが方法を変えた方がよい	19	11.9%
③ やめた方がよい	0	0.0%
④ わからない	2	1.3%
※ 未記入	4	2.5%
計	159	100.0%

【問8】 このセッションに関する感想をお聞かせください。

- ・他のラボの研究環境を知るきっかけになりました。
- ・研究員・ポジションの問題は役に立つ
- ・このような議論の場はよく考えるとあまりないと思いました。ぜひこれからも、何かしらの形で進歩して下さい。
- ・とても興味深く将来の参考になりました。
- ・研究内容とは違う、面白い話が聴けた。
- ・PIの方が多く、意見交換がさかんでよかったです。
- ・とても面白かった。もっと時間をかけても良い。胡桃坂先生と小林先生が面白い！！
- ・学部生でもわかりやすい内容でおもしろかったです。
- ・大変ためになる話が聞けました。ありがとうございました。
- ・いろいろな情報が得られて良かった。
- ・いい話が聞けました。どうもありがとうございました。
- ・おもしろかったです。研究費の総額を増すために、学会としても頑張ってください。来年の研究費について不安に思っています。
- ・パネラーの方々の、若い方への率直なご意見は参考になりました。前半の講演は、軽妙で良かったです。
- ・リアルタイムでみなさんの意見をきける点がとてもよい。また、匿名で意見を述べられるのも、みなさんの生の声がきけるからよいと思った。
- ・投票やコメントが気楽にできてよかった。参加型でおもしろかった。
- ・このような方法だと正直に意見が言えるのでいいと思いました。
- ・聴衆が聞きたい内容を適切に説明できる。あきない。
- ・パネルディスカッション+聴衆参加型方式おもしろい。
- ・Discussion が、Frank でおもしろかった。
- ・クルミ vs コバタケの会
- ・胡桃坂先生すばらしい。
- ・スレッドで口コミが good
- ・参加できるところがよかったですね。
- ・皆さん、どう考えているかよくわかりました。
- ・当たり障りのない内容でした。
- ・しゃべるパネリストとそうでない人の差が大きい。学生、若手などの意見をもっとすいあげたい。
- ・パネリストも匿名でいいので、もっとぶっちゃけた意見をききたいです。
- ・新学術は地方で孤独にやる研究者にとって分野コミュニティで情報を得る良い機会になるので、少額で良いから入れてほしいです。
- ・新学術でも言われていましたが波及効果がなくなっていると思います。昔は学部・研究所に機器が入って、皆が使えていたが、そういう事がなくなった。
- ・お金が欲しいのはみんな一緒。欲しい欲しいではなくサイエンスの発展にどうお金を使うかだと。
- ・つらいのは皆同じだということが分かった。もっとコメントをベースに議論を進めてほしい。
- ・コメントの選択が、司会者やパネリストの興味に偏っていたように感じます。

- ・研究費をもっている先生たちだけで、正のループにうらやましくなりました。PIがお金をもっていて、機材もそろっているラボと、昔（学生時代）いたラボとのちがいに驚きました。学生当時、そもそもラボに博士の学生もいなくて、学振の制度も初めてきく、といったラボだとドクターのキャリアパスが見えない。（学会へもお金なくてこれないので、このようなセミナーの存在もしらない）
- ・リアルタイムのコメントに「いいね」がつけられると、もっとよかった
- ・事前にコメントやアンケートしてると面白い？
- ・ケータイを使ったインタラクションが活かしきれてない
- ・コメントに対して投票できるとよいと思いました。投票数の多いコメントについて、議論して頂きたい。
- ・なかなか現状の改善は難しい事は、わかった
- ・今の若手は優遇されているなあという感じ
- ・審査で、若手>おじさんなら、その時点で公正性がないのでは？
- ・PIになるための研究費の獲得や努力、こつなどを知らなかった。
- ・ボスの人間性及び頭の良さが最も人生を左右するのではと思いました。財務省は、税金をもっと科学に。年金ではなく…。
- ・個人研究（基盤）vs グループ研究（新学術）にはもっとスポットライトを当てては。限られた予算をどう割り振るかは、難しい問題。
- ・学生の生活費などの「私的なお金」と研究費など「公的なお金」を一緒にたに議論するのは無理があるのでは。前半の講演はアンケート興味深かったが早すぎ。
- ・研究費制度の説明は23分でもスライドを示してやって欲しい。スライドなく話を聞くのはつらい。
- ・お金のアンケート結果も早送りすぎたので添付していただけるといいと思います。
- ・制度について、もう少し、選ぶ側の意見・制度の趣旨を話してほしい。
- ・現状を知るためにとても興味深いですが多くの点で、特に助成金、収入の不安の解消に関してはあまり役に立たないように思われました。
- ・現状について議論しているが解決法についての議論が欲しいと思った。
- ・問題の共有はできたと思いますが具体的に、根本的な解決につながるものが何かできればもっとよいなと思います。
- ・キャリアパスについて理解を深められるのは良いが、具体的になにができるのか打ち出せばより良いと思います。
- ・将来の夢などで研究者は上位だそうです。老人に聞いても似たような感じだそうです。でも実際は会社員になってしまう現状をなんとかしたいです。
- ・出席者の意見も生で披露できるなどよい企画でした。ただ一部、最初から答えが決まっている設問もあったようです。
- ・審査のコメントの開示は、（点数だけでなく）通った場合も絶対に参考になるので是非やってほしい。
- ・私も運営費交付金が少ないことが一番問題だと思う。
- ・基礎研究、教育の軽視は財界の影響。学会も政府に働きかけるべき。
- ・科研費の重複制限を減らす提言をして欲しいです。
- ・結論を提言として文科省、厚労省に送ることはされていますか。そのような「出力」の報告があると良いと思います。
- ・役所の力関係はあれ、財務省の役人を実際に呼ばないと変わるものも変わらないのでは？ DCについては名前が公開されているので、ちゃんと業績の有無を確認して数字で語るべきでは？
- ・分生として、国への提言を出すとかできないでしょうか？ 海外の植物系学会はしています。
- ・分生党作りましょう。博士課程の授業料を安くしてほしい。
- ・出馬うんぬんの話は夢があっておもしろかった。
- ・これからやって国にも働きかけてほしい。
- ・官の人が居るといいとおもう
- ・面白い。ただ、若手とPIと両方向き、2日にわけて若手向きとPI（+非PI）向きに分けてみては。
- ・似たようなテーマでも、何年かの間隔をあけて息長く続けて下さい。
- ・時間が短い。
- ・よかった
- ・とてもおもしろい
- ・面白かったです
- ・良かったと思う。
- ・勉強になりました。
- ・ゆるくてまあ楽しかった。
- ・何事も続けることが大切。
- ・Just fantastic!
- ・特になし

【問9】 来年以降のセッションで取り上げて欲しいテーマがあれば教えてください。

- ・若手や若い人が研究員になるためにやるべきことを聞きたいです。
- ・具体的なキャリア獲得の一例。
- ・将来が見えないミドル研究者の処遇について。
- ・博士以降の道が不安、という声を見かけたので、多様なキャリアパスを描くためにキャリアパス委員の先生方だけでなく、その出身でアカデミア以外の方をパネリストとして来てほしい。
- ・若手の海外進出（留学）について。
- ・海外の研究環境と日本の研究環境の比較
- ・海外と比較して日本の科学の現状や将来について。
- ・企業勤めでも論文になるような研究ができればいいと思うので企業勤めの研究者の話が聞けたらと思います。
- ・良いラボの習慣、教育など。
- ・働き方改革と研究職について
- ・研究者のワークライフバランス
- ・アカデミアにおける複（副）業の取り扱い。→柔軟にしてほしい。
- ・研究費申請について、自分の通るといふ感覚と実際の結果の比較
- ・PIになるための研究費の獲得や努力、こつなどを知りたい。

- ・制度について、もう少し、選ぶ側の意見・制度の趣旨を話してほしい。
- ・奨学金免除制度を復活させるべき。
- ・年金、社会保障、オリンピックへの投資、国家安全、科学、地方自治体へのバラまき…のパーセンテージの改善へのアピール方法
- ・お金の話のつづき。
- ・国民へのアウトリーチ。
- ・バブコメはわりと効くと思います。
- ・政治家（大臣？）、文科省や財務省の役人も参加してもらい、日本の大学研究・教育ビジョンを討論する。
- ・政治
- ・誰を議員に推薦するか
- ・研究者だけでなく役人も交えてディスカッションしてほしい。
- ・今話題になっている研究倫理について。
- ・胡桃坂先生と筑波大学の落合陽一さんの対談を聞いてみたい。
- ・特になし

【問 10】 本大会での属性調査（添付資料）をご覧になった感想をお聞かせください。

- ・まだまだ女性は少ない。
- ・意外と女性が少ない
- ・女性が思ったより少ない。
- ・女性比率は低い
- ・女性は正会員になるとへるんですね。
- ・学生の女性の割合が正会員（全体）で減少したことは、女性が研究を続けていく難しさを表していると思った。
- ・女性研究者が少ないのは、一般と同じ。家事に占める女性の比重が高すぎる。男性の協力ないしは第3者のサポートが得られない限り解消しない。多くの女性研究者は未婚なのでは？
- ・女性管理職…。
- ・希望とのずれは？（女性は本当に研究したいのか？）
- ・なぜ女性比率が低いことが問題なのか？
- ・女性の意見は耳を傾ける必要はあると思うが、比を気にする必要はないと思う。
- ・全体で女性の割合が少なくなるのはあたり前。男女別に母集団をとってそのうちの割合を示すべき。たぶん男女の割合が同じくらいになると思う。
- ・妥当。
- ・現状で十分。
- ・良い結果だと思います。
- ・比較的女性がが増えて活躍している感じで良いと思います。
- ・賛否はともかく、女性がどんどん進出していることを感じる。
- ・他の学会の調査との比較で違いがあるかどうか知りたい
- ・これから分子生物学会が改善をリードしていく学会であると感じた。
- ・図が多く分かりやすい。
- ・見やすくまとめて頂きました。御苦勞様でした。

【問 11】 その他、ご自由にどうぞ。

- ・論文の投稿費も増えているのに、研究費はへって投稿を増やせ、とはいかに…？
- ・研究設備の集約／大学多すぎ？
- ・研究費以外の支援方法
- ・国家公務員・財務省うければよかったな…。(笑)
- ・博士課程から財務省というキャリアも面白そうだと思います。
- ・長期的視点で科学教育政策をさせるべき。
- ・今後は優秀な若手は研究を志さなくなるでしょう。将来が明るくないです。
- ・博士の官公庁採用を増すべき。分子生物学会と生化学会は統合するべきでは。
- ・wifiを強化して下さい
- ・特にはありません。

〈ケータイアナライズシステム〉

〈アンケート〉 集計結果（四捨五入しています）

練習設問：皆さんの属性について教えてください。

・学部学生	19	10.2%
・大学院生（修士）	31	16.7%
・大学院生（博士）	18	9.7%
・ポスドク、助教、講師、准教授、研究員等の非PI職	50	26.9%
・独立助教・講師・准教授、主任研究員等の junior PI 職 （非テニュア・テニュアトラック）	14	7.5%
・教授等のPI職（テニュア）	27	14.5%

・ 企業	13	7.0%
※未入力	14	7.5%
計	186	100.0%

設問 1：日本学術振興会特別研究員—DC（学振 DC）は申請内容によって決まる公平な制度だと思いますか？

・ 思う	95	55.6%
・ 思わない	76	44.4%
計	171	100.0%

設問 2：若手研究者向けの研究支援（科研費の若手研究など）についてどう思いますか？

・ 若手を支援するのは適切（当然）と思う	164	90.6%
・ 若手のみに偏重していると思う	17	9.4%
計	181	100.0%

設問 3：（設問 2 で「若手のみに偏重していると思う」と回答された方）ミドル・シニア向け（概ね 45 歳以上）の研究支援をもっと増やすべきだと思いますか？

・ 増やすべきだと思う	62	78.5%
・ 必要ないと思う	17	21.5%
計	79	100.0%

設問 4：新学術領域研究についてどう思いますか？

・ 良い制度だと思う	60	35.3%
・ あまりよくない制度だと思う	36	21.2%
・ 応募したことがないのでわからない	74	43.5%
計	170	100.0%

設問 5：（学生以外の方）研究費が不足して困ったことはありますか？

・ ある	86	72.3%
・ ない	33	27.7%
計	119	100.0%

設問 6：低採択率で高額な研究費（つまり選択と集中）と高採択率で低額な研究費のどちらが良いと思いますか？

・ 低採択率・高額な研究費	28	17.6%
・ 高採択率・低額な研究費	131	82.4%
計	159	100.0%

設問 7：科研費の審査方法が変わりました。「審査システム改革 2018」の審査方式についてどう思いますか？

・ 良くなった	31	19.5%
・ 悪くなった	17	10.7%
・ わからない or 審査システム改革 2018 を知らない	111	69.8%
計	159	100.0%

設問 8：公的研究費でどのような研究を主としてサポートすべきですか？

・ 将来実用化につながる可能性のある研究	5	3.6%
・ 実用化には関係なくても生物学の神秘を追求する研究	55	39.6%
・ 上記両方の研究をバランスよく（50:50）	75	54.0%
・ わからない	4	2.9%
計	139	100.0%

コメント一覧

No	ハンドルネーム	コメ ン ト
1	cak	海外のように有名人がドーンと投資したり、科学への投資がお金持ちの中でステータスにならないでしょうかね！
2	.	アンケート受付期間短すぎませんか？ n 数が少ない。進学を聞く質問はアカデミアの中でも留学かどうか聞いた方がよいかと
3	f	むりやり女性比率をあげて誰得？
4	Aaaaa	先生方が給与サポート大事だと本当に思われてるなら具体的に行動を起こしていただきたいです
5	学生	大学院を奨学金で行くにしても返すのも大変だなと思います。
6	無名	私の研究室も年中ケチケチキャンペーンをしています。
7	YUKI.N	奨学金引き落としが 25 日にあって、預金残高が 130 円です助けてください
8	とりにー	お金が無さすぎて FBS すら買えません。助けてください。
9	大学院生です	ボスが何もせずに年収 800 万なのになんで実験してる僕たちはタダ働きなのですか？
10	PD	科学者は清貧であるべきという考えは改めた方が良いでしょう！
11	HT	公平な制度であっても、研究室で申請書に対するサポートがあるかないかで変わってしまうのでは？申請書慣れた PI が手を入れた申請書には、普通の学生では勝てないと思います
12	うーん	完全な公平はあり得ない。それを考えると十分では？
13	Lemon	DC 本当にありがたいです
14	学部学生	周囲に、博士後期課程進学は就職や経済面で大変と言う人が多いですが、本当ですか。
15	。	DC 関連の仕事をしている方の生徒が優遇されている
16	学振	DC は不公平な制度だ。有名ラボなら研究内容は良いに決まってる。業績はあるに決まってる。PI のチェックなんて入るに決まってる。落ちた自分の僻みです。
17	SK	前から気になってたんですが、ラボに破産のような概念はあるのですか？あるとしたら具体的にどういことが起こるのですか？
18	Hdy	何故 DC → PD の転換で給料が上がらなくなってしまったのですか？家庭持っていると生きてくのがきつすぎです。
19	無名	質問しても誰だか分からないことも多いのでは？
20	nk	不思議な勝ちというのはありますが、負けた申請者はやはり問題があるのだと思います
21	東工大	大学の授業料が 10 万値上がりしました。サポートどころじゃないですね。
22	DC ゲットだぜ！	頑張って書いた学振申請書はボスドクの先生や PI に跡形も無く修正が入りました→2 回目で通りました。
23	ちょっと年寄り	日本語でしっかり文章を書く力は大事です。これは自身にも言いかせています。
24	博士号取得者の就職を有利にするには	メディアで博士号取得者の有能性をアピールしてみてもどうでしょうか？世の中には、博士号取得者がコミュニケーション能力に欠けている、頭がかたい、勉強しかできない、みたいに偏見を持っている企業人も少なからずいるようです。しかし、自分はそうは思いません。企業で使える能力は養われると思います。
25	DC	確かにラボによるところはある
26	Lemon	積極性はとても大事、ということですね。
27	Hdy	若手に支援しても結局お金はラボに吸い上げられるんですよー。
28	胡桃坂先生	すごく面白い。コメントに味がある。講演会をやってください。
29	りんご	17 番さんのお話気になります、ラボに破産はあるのか、あったらどうなるのか
30	伊達正夢	研究費審査システムは、破綻している。パネリストのコメントは、きれいごとだと思った
31	DH	研究費を増やすのは、年代別の問題ではないと思う
32	当事者	指導層に余裕がないと、教育に力が入れられません。

No	ハンドルネーム	コメント
33	助教	助教募集中ですが、まったく応募がなく困っています。
34	将来性が重要では？	学生に対する目先の給料やサポートよりも、将来つけるポジションを増やすべきではないでしょうか。
35	Lemon(DC)	立場を考慮した配分も大変なんですね…
36	ハンドルネーム	学生で奨学金の返済がある人、いくらくらいですか？1000万以上の人なんてやっぱいないですよ。
37	ー	より高確率で採択される、低額の研究費種目があるとありがたいです。
38	atom	なにをもって支援か。ビジョンがみえない。若手には100パーセント金銭的にも環境的にも研究に集中できる環境を。それで次のキャリアが構築できないなら、本人の問題であり、それならドロップアウトすればよい。別のキャリアを構築すればよい。別に死ぬわけじゃない。
39	ミドル	人を安定して雇用できるようなミドル向け研究費を増やしてほしい。これは若手のためでもあるのでは。
40	ミドル	若手が減っていることが重要な問題です。
41	若手の方が取得した研究費に関して	ボスが若手の研究費はラボのものだと言い切っていますが、それは本当なんですか？大学院生
42	はくし	こういうイベントに文科の人とか呼ばないのですか？
43	A	企業に就職した同期と比べて給料は少ないです。もし研究が好きな人でも、慎重な人なら給料の低いアカデミアには残らないと思います。
44	A	独立准教授です。若手とシニアの間に立ちはだかる40の壁に直面しています。若手枠のように中間層をターゲットとする研究費も欲しい。
45	ns	申請書作成に力を入れすぎて、実際の研究がすまないことはないですか？本末転倒？申請、審査疲れしてないでしょうか。
46	学部生	現所持金12円。来年以降も生活費と学費進学費を捻出したら他には何も残りません。
47	41の話	それほんとに絶対ダメです
48	YUKI.N	トップダウンでもいいですが、トップがダメだと全部ダメになるのでは…
49	あいう	前に教授が時給半額という条件で受け入れるというような話を留学生にしていた。研究職が闇労働とならなければいいが…
50	fy	ミドル研究者が研究費を得て恣意的に自身の研究室の若手に与えるのは、公平性の観点で問題があるのでは？
51	若手40代	学生への経済的支援は、企業との人材獲得競争という点でとても重要だと思います。現状、優秀な学生がどんどん企業にとられているように見えます。
52	Hdy	AMEDっておじさん達の為の研究費？若手が参入する余地があるんでしょうか？
53	AMED	数年で結果を求められて報告書も多くて大変
54	伊達正夢	AMEDの春と秋の調整費のシステムは、研究費の配り方として、ほんとにダメなシステムだと思う。
55	→47	PIがそのような考え方をされてる場合、改善していただく方法はないのでしょうか。
56	PD	企業は仕事初心者の人間にもきちんと給与を払う。なぜ大学院に行く人間だけ学費持ちだしなのか？せめて博士に行く人間には全員学振レベルの給与を与えるべきと思う。
57	えーめど	生命科学と医学が同義になってきているが、理学系の研究費枠を増やすと、自然に基礎研究も充実すると思う
58	dh	うちの教授は、どうせ出したって当たらない、と言って録に申請すらせず、私と助教の科研費と財団にたかる屑野郎です
59	YUKI.N	申請書描き続けてるうちに研究時間が削られるのでは…
60	Hdy	AMEDの採択には特許を持ってるかどうかがとても重要だと聞きましたが本当？？
61	胡桃坂先生	good job
62	AMED	AMEDって名もない私大はリーダー大学を通してしか申請できないんだっけ？
63	DC	申請出さなきゃ採択もない
64	修士	56に賛成！

No	ハンドルネーム	コメ ン ト
65	dh	AMED や新学術などの大型予算は、所属期間は判断基準に入りますか？うちのような、無名の底辺私立大学にもチャンスはあるのでしょうか…
66	→ 55	話が通じないようならハラスメント窓口に行くしかありませんが、ご自身の立場も大切に考えてください。
67	Hdy	昔の特定領域と何が違うんですか？
68	YUKI.N	新学術領域に申請したら「前例がない」って落とされたって話が…。新しいとはなんなのか。
69	atom	新学術の若手枠を作るとよい。代表などもすべて若手で構成。
70	ミドル	新学術が無くなるなどのうわさはありますが、日本型グループ研究はなくなると思います。
71	Hdy	そう！通らない！今年こそうちの先生の領域を通して！！
72	新学術	公募が少ない、分野がマニアック。特定領域の方が分野が広がったと思う
73	研究報告書について	「ごめんなさい色々こんなことあんなことやりましたが全て Negative Data になりました。結果出せませんでした」と報告書に書いたら怒られますか？期限内に結果が出せる自信が無くて、申請を躊躇してしまいます。
74	ミドル	文科省の人間来てますよ。ちゃんと伝えておきます。
75	若手 40 代	新学術領域なくして全部科研費じゃダメですか？
76	私大	私大ブランディング予算の次はどうなるのか？
77	いも	パネリストのコメント、無難すぎて、申し訳ないけど、ちょっとつまらない。
78	運営費交付金	科研費よりも AMED よりも運営費交付金の減らしが止まらないことが問題
79	50 代若手	新学術の公募のある割合はお友だち優遇にみえます
80	PD	じゃあ、財務省の人間を呼べば良いのでは？
81	g	何歳まで若手？
82	Hdy	ちなみに若手って何歳まで？
83	名無し	文科省の役人よりも財務省の役人を呼ぶべきでは？
84	パネルの先生方へ	学生、若手 PD に対する支援不足についてもっと議論してください。コメントの半分くらいは学生の不満だと思います。
85	しゃべり過ぎと言う胡桃坂先生	なんだかんだ一番しゃべっている。が、マイクを取った時のドキドキが止まらない
86	新学術	計画と公募の重複応募を認めてほしい
87	dh	そう、出さなきゃダメなんですよ！聞いてっか？この屑野郎！
88	atom	研究費がない場合はお金のかからない研究をすればよい。
89	年寄り	政治にもう少し皆んな関心を持たないと、研究環境はよくなりません。
90	YUKI.N	次世代かけられないの、本当に苦しいです。
91	失われた世代 40 代	最初は運営費交付金で雇われていましたが、その後ずっと競争的資金で任期付きで長らく彷徨って生き続けています。つらい。
92	→ 66	ハラスメント窓口行きましたが、まだ結果は出ていません。日本有数の研究機関で勉強させていただいているので、そういった自浄作用があると期待したいです。ありがとうございます。
93	ぶろ	雇用人数を減らしてでも運営費交付金増やしてほしい。
94	博士課程	省庁に行くことも考えているのですが、どこに行くのがお金の課題を解決する上で良いのか何かご意見ありますでしょうか？
95	hoge	研究費の話は、この業界の偉い先生がたくさん国会議員になって、財務省に影響力を及ぼさないとダメじゃないですかね。
96	学生時代からリッチな経験ない人間	共同研究
97	atom	研究費がないならお金がかからない研究をすればよい。そういうネタを考えておくのも必要かと。

No	ハンドルネーム	コメント
98	研究費	民間の一部の研究費のように、使用年限をなくすか、繰り越しを5年くらいに伸ばしてほしい
99	tu	グループ研究をしている先生に助けてもらいました。
100	50代若手	人に泣きついたことは何回もあります
101	A	研究費が途切れた時は例年にまして財団助成に出しました。焦って空回りしました。それ以来、お金がなくてもできる研究を一生懸命考えるようになりました。
102	大学院生	公務員になって、自分のところのようなくだらない研究をしているボスのラボにお金がいらないよう、もう少しいい使い方をしてもらえるところに渡るよう頑張ります
103	無名私大 PI	困らなかったのは、たまたま研究費がゼロにならなっただけです
104	dh	過去の偉い人の不正のお陰なのか、科研費の使用目的が関連研究に限られるようになって、新しいテーマに着手しづらくなったのが辛いです
105	名無し	分生党の結成
106	hoge	胡桃坂先生、ぜひご出馬を（笑）
107	山中先生	総理になって欲しい！切実に。
108	屑野郎と誰かさん	ここで喧嘩しない
109	Ns	お金が見こせなくて一番辛いのは、雇用です。どんなに一緒に働きたくても、給料を払えないのが、つらいです。
110	今はボスですが	昔はボスのゴーストライターをしてよく申請書を書いていました。その際に「大風呂敷を広げればいいんや！」と言われていました。実現性のない申請書に辟易したものです。
111	Hdy	じゃあ胡桃坂先生、是非に政界に！先生のテンションなら行けそうです。
112	大学生	国に頼りきりになっているのは気のせいでしょうか。日本ではなかなか難しいかもしれませんが
113	配分機関のもので すが	お金に切れ目ができることはやはりあるかと思います。その時つなぎのためにどういったサポートがあればいいのでしょうか？お金が切れると折角組んだチームを解散しなければならないのは勿体ないとは感じています。
114	院生	分生 فقطと狭いので、科学技術推進党を。
115	企業	経営陣からオープンイノベーションやれやれ言われてお金の使い道に困ってます。先生方からも研究の営業活動お願いします！
116	はくし	他分野だとクラウドファンディング型の資金が人気出てきてるイメージ
117	採択率	低額すぎると人を雇用できない。中程度の額と採択率がよい
118	Hdy	採択率と額の関係性は一概には言えないですね。若手向けに偏らせるのはさすがにやりすぎ。
119	胡桃坂先生	の元で修行させてください m(_ _)m
120	ミドル	この質問は良くないですね。こういう結果になったからと言って国が動くと思えません。
121	tu	人件費もまかなえる額がないと。
122	研究費	ミドル以上は、プロジェクトではなく、人に対して、長期の研究費を保証する。ポストドクも安定して、重複応募も減る
123	50代若手	研究員を1人雇えるくらいの中くらいの研究費を増やして欲しい
124	YUKI.N	流行りが次世代での絨毯爆撃になっていて、お金がみんなにないと話になりません。今日本の研究者のほとんどが竹槍で戦ってるのではないのでしょうか。
125	PD	我々は常に世界と競争しており、先を越されるのではないかという不安と戦っている。そこに輪をかけて金銭面で不安を持たせるなんてナンセンス。衣食足りて礼節を知るだと思う。
126	ある PI	低額な研究費とは、どのぐらいの額を想定しているでしょう。例えば、科研費の基盤のほとんどは、外国と比較すると、そもそも高額研究費ではありません。
127	名無し	研究の規模にあった申請をしていますか？とりあえずたくさん、とれるだけ、って申請していませんか？
128	いも	研究費のゴーストライターもあれば、審査員のゴーストレビューアーもある。
129	学生	日本の基礎研究のお金の問題は、一般の方のサイエンスに対する理解の無さが根底にある気がします。

No	ハンドルネーム	コ メ ン ト
130	科	科研費とらない人はどうやって金を稼いでいるのか？
131	Hdy	学振みたいに自分で自分を雇用できる制度をもっと増やして欲しい。
132	名無し	国のお金に頼るのではなく、そら以外の研究費の収入源を見つけなくてはいけないのかも。
133	高額な研究費	昔は年度末になるとお金が余って、つまらないものまで買わされたこともありました。
134	申請書	新しい研究業績の書き方を教えてほしい
135	あ	低採択率の現状ではお金もらえてない人の数の方が多いので、多数決とったら高採択率希望者が多くなるのは当然の結果
136	若手ポスドク	業績リストは従来通りでいいと思う。今までの積み重ねを重視するのは悪いことではないと思う。
137	年寄り	合議制で決めるのは良いが、負担はたいへん
138	Tfuji	科研費の申請書に対するフィードバックとして、全てのコメントを開示してほしい。無いなら無いのも開示しなくちゃ、なんか書いても。アメリカだと、レビューコメントを返してくれるとききました。
139	小林先生	学会でよい質問をしたら、科研費のポイントアップしてほしい
140	tu	短期間では判断できない。
141	業績欄	なんで基盤 C や若手研究で業績欄が無くなったんでしょうか?! もちろん業績が全てでは無いが、もともと業績が全然無い人に金をやっても結果は出ないでしょう? ステップアップ出来ないじゃないですか! はっきり言って愚かしいですよ! 改悪!
142	質問	質問って評価されませんよね
143	名無し	生物学がどんどん複雑化していくのに対してわかりやすい申請書を求める風潮はいかななものかと思えます
144	前に出たくても	それを許さないボスの場合どうすればいいんでしょうか
145	科研費ポイント	コメントの時間が無いなら各項目の点数くらいは教えて欲しい。
146	50 代若手	新しい科研費の審査の良し悪しは来春の結果を見てみないとわからないですね
147	審査	異分野に面白く同分野に重要と思われるように書く
148	dh	コンピュータ関連の業界では、学会発表が我々の論文に相当しますが、ライフサイエンスでは学会のステータスが余り高くないと思う
149	Ns	学会での質問は、知的好奇心にもとづくものがないなあ。
150	Hdy	おもしろかったです！
151	財務省	我々の意見を決定するのは、国民の皆様のご意見です
152	物理系の学生	最近物理とか情報科学が生命科学に貢献しているが、学振とかで出す審査区分にすごく困る。特に学振は物理とかの区分で出すしかないので評価がかなり不安定でしんどい。
153	は	研究って莫大なお金かかるわりに結果出ないものが多いですよ、お金取れない研究はしなくていいのかもしれない
154	BMED	医学系の学会のパネルディスカッションは付度コメントだらけだけど貴学会はざっくばらんで楽しかったです。当日チケットが最後まで残ってましたがまさに残りものに福があるという感じでした。
155	競争的資金	のせいで、むしろ予算がないのに給料もらってる人が増えているのでは？
156	151 は	ジョークとしては面白い
157	tu	送りこむのは経団連
158	DC	最後の質問、答えなんて分かりきってる
159	145 について	各項目の点数は分かりますよ。落ちた場合どこが悪かったかは分かる。素人ですか？
160	部外者	2～3 年でポストが変わる省庁に ph D が増えても変わりません
161	いろいろ考えるきっかけになりました	来年も是非このようなディスカッションをやってください

バランスの取れた研究環境を築くために ～2018属性調査から学べること～

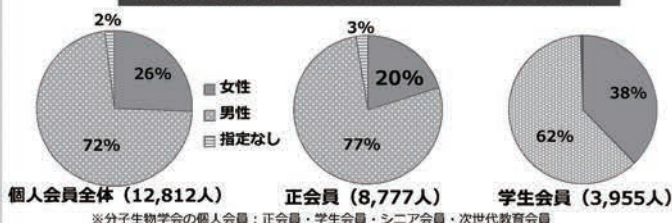
疑問：シンポジウム・ワークショップなどのオーガナイザー・口頭発表者における女性比率は、学会員全体における女性比率と比べて低いのではないのでしょうか？

大学や研究機関での男女共同参画を推進するために、学術研究発表の場である学会の大切な役割の一つは、優れた研究に対して、性差などに関係なくより積極的に発表し、評価される機会を創出することである。上記の疑問をもとに、日本分子生物学会キャリアパス委員会は、年次発表者が属する性（属性）について、2009年度（男女共同参画委員会/当時）から継続調査を行っている。

第41回年会における属性調査

今回は3,740名が調査対象となった（のべ人数）。年会の演題登録システム（日本語版・英語版）にアンケート設問を設置（回答は任意）。性別、年齢、所属、職階（身分）について、発表者には投稿時に協力して頂いた（3,505名。Late-Breaking Abstracts投稿分を含む）。一部のオーガナイザー等に関する調査では公開情報や本学会会員データ（学会個人情報保護方針に依拠）なども併用した。なおシンポジウム・ワークショップのスピーカーには非会員の演者を含むと共に、本年会において本学会会員と同じ条件で参加・発表する日本生態学会会員もワークショップのオーガナイザー・スピーカー、一般演題の発表者として含まれている。

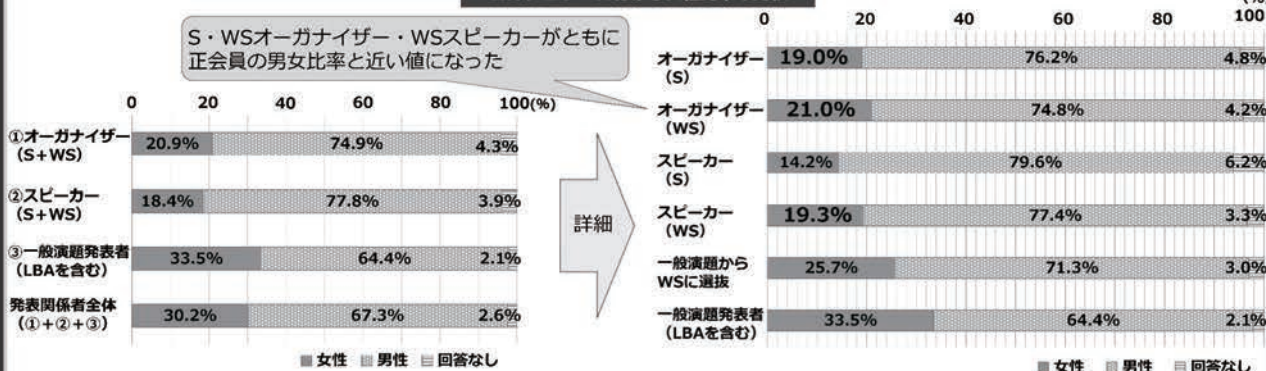
日本分子生物学会会員の男女比率（2018年9月30日現在）



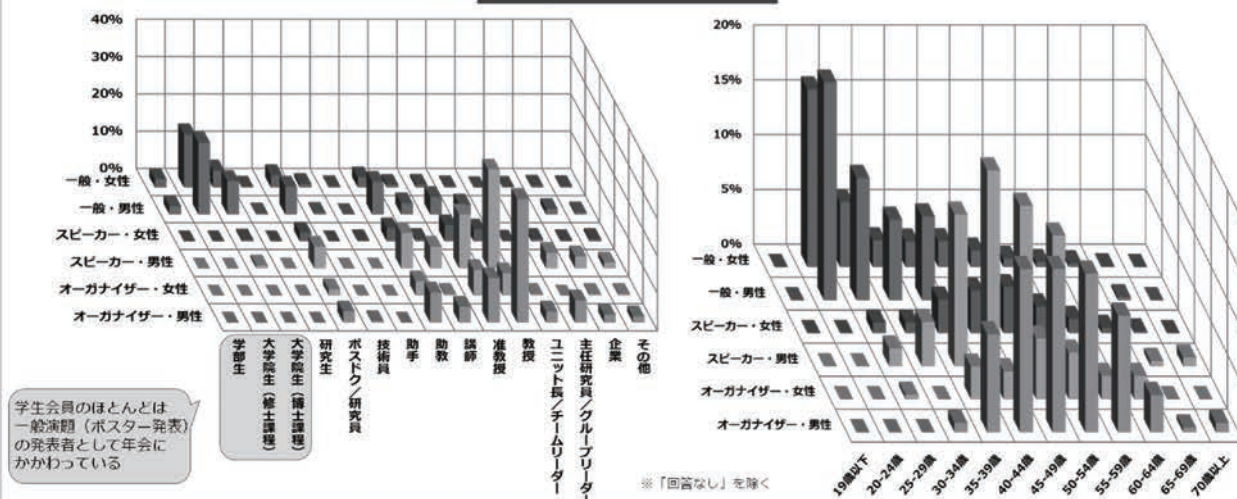
発表者が決まるプロセスの違い

- シンポジウム (S)
オーガナイザー：年会側が検討・依頼（他薦）
スピーカー：オーガナイザーが検討・依頼（他薦）
- ワークショップ (WS)
オーガナイザー：応募者（自薦）の中から選抜される
スピーカー：オーガナイザーが検討・依頼（他薦）
- 一般演題発表者
自発的な申し込み（自薦）

各カテゴリーにおける女性比率の比較



職階・年齢とカテゴリーとの関係



2009年の調査開始以来、『発表関係者全体における女性比率が個人会員全体における女性の割合に近い値を示しているのに対し、スピーカーやオーガナイザーにおける女性比率はそれを下回る』という結果が続いていたが、**今大会ではシンポジウム・ワークショップのオーガナイザーとワークショップのスピーカーについては正会員男女比率に近い結果になった**。オーガナイザーやスピーカーの多くは正会員であることから、実質的には学会会員における男女比率との近似値であったという見方ができる。今後もこのような属性調査結果となることを期待したい。



会員専用ページ ログインパスワード再設定オンライン化のお知らせ

この度、会員専用ページの更なる利便性向上を目指し、ログイン画面「パスワードの再発行」よりログインパスワードのオンライン再設定が可能となりました。

従来、ログインパスワードの再発行には、再発行申請書のご提出から新パスワードの到着まで数日お時間を頂戴しておりましたが、オンライン再設定ではお待たせすることなく即時発行となります。

再設定にはご自身の「会員番号」と「会員専用ページに登録されているメールアドレス」のご入力が必要となります。「会員専用ページに登録されているメールアドレス」宛に再設定を行うページの URL と仮パスワードが送信されますので、こちらから新しいログインパスワードの設定を行ってください。

※「登録されているメールアドレス」が不明または受信不可の場合は、従来通り再発行申請書をご提出いただくことになります。学会ホームページ上から所定の申請書をダウンロードし、必要事項をご記入・ご捺印（自筆の署名可）のうえ、学会事務局へご提出ください。新パスワードは数日中に郵送いたします。

※「会員番号」は、会報宛名台紙または年度会費請求書に印字されております。

個人情報の保護を考慮し、現在登録されているパスワードは電話ではお答えできませんのでご了承ください。

会員専用ページの機能

登録情報確認・変更	学会に登録されている本人情報（会員種別・所属・入会年月日等）を確認・変更できます。
公開情報設定	会員検索で公開する本人情報の項目を設定できます。 （名前・会員番号・会員種別は、非公開の設定ができません）
会費納入状況の確認とクレジット決済	会費納入状況を確認できます。また、未納会費のクレジット決済が可能です。 （手数料は一切かかりません）
パスワード変更	会員専用ページにアクセスするためのパスワードを変更できます。
会員検索・閲覧	以前の会員名簿に代わるものとして、本学会に所属している会員の検索ができます。 （会員が「非公開」設定にしている項目は、検索・閲覧できません）
年会アーカイブ	第38回～第40回（2015～7年）年会の要旨検索・閲覧ができます。 ※第41回（2018年）年会の要旨は本年4月に搭載予定。

シニア会員・次世代教育会員のご案内

本学会では、65歳以上の常勤職に就いていない会員歴通算20年以上の方を対象とした「シニア会員」と、初等中等教育に関わる教員を対象とした「次世代教育会員」の制度があります。

現在の会員種別から「シニア会員」または「次世代教育会員」へ変更を希望される場合は、ご本人からの申請が必要となります。手続きの詳細と申請書のダウンロードにつきましては、学会ホームページをご覧ください。

■シニア会員

以下の条件に該当する正会員は、ご本人による申請が受理された次年度よりシニア会員となります（学会の会計年度は10月1日～翌年9月30日です）。

◎シニア会員の条件

- 1) 申請の時点で65歳以上かつ会員歴通算20年以上の正会員であること。
- 2) 常勤職に就いていないこと。
- 3) 申請する年度までの会費が完納されていること。

◎シニア会員になると

- 1) 年度会費が3,000円となります。
- 2) 年會に無料で参加できます（発表はできません）。
- 3) 学会誌「Genes to Cells」（オンラインジャーナル）を引き続き無料で閲覧できます。
- 4) 総会での議決権は継続されます。
- 5) 理事選挙の選挙権も継続されます。

■次世代教育会員

次世代教育会員は、小・中・高等学校の教員またはこれに準ずる方を対象としています。高等専門学校の教員の方も対象に含まれます。

- 1) 新規入会の際には入会金1,000円を申し受けます。
- 2) 年度会費は正会員と同額（6,500円）です。
- 3) 年會に無料で参加できます。
- 4) 年會で一般演題の発表ができます。
- 5) 学会誌「Genes to Cells」（オンラインジャーナル）を無料で閲覧できます。
- 6) 総会での議決権があります。
- 7) 理事選挙の選挙権と被選挙権があります。

会員種別	入会金	年度会費	年会参加費	備 考
正 会 員	1,000 円	6,500 円	正会員価格	
学 生 会 員	1,000 円	3,000 円	学生会員価格	学生の方
シ ニ ア 会 員	—	3,000 円	無 料	65 歳以上の常勤職に就いていない会員歴通算 20 年以上の方
次世代教育会員	1,000 円	6,500 円	無 料	小・中・高等学校の教員またはこれに準ずる方

※正会員として年会事前登録を完了した後に、シニア会員や次世代教育会員へ変更した場合、年会参加費の返金はありませんのでご注意ください。

第8回(2020年)日本分子生物学会 国際会議支援募集のお知らせ

日本分子生物学会では、昨年に続き、2020年(2020年1月～12月)に開催計画のある国際会議に対しまして支援事業(開催補助金の助成)を行いますので、ここにお知らせいたします。

分子生物学の黎明期には先鋭的な少人数の若手研究者による会議から革新的な発見と数多くの新分野が誕生しました。科学研究におけるグローバル化とインターネットにおける情報共有が急速に進む現代においても、国際会議において研究者が率直に意見交換を行い相互の理解と信頼関係を深めることはますます重要になっています。質の高い国際会議を日本において開催することは日本発のオリジナルな研究を国際的にアピールし、国際的なリーダーシップを担うために重要です。また、若い時から最新の研究と真摯な議論に接することは研究者育成の要の1つと考えられます。本支援は、日本とアジア発の国際会議を育て、我が国の研究を世界に向けて発信する場を設けることを目的として立ち上げられました。

本国際会議支援(開催補助金の助成)を希望される方は、下記の要項に従って、奮ってご応募ください。

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
理事長 阿形 清和
国際会議支援・選考委員会委員長 石川 冬木

■募集要件

1. テーマ：分子生物学に関連した分野において活力の高い議論が期待できるもの。新分野を探索する独自性の高い、萌芽的なテーマも考慮する。
2. 開催規模：参加人数は50名以上400名程度までとし、そのうち外国からの参加者が少なくとも20%程度いること、さらに口頭発表者の中で外国人が3割以上を占めることが望ましい。
3. 開催の形式：
 - 1) 主催者あるいは共同主催者が分子生物学会会員を3年以上つとめていること。教育・研究機関の主催、研究費主催のものは除きます。(組織委員(国内)については、できるだけ本学会への入会を推奨します)
 - 2) 共催：他の団体との共催は可とするが、その場合、参加費に関して分子生物学会会員価格(特に学生会員を考慮されたい)が設定されていることが望ましい。
4. 留意事項：
 - 1) できる限り、国内の若手研究者の口頭発表の機会を作ることが望ましい。

- 2) 会議開催に際しては、分子生物学会が用意している支援システム(JTB 西日本 MICE 事業部による国際会議トータル支援システム)を利用することができる。本システムは、①基本システム代金：23万円(事前参加登録受付・演題投稿受付・カード決済等の基本システム設定)、②オプション/メインHP代金：25万円(全体デザイン・ページレイアウト・サーバ管理12ヶ月・更新メンテナンス12ヶ月)、③オプション/オンライン査読システム：8万円、④オプションその他、などからなります。
- 3) 支援が決定した後は、主催者は各種の報告書・広報ポスター・国際会議HP等に本学会からの支援を受けて開催されることを、表示する義務を負うものとします。
- 4) 採択された場合には、会議終了後、開催責任者にミーティングレポートを執筆いただきます。学会誌「Genes to Cells」に掲載しますことをご了解ください。
- 5) 残金が出た場合、補助金の返還を求めることがあります。

■開催補助金と件数

援助する金額は、一件あたり100万円～250万円。年間2件程度。開催期間・参加予定人数によって金額の変動あり。学術振興会の国際会議等の大型支援を助成された場合は多少の減額あり。
(補助金の使用用途は限定せず自由度を持つものとします。他経費で補えないものが望ましい。ただし国際会議終了後、本学会への会計報告(収支決算書概要)提出の義務を有します。また、分子生物学会から支援を受けたことを、HP、要旨集などに明記いただきます。)

■応募方法

申請書は、分子生物学会ホームページからダウンロードして使用してください。

所定の申請書に、国際会議の目的、形態、予定講演者、おおよその予算規模と使用用途等を記載し、電子データで学会へ提出してください。

■申請書送付先

〒102-0072 千代田区飯田橋 2-11-5

人材開発ビル 4階

日本分子生物学会 国際会議支援・選考委員会 御中

TEL：03-3556-9600

E-mail：info@mbsj.jp

■締切期日 2019年3月29日(金) (必着)

■スケジュール (開催補助金の交付)

- 2019年3月30日：応募締切
- 2019年4月～5月：選考
- 2019年6月：補助金の交付 (予定)

■選考

国際会議支援・選考委員会が選考に当たり、理事長承認のもとに決定します。

国際会議支援・選考委員会

石川冬木 (委員長)、荒木弘之、五十嵐和彦、一條秀憲、佐谷秀行

分子生物学会による、国際会議支援システム (参加登録～演題受付～カード決済／Web 運用) 利用のご案内

分子生物学会では、日本発の国際会議を学会が支援するために経済的支援を行うことに加え、国際会議を開催する研究者の事務的な負担を減らすため、支援システム (JTB 西日本 MICE 事業部による国際会議トータル支援システム /Web 運用) をご用意しております。国際会議支援の詳細は同公募要項の中に書かれているとおりですが、同支援事業の応募とは別に、システムのみを使用されたいとの希望者につきましては、分子生物学会の会員であれば同額での利用が可能です。

システムのみを使用されたい場合は、学会事務局 (分子生物学会 国際会議支援システム・システム利用係り E-mail: info@mbsj.jp) まで E-mail にて、開催概要と連絡先を明記のうえ、お申込みください。(一旦、学会を経由してから、JTB の担当者をご紹介します)

《支援システムの概要》

本学会が JTB 西日本 MICE 事業部と長期契約を交わしたことにより、JTB 西日本 MICE 事業部による国際

会議トータル支援システムを通常より割安価格で利用できます。

- ①基本システム代金：23 万円 (事前参加登録受付・演題投稿受付・クレジットカード決済等の基本システム設定)
- ②オプション / メイン HP 代金：25 万円 (全体デザイン・ページレイアウト・サーバ管理 12 ケ月・更新メンテナンス 12 ケ月)
- ③オプション / オンライン査読システム：8 万円
- ④オプションその他、が利用できます。(メニュー詳細については、一旦、学会を経由した後、JTB の担当者が説明いたします)

なお、この支援のみを受ける場合も、分子生物学会の支援 (システム利用) を受けたことを当該会議の HP、要旨集などに明記いただきます。

特定非営利活動法人 日本分子生物学会 第21期新理事会準備会議記録

日 時：2018年10月31日(水) 13:30～15:20

場 所：TKP 品川カンファレンスセンター 8階 8E

出席者：第20期

杉本亜砂子（第20期理事長）

第21期

阿形清和、荒木弘之、五十嵐和彦、稲田利文（20期庶務幹事兼）、上村 匡、大隅典子、菊池 章、木村 宏、倉永英里奈、胡桃坂仁志、小原雄治、斎藤通紀、佐谷秀行、中島欽一、中山敬一、原 英二、正井久雄、三浦正幸、本橋ほづみ 以上19名

委任状：石川冬木、一條秀憲、上田泰己、後藤由季子、近藤 滋、佐々木裕之、塩見美喜子、鍋島陽一、西田栄介、山本 卓、吉森 保 以上11名

事務局：福田 博（記録）、並木孝憲、山口恵子、金子香奈里

本会議成立について：

杉本亜砂子20期理事長より挨拶があり、次いで稲田利文21期理事（20期庶務幹事兼）より配付資料の確認がなされた。本会議開催の位置付け・成立につき、定款（抜粋）の説明が行われた。本会議は第21期理事会任期に入る前の準備会議ではあるが、その取り扱いが理事会に準ずることが確認された。議事進行については慣例に従い、杉本理事長と稲田庶務幹事が担当することとなった。

21期理事19名が出席し、委任状11名を受理しており、本会議は細則第4章第8条により成立する。

議事録署名人の選任について：

杉本理事長より、議事録署名人として上村匡21期理事と大隅典子21期理事が指名され、承認された。

議 事：

1. 第21期理事長（任期：2019年1月より2年間）の選出

稲田庶務幹事より、フランクな意見交換をするために本学会に関係する一言、例えば学会事業のどのような業務に関わってきたか、分子生物学会への思いなどを副えて自己紹介をしてはどうかとの提案がなされ、出席者全員より自己紹介がなされた。

次いで、杉本理事長より第20期理事会で取り組んだ主な活動4点について説明がなされた。下記(1)(2)は、前期19期理事会からの申し送り案件であったが20期理事会にて一定の方向性を示すことが出来たと考えている。

(1) 国際対応

20期国際化対応ワーキンググループおよび20期将来計画委員会にて『答申』をまとめた。本答申は2017年12月5日開催の理事会で承認され、学会HPで公開しているので参照されたい。

https://www.mbsj.jp/admins/future/20ki_kokusaikaWG.html

(2) 年会開催形式

20期執行部および理事会にて1年以上の時間をかけて検討してきた案件である。理事会持ち回り審議の結果、本年9月14日付にて将来計画委員会提言「年会の開催方針について」、年会開催ルール細目、研究発表に関する指針、以上の3点が承認された。研究発表指針については41回年会に合わせ、すでに年会HP、学会HPで公開している。なお、年会開催ルール細目8.に一部文言追加修正があり、11月27日開催の合同理事会にて最終確認を行った後、すべての提言資料を公開する予定である。

今回承認された「年会の開催方針」は、各年会長の自由な発想に基づいた年会企画を理事会が全面的にバックアップする体制を構築することを意図したものであることが説明された。年会長と理事会との協力体制のもとで、今まで以上に活気のある年会が開催されることを期待している。

(3) 学会創立40周年記念対談

1978年12月に発足した本学会は、2018年に学会創立40周年を迎えた。20期執行部では記念事業として、本学会ならびに我が国の分子生物学草創期からの歴史に詳しい先生方に語り手となって頂き、専門分野が近いお弟子さんとの記念対談を企画・実施した。各対談には執行部から1名がファシリテーターとして参画しており、このたび対談6セッションすべてが終了し、会報掲載、学会HP公開も完了している。ぜひご覧いただきたい。

https://www.mbsj.jp/about-mbsj/40anniv_taidan.html

(4) 日本生態学会との連携について

昨年12月の持ち回り審議を経て、分子生物学会と日本生態学会は、両学会会員の交流と将来の共同研究推進のため連携することになったことが報告された。2018年1月締結から2020年3月までの期間で、学会連携の覚書を交わしている。CRISPR/Cas9などにより非モデル生物の遺伝子操作が可能となりつつあること、生態学分野においても分子生物学的手法が用いられる機会が増加していることなどから、

両学会の人材交流により新たな研究分野の創出につながることを期待している。

生態学会会員（正会員、学生会員）の方は分子生物学会の第41回年会（2018年11月・横浜）、第42回年会（2019年12月・福岡）に分子生物学会会員と同じ資格・参加費で参加することができる。第41回横浜年会にて合同企画ワークショップ・フォーラムが開催されるので、ぜひ参加されたい。

<https://www.mbsj.jp/about-mbsj/seitaigakkai.html>

杉本理事長からの報告に対し出席者よりいくつかの質問が出され、特に上記（2）に関係して活発な意見交換が行われた。

引き続き、自薦・他薦の自由討論に入り、候補としてあがった方々から、本学会の気風や理念をどのように考えておられるか、日本の生命科学全般と国際情勢についてどのような考えを持たれているかが表明され、学会のあり方、自由闊達な年会のあり方、若い人へのアピール等々活発な意見交換がなされた。

事務局より理事長選出に関する細則（第2章第3条）の説明が行われ、再度、意見交換が行われた。21期理事により投票が行われ、第21期理事長として阿形清和氏が選出された。

2. 第21期副理事長の件

事務局より細則第4条（副理事長の設置）の説明がなされた。本件については、阿形次期理事長の要望に従い、次回の定例理事会（11/27開催予定、20期21期合同理事会）で選出することとなった。

3. その他

i 阿形次期理事長より挨拶があり、若い人たちへのアプローチ、本学会をさらに魅力的なものにしていくための取り組みなど、抱負が述べられた。理事各位

のご協力をお願いしたいとのご依頼があった。

ii 出席理事より、以下の意見が提出された。

- ✓ 重要な案件を検討する場合、理事長任期が2年というのは短いのではないか、例えば、新旧理事長の引継を兼ねて一定期間は役員重複の時期があるとよいのではないかと、21期理事会にて今後の議論の状況をみて、法人定款・役員項目の見直しも検討されたい。
- ✓ 学会の名称がこのままでよいのか。学問の変遷に即した変更も考えてもいいのではないかと。

iii オンライン「Zoom 会議」システムについて

本年4月、執行部にていくつかの関連学会が使用している会議システム「Zoom」を導入したことが杉本理事長より報告された。執行部会議、各種委員会の人数であると使い勝手がよい。緊急の場合は理事会人数でも運用可能である。音声・画像が比較的安定しており、セキュリティ面についても、通信はSSLで暗号化され、会議で使用するURLは1回限りの使い捨てであるなど、信頼性が高いといえる。管理画面など学会事務局が担当しているので、使用されたい場合は事務局まで申し出てほしい。

上記、第21期新理事会準備会議の議決および確認事項を明確にするため、この議事録を作成し、議事録署名人はここに記名押印する。

2018年10月31日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
第21期新理事会準備会議

議長	杉本亜砂子	㊟
議事録署名人	上村 匡	㊟
議事録署名人	大隅典子	㊟

特定非営利活動法人 日本分子生物学会 第20期・第21期 合同理事会記録

日 時：2018年11月27日(火) 13:30～18:00

場 所：パシフィコ横浜会議センター 5階「511+512」

出席者：第20期

杉本亜砂子(20期理事長)、小林武彦(20期副理事長)、小安重夫(20期副理事長)、阿形清和[○](21期理事長)、石川冬木[○]、稲田利文[○](庶務幹事兼)、上田泰己[○]、木村 宏[○]、後藤由季子[○]、小原雄治[○]、塩見春彦(広報幹事兼)、中島欽一[○]、中山敬一[○]、正井久雄[○]、三浦正幸[○](会計幹事兼)、水島 昇、岡田清孝(監事)、深川竜郎(庶務幹事)、井関祥子(集会幹事)、石野史敏(41回年会長)

([○]印は21期継続理事)

第21期

荒木弘之、一條秀憲、上村 匡(43回年会長、編集幹事兼)、倉永英里奈、近藤 滋、佐々木裕之(42回年会長)、原 英二、本橋ほづみ、以上28名

欠席者：第20期

五十嵐和彦[○]、大隅典子[○]、貝淵弘三、影山龍一郎、菊池 章[○]、胡桃坂仁志[○]、白髭克彦、菅澤 薫、仲野 徹、鍋島陽一[○]、西田栄介[○]、深水昭吉、山本 卓[○]、吉田 稔、近藤寿人(監事)

([○]印は21期継続理事)

第21期

斎藤通紀、佐谷秀行、塩見美喜子(44回年会長)、吉森 保、以上19名

事務局：福田 博(記録)、並木孝憲、山口恵子、金子香奈里

本理事会成立について：

稲田利文庶務幹事より、理事24名、監事1名、幹事2名、年会長1名が出席し、委任状10名(理事)を受理しており、本理事会は細則第4章第8条により成立する旨報告された。

議事録署名人の選任について：

杉本亜砂子理事長より、議事録署名人として、後藤由季子理事と原英二理事が指名され、承認された。

議 事：

1. 報告事項

1) 20期執行部報告(理事長、庶務幹事、広報幹事)

①理事長報告

杉本理事長より20期の活動全般につき報告が行われた。

(i) 2017年12月、昨年の定例理事会で「第

20期国際化対応ワーキンググループ答申」が承認されており、同骨子版をホームページで公開している。

(ii) 本学会は2018年に創立40周年を迎えた。執行部では節目となる記念事業として、我が国の分子生物学草創期からの歴史に詳しい6先生(関口睦夫氏、由良隆氏、小川英行氏、大石道夫氏、石浜明氏、吉田光昭氏)による記念対談を企画・実施した。この夏、6セッションすべての記念対談が終了し、会報・ホームページにその内容を公開した。様々なエピソードも含めたいへん読み応えのある対談記事となっているので、ぜひお読みいただきたい。

(iii) 災害対応について

- ・2018年6月の大阪北部地震に際し「復興支援ネットワーク掲示板」を設置した。
- ・2018年7月の西日本豪雨災害、および9月の北海道地震により被災された学生会員の第41回年会参加登録費を免除した(45名)。

(iv) 日本生態学会との連携について

分子生物学会と日本生態学会は、両学会会員の交流と将来の共同研究推進のため連携することになり、本年1月に正式な覚書を取り交わした(有効期間は2020年3月末まで)。CRISPR/Cas9などにより非モデル生物の遺伝子操作が可能となりつつあること、生態学分野においても分子生物学的手法が用いられる機会が増加していることなどから、両学会の人材交流により新たな研究分野の創出につながることを期待している旨の説明がなされた。

同契約により、生態学会会員(正会員、学生会員)は分子生物学会第41回年会(2018年・横浜)、第42回年会(2019年・福岡)に分子生物学会会員と同じ資格・参加費で参加することができる。本年会および生態学会大会において、合同企画ワークショップやフォーラムを実施していく。

②会員現況

稲田庶務幹事より、2018年11月1日現在の会員数につき以下のとおり報告がなされた。参考資料として、ここ6年の演題申込み時期の入会者数推移の資料が配られ、説明が行われた。

名誉会員 0 名
正会員 8,763 名 (海外在住 196 含む)
シニア会員 64 名
次世代教育会員 15 名
学生会員 4,034 名 (海外在住 52 含む)
賛助会員 23 社
合 計 12,899 名 (前年総会対比、+ 11)
(* 上記以外に所定の手続きによる休会者 56 名あり)

③生物科学学会連合について

杉本理事長より、10 月 1 日に開催された生科連公開シンポジウム「持続可能な社会を目指して生物科学は何ができるのか」について報告がなされた。同シンポジウムでは各加盟学会代表によるスピーチ (学会の紹介、活動概要等) が行われた。

続いて、稲田庶務幹事より、同日に行われた生科連定例会議において、同連合の次期代表 (任期: 2019 年 1 月より 2 年) に小林武彦氏が選出されたことが報告された。

④ホームページについて

塩見春彦広報幹事より学会 HP の運用状況についての説明が行われた。各ブラウザのセキュリティ対応のため、本年 6 月より常時 SSL 化を実装している。2018 年度中に 317 件の記事 (人材公募が約 4 割、関連シンポジウム情報が約 3 割) を掲載したことが報告された。

⑤本庶佑特別教授 ノーベル生理学・医学賞受賞報告

本庶佑元役員がノーベル賞を受賞されたことは誠に喜ばしいことであり、学会としてホームページに理事長からの祝意を掲載し、同時に京都大学サイトにリンクを貼った旨塩見広報幹事より報告された。

2) 第 41 回 (2018 年) 年会について

石野史敏第 41 回年会長より、配布資料に基づき準備状況の報告がなされた。一般演題投稿数は Late-breaking を含め 2872 題、そのうち 163 演題は公募ワークショップに採択された。事前参加登録は 4429 名、企業展示は 369 小間となり、運営全体として順調に準備が進んでいることが報告された。(* 当日参加を含め、最終の参加者数は 7519 名であった)

本年会のテーマには「日本からオリジナリティーを発信しよう」を掲げている。現代の科学は西洋思想に基づいて成立したものだが、日本人の自然や生物への向かい合い方は独特であり、それが実験の発想、結果の解釈などにも微妙な影響

を与えていると考える。我々が「自らの好奇心を追求する研究を深める」ことこそが「日本からのオリジナリティーを生み出す」ことにつながると感じている。年会ポスターにクロード・モネの代表作の一つ「ラ・ジャポネーズ」を採用したのも、そのような意図を込めている。

本年会では昨年に引き続き、午後一番の年会のメインの時間帯にポスター発表時間を設定した。Late-Breaking Abstracts を含め全てのポスター発表にディスカッサーを配置した。分子生物学会年会の原点である活発な議論を十分に堪能してもらいたいと考えている。さらに注目してほしい点は、シンポジウム・ワークショップ全体の 1/3 で、女性・若手がオーガナイザー・座長を務めていることである。国際学会と比較するとまだ十分ではないが、この流れが日本の学会の新しい形になっていくことを期待している。

なお、海外若手研究者招聘企画である留学中の海外会員の発表支援を、執行部からの要請を受け本年会で復活させた。また、今年は西日本豪雨、北海道地震、数々の台風など多くの災害に見舞われた年となったが、被災された学生会員には、例年通り参加費免除の対応をしたことが報告された。

明日からの年会運営に際し、理事各位のご協力をお願いしたい。

3) 第 42 回 (2019 年) 年会準備状況

佐々木裕之第 42 回年会長より 2019 年の年会準備状況につき報告がなされた。

○会期: 2019 年 12 月 3 日 (火) ~ 6 日 (金) (4 日間)

○会場: 福岡国際会議場・マリンメッセ福岡

○組織委員会:

年会長	佐々木裕之 (九州大学)
組織委員長	中島欽一 (九州大学)
プログラム委員長	伊藤隆司 (九州大学)
組織委員	石野良純 (九州大学)、 上田直子 (崇城大学)、 中山敬一 (九州大学)、 丹羽仁史 (熊本大学)、 馬場健史 (九州大学)、 望月敦史 (京都大学)、 諸橋憲一郎 (九州大学)

第 42 回年会は 7 年ぶりに福岡で開催することとなる。前回の福岡年会で IT 化が推し進められたが、今回も人工知能や新たな技術による学問分野の変貌を踏まえて「分子生物学のネクストステージ」を基調コンセプトとした。

会報と年会ホームページで広報したとおり、組

組織委員・プログラム委員による指定シンポジウムは16企画を予定している。ワークショップについては、すでに会員からの企画公募の受付を開始した。1テーマあたり150分の時間枠で最大80テーマを採択予定である。(1月31日締切)

今年と同様に、一般演題(ポスター発表)にはポスターディスカッサー制を導入する。4日間で300名近い方にポスターディスカッサーをお願いすることとなるので、理事各位には、ぜひディスカッサーへの就任・推薦に協力いただきたい。

本年会では、当初、年会運営業務をエー・イー企画に、展示・広告等の企業協賛業務を日本コンベンションサービス(JCS)に分割して委託していたが、この1年間の準備期間中の仕事ぶりに鑑み、JCS社の業務委託契約を解除し、企業協賛業務についても一括してエー・イー企画へ委託することとなったことが報告された。

4) 第43回(2020年)年会準備状況

上村匡第43回年会会長より2020年の年会準備状況につき報告がなされた。

○会期:2020年12月2日(水)~4日(金)の3日間

○会場:神戸ポートアイランド

○年会組織:

年会長	上村 匡(京大・院生命)
組織委員長	萩原正敏(京大・医)
プログラム委員長	井垣達吏(京大・院生命)
組織委員	河内孝之(京大・院生命)、 柳田素子(京大・医)
プログラム委員	跡見晴幸(京大・工)、 永樂元次(京大・ウイルス 再生)、CARLTON, Peter (京大・院生命)、斎藤通 紀(京大・医)、杉村 薫 (京大・iCeMS)、土居雅夫 (京大・薬)、朽尾豪人(京 大・理)、由里本博也(京 大・農)、山本拓也(京大・ CiRA)他27名

ボトムアップの基礎研究を取り巻く情勢の中で、研究テーマやアプローチの多様性が醸し出す華やかさと未来への期待を象徴的に表す年会テーマ(日本語と英語)を検討中である。指定シンポジウムと公募ワークショップのいずれも、発表は英語で行う予定である。

プログラムに関連して、キャリアパス委員会企画ランチョンセミナー2枠のうち1枠は、海外での研究をテーマとしたHFSP関連企画として開催することが説明された(2017年12月理事会

承認済み)。本件については、キャリアパス委員会に相談しながら企画を進めたい。

また、神戸会場(口頭発表会場)でのスライド視聴環境の改善に向けて、運営会社と詳細を検討中であることが報告された。

5) 第44回(2021年)年会準備状況

小林武彦組織委員長(塩見美喜子第44回年会会長代理)より2021年の年会準備状況につき報告がなされた。

○会期:2021年12月1日(水)~3日(金)

○会場:パシフィコ横浜

○組織委員会:

年会長	塩見美喜子(東大・院理)
組織委員長	小林 武彦(東大・定量研)
プログラム委員長	胡桃坂仁志(東大・定量研)
組織委員	東山 哲也(名大・トランス フォーマティブ生命研)
IT担当	岩崎 由香(慶大・医)

今後、若干名の組織委員を追加して、来年以降、開催形式などの基本方針を決定し、準備をスタートする予定である。

6) 理事選挙結果報告

稲田庶務幹事より第21期理事選挙結果の報告がなされた。2018年10月31日に東京で開催された第21期新理事会準備会議において、阿形清和氏が第21期理事長に選出された。

関連して、本年11月より、会員専用ページへのログインパスワード再発行の手続きが、従来の書面申請からオンライン手続きにシステム変更されたことが杉本理事長から報告された。理事選挙投票には会員番号とログインパスワードが必要であるが、今回のシステム変更により、次回以降、選挙投票率が少しでも上がることを期待したい。

7) 上村匡編集幹事より、配布資料に基づき、学会誌『Genes to Cells』の編集報告が行われた。

本年4月に西田栄介編集長が就任された。「研究者コミュニティから信頼されるジャーナルとして、今後もこの伝統を絶やすことなく、著者や読者の皆様とのフレンドリーなコミュニケーションを通じて、愛されるジャーナルとして益々成長させ、次世代に引き継いでいく所存である。」(編集長メッセージより)のとおり、理事各位には引き続きの支援をお願いしたい。

編集業務であるが、8月には原著論文(Original Article, Brief Report)の処理がさらに迅速化し、採択から数日後に原稿のまま早期出版され、同時にPubMedにも登録・検索可能となったことが報告された。

また、伝統絵画のなかに生命科学の遊び心を加えた本誌の表紙デザインは、8年目の今日でも高い評価を得ている。表紙ができるまでの裏話を盛り込んだタペストリーは、第41回年会においても直近3年分の36作品を展示するので、ぜひご覧いただきたい。表紙デザインに関するアイデアがあれば、ぜひ編集室または編集幹事までお寄せいただきたい。

8) 各種学術賞、研究助成候補への学会推薦状況について

後藤由季子賞推薦委員長より、2018年に本学会より推薦した各種学術賞候補者について報告がなされた。

引き続き、影山龍一郎研究助成選考委員長代理の木村宏委員（理事）より、2018年の研究助成推薦状況と結果等について報告が行われた。

9) キャリアパス委員会報告

小林武彦キャリアパス委員長より、配付資料に基づき委員会の活動内容が報告された。

①「第4回 日本分子生物学会 男女共同参画実態調査報告書」作成について

男女共同参画学協会連絡会が2016年秋に実施した大規模アンケートについて、分子生物学会会員分の回答データ1,788件を入手し、その回答結果に特化して集計・分析を行った。キャリアパス委員会内に解析WGを設置して、一次集計は外注し、分析・まとめをWGが担当した。報告書は本年11月に完成し（PDF版を学会HPに掲載し）、本委員会企画ランチョンセミナーで概要を紹介する予定である。

②男女共同参画学協会連絡会関連報告

(i)「女子中高生夏の学校2018～科学・技術・人との出会い～（夏学）」参加協力

「夏学」は理系分野の学会が集まり、女子中高生の理系進路選択・キャリア形成を支援する2泊3日の合宿形式のイベント（2018年は8月9～11日に国立女性教育会館で実施）である。本学会は会期2日目のサイエンスプログラム「ポスター・キャリア相談」に参加し、その内容は次のとおりであった。『モデル動物を用いた不妊原因を明らかにする基礎研究』

協力参加者：井関祥子会員（キャリアパス委員／医科歯科大）、梶田美穂子会員（医科歯科大）（ポスター作成協力：金井正美会員・鈴木仁美氏（医科歯科大））

(ii) 学協会連絡会；正式加盟学会からオブザーバー学会への変更について

生命科学系分野において男女ともに進学・就職や基礎研究の継続等が厳しい状況の中、若手全体のためのサポートや取り組みに、より力を入れることもまた急務となっていることから、この夏、学会内で限られた金銭的・人的資源の配分についての見直しが行われた。20期執行部からの要請を受けてキャリアパス委員会で検討し、『連絡会への参加形態をオブザーバーへ変更することで、担当委員・学会事務局の業務が軽減されれば、本学会あるいは生命科学分野固有の男女共同参画・キャリアパスに関する課題に、より積極的に取り組み発信することが可能となるのではないか』との結論に至った。この答申をもとに第20期理事会でメール審議が行われ、オブザーバー学会へ変更することが決定している。変更届は連絡会第16期第3回運営委員会（8月24日）にて承認されたことが報告された。

(iii) 年会に関連して

・演題発表者の属性調査

例年同様、演題登録ページに属性調査項目を設定し、研究者の属性に関するアンケートを実施した。今年はシンポジウム・ワークショップのオーガナイザーおよびスピーカーの男女比率が、正会員の比率（男性：女性＝77%：20%〔データなし3%〕）に近い値となった。今後もぜひ維持していただきたい。

・年会託児室

横浜開催の年会では会期3日でのべ40名程度の利用となっている。今年は2016横浜年会と同じ㈱ファミリー・サポートに委託した。

・年会企画事前アンケート（2018年8月30日～9月12日）の結果報告

キャリアパス委員会主催ランチョンセミナー2018の事前アンケートとして『研究にまつわるお金の話』に関するアンケートを実施した。学生／NPI／PIそれぞれの事情を調査した。回答者は608名で、調査結果は学会HPに掲載している。興味深い結果内容、そのポイントについて説明がなされた。

本年会において、以下2企画のランチョンセミナーを開催するので、理事各位においては積極的に参加いただきたい。

○『日本の基礎生命科学の源流と未来』（会期

初日 / 11 月 28 日)

- 『研究にまつわるお金の話』(年会 2 日目 / 11 月 29 日)

10) 研究倫理委員会報告

塩見春彦研究倫理委員長より、年会初日夜に開催する研究倫理フォーラムの内容につき説明がなされた。

- 研究倫理委員会企画・研究倫理フォーラム「ラボノートの書き方、生データの記録や保存の仕方」

・日時: 11 月 28 日(水) 19:15 ~ 20:45

・場所: パシフィコ横浜会議センター (第 5 会場)

〈講演〉

「ラボノートの管理と活用~知的財産の観点から~」
隅藏康一 (政策研究大学院大学)

〈聴衆参加型ディスカッション〉

ファシリテーター: 塩見春彦 (研究倫理委員長)、木村 宏 (同委員)、
胡桃坂仁志 (同委員)、菅澤 薫 (同委員)、阿形清和 (次期理事長)

今回は「ラボノートの書き方」を「なぜラボノートを取るのか」という実用的な切り口から知るためのアプローチとして、知財の専門家を招き、ラボノート、データ、サンプルの管理について考える内容となっている。特許など知財の基準からはどのようなラボノート、データ、サンプルの管理が求められていて、それに対して研究の現場では実際のところどのように運用されているのか。「データをどう残していくか」というのも大きな課題である。中長期的にみると今後大部分のラボで電子ラボノートへと移行することが予測できるが、現状での電子ラボノートのメリットや可能性、今後起こりうることや問題点、注意点などについてディスカッションしたいと考えている。理事関係者においてもぜひ積極的に参加いただきたい。

11) 富澤基金・基金運営委員会報告

小原雄治基金運営委員長より、富澤基金による第 8 回 (2018 年) 日本分子生物学会 若手研究助成結果につき報告がなされた。

(i) 第 8 回応募の受付期間: 2018 年 1 月 15 日 ~ 2 月 9 日

(ii) 応募総数: 105 名 (男性 81 名、女性 24 名
※性別は名前からの推定による)

(iii) 選考:

・第 1 次審査: 書類審査

・第 2 次審査: 5 月 12 日、8 名のヒアリング

を実施

(iv) 審査経過と第 8 回助成対象者:

審査経過詳細については、会報 120 号 (2018 年 6 月号) に結果報告を掲載済みであるので参照されたい。第 8 回若手研究助成の助成対象者は以下の 4 氏である。

○小田裕香子 (京都大学ウイルス・再生医科学研究所)

バリア形成機構の解明

Dissecting the organization mechanism of the barrier

○久保 郁 (国立遺伝学研究所)

視覚情報処理を制御する神経回路の機能と結合様式の解明

Function and connectivity of the optic flow processing circuit in the zebrafish pretectum

○後藤彩子 (甲南大学理工学部生物学科)

アリ科女王の長期間の精子貯蔵機能に関与する分子の特定

Identification for molecules related to long-term sperm storage in ant queens

○深谷雄志 (東京大学定量生命科学研究所)

エンハンサーによる転写制御ダイナミクスの統合的理解

Elucidating enhancer dynamics in transcriptional regulation

2011 年度より実施している本事業は 10 年間の助成であるので、残すところあと 2 年となった。来年も応募要項に従って奮って応募いただきたい。

12) 第 7 回 (2019 年) 国際会議支援選考結果報告

石川冬木国際会議支援選考委員長より、第 7 回目となる国際会議支援についての選考結果について報告された。本年の応募は 1 件で、選考委員会における慎重な審査を経て、理事長承認のもと、以下の会議が採択された。

《会議名称》

(和文) 国際トランスジェニックテクノロジー学会・第 15 回トランスジェニックテクノロジー会議 (TT2019)

(英文) The 15th Transgenic Technology Meeting (TT2019), the International Society for Transgenic Technologies (ISTT)

開催責任者: 古田泰秀 (理化学研究所 生命機能科学研究センター・チームリーダー)

会 期: 2019 年 4 月 7 日(日) ~ 10 日(水)

会 場: 神戸国際会議場

助成金額：250 万円

続いて、石川委員長より本事業についてここ数年応募が少ない状況が続いているので、学会として国際戦略を示されたほうがよいのでは、といったコメントが提出された。この点に関して意見交換が行われ、引き続き、次期理事会において注視していくことが確認された。

13) 将来計画委員会報告

①第 20 期理事会において将来計画委員会提言の検討を行ってきたが、持ち回り審議の結果、本年 9 月 14 日付にて以下 3 点につき承認されたことが、杉本理事長より報告された。

●第 20 期将来計画委員会提言「年会の開催方針について」

●年会開催ルール細目

●研究発表に関する指針

②年会開催ルール細目 8.「新学術領域等による協賛企画」項目の文言一部修正確認の件

9 月の持ち回り審議の際、理事の一人より、

●年会開催ルール細目案 8.「新学術領域等による協賛企画」の項目に関して、『新学術領域等』に関連学協会に含まれるのか」といった質問を受けていたことが報告された。執行部では、この項目は「新学術領域をはじめとする大型研究費関連」を対象としたものであり関連学協会を対象外であることを想定していたが、指摘いただいたとおり曖昧な表現となっていたため、本理事会において「関連学協会との共催・協賛企画は対象としない」旨の但し書きを付記する文面にて、最終確認が行われた。結果、提示資料のとおり承認された。

③今年は非常に自然災害が多い年であったが、それに関連して、災害対応に関するルール（年会開催が危ぶまれる状況に直面した場合の緊急対応ルール）を●年会開催ルール細目に含めておくべきとの意見が多数の理事より提出された。討議の結果、細目 9.として以下の条文を追加することとなった。

●年会開催ルール細目 9. 災害対応

「不測かつ突発的な事由（地震を含む自然災害等）により年会開催が危ぶまれる状況に直面した場合には、当該年会長と執行部が協議してその対応を決定するものとする。」

以上により、確定した 3 点 {●第 20 期将来計画委員会提言「年会の開催方針について」●年会開催ルール細目●研究発表に関する指針} は、本会報の 3～4 頁に別掲とする。(2018 年 11 月 27 日付にて学会 HP で公表)

14) 生命科学教育について

胡桃坂仁志担当理事に代わり稲田庶務幹事より、配付資料に基づき、高校などへの 2018 年の講師派遣の状況、年会における高校生発表の状況（過去 6 回の実績と本年会の発表予定）について報告がなされた。今年は過去最高のポスター発表数（30 演題）となっており、キャリアパス委員にディスカッサーとして協力してもらう予定である。理事各位においても積極的に参加いただきたい。

また、生命科学教育事業の活動周知の 1 つとして、本年も夏に開催された『SSH 生徒研究発表会』（神戸）に学会ブースを出展し、高校生や引率の先生に本学会の活動内容を紹介したことが報告された。

関連して、出前授業の内容、高校側から提出されているアンケート結果内容、高校生の「生物学」への興味の度合い、等々について意見交換が行われた。

15) その他

稲田庶務幹事より、第 41 回通常総会の議事進行と報告担当者の確認、さらに第 8 回富澤基金贈呈式の式次第の確認がなされた。

2. 審議事項

1) 平成 30 年度（2018 年度）決算承認の件

三浦正幸会計幹事より平成 30 年度活動計算書の収支について詳細説明がなされた。決算処理の結果、約 855 万円の黒字決算で終わることが出来た。黒字となったポイントは 3 つあり、1 点は『Genes to Cells』の出版社からの総利益折半の精算が順調であったこと（精算時の為替レートが前年同様であったこと）、2 点目は去年の ConBio2017（第 40 回年会）の決算が黒字であったこと、もう 1 点は国際会議支援の採択会議が 1 件（250 万円）であったことがあげられる。会費収入については、納入率はほぼ前年並みであった（正会員会費の納入率 92.4%、学生会員会費 70.8%）。経常費用に関しては、事業費・内訳別収支について詳細説明がなされた。さらに富澤基金の決算について報告が行われた。本決算においては、消費税約 150 万円を納めており、税務処理については顧問契約を交わしている税務専門家の指示のもと、収益事業部分の法人確定申告を行った。

本決算は 10 月 26 日に宮城秀敏公認会計士の監査を受け、さらに同年 11 月 8 日に岡田清孝監事、近藤寿人監事による会計監査を受け、配付資料のとりの監査報告書が提示されている。

続いて、岡田監事より 11 月 8 日に学会事務所に

において会計監査を実施し、監査報告書に記載したとおり、帳簿ならびに会計証憑類は正確に整えられており、各金融機関の通帳と残高証明書を確認し、同決算を認めたことが報告された。

審議の結果、本決算は理事会で承認され、第41回通常総会に諮られることとなった。

引き続き、杉本理事長より ConBio2017（第40回年会）の決算が黒字で終えられた理由につき補足説明がなされた。同合同大会における各種の新しい試みに対し、篠原彰年会長への謝辞が述べられた。なお、本学会の年会運営に際しては、収入の70%強を企業協賛費（展示、ランチョンセミナー、広告、日薬連からの寄付金）に依存しているが、今後も協賛関係収入は厳しい状況が続くことが予想される。次期理事会においても、さらなる工夫、アイディア等で財務状況の基盤継続に尽力いただきたい。

2) 平成31年度（2019年度）活動予算書承認の件

三浦会計幹事より、平成31年度活動予算書と同活動予算・事業費の内訳について説明が行われた。

前年決算の実績をふまえて各科目を微調整している。年会会計が通常の単独開催会計に戻ったので、前年 ConBio2017 案分収支よりも予算規模が大きくなっている。第41回（2018年）年会収支試算が比較的順調であること、『Genes to Cells』出版収支は為替レートの予想が難しいため固めに計上し、最終的に来年度は法人として70万円の黒字予算を編成したことが説明された。

審議の結果、同予算書は理事会で承認され、第41回通常総会に諮られることとなった。

3) 第45回（2022年）年会長について

杉本理事長より、第45回年会については、年会長を大阪大学大学院生命機能研究科・深川竜郎会員に依頼したいことが諮られ、承認された。

続いて、深川氏（現20期庶務幹事）より鋭意準備にあたりたいとの挨拶がなされた。奇しくも本年4月、ファシリテーターとして参加した40周年記念対談において、恩師である石浜明名誉教授（記念対談・語り手）よりこれからの学会のあり方、年会のあり方について貴重なお話をうかがったばかりのところであった。4年先の年会であるので、十分に時間をかけて企画準備に当たりたいとの表明がなされた。

4) Genes to Cells 編集委員会 運営内規について

昨年12月の20期第2回理事会において、岡田清孝、近藤寿人両監事より、『Genes to Cells』の規約（編集委員会・運営規程など）の整備について着手するよう依頼を受けていた。その件につき、西田編集長、編集幹事、編集室、学会事務局にて検討を

行い、「Genes to Cells 編集委員会 運営内規（案）」を作成した旨、上村編集幹事より報告された。

審議の結果、提示資料のとおり承認された。

Genes to Cells 編集委員会 運営内規

1. Genes to Cells は、生命科学におけるあらゆる分野を対象とした日本発の国際誌として発刊された。本誌の刊行は日本分子生物学会の事業として支援されつつも、編集は学会から独立して行うものとする。
2. 編集委員会は、創刊時より掲げてきた上記の運営方針を認識するとともに、本誌の位置付けを堅持すべく数年ごとに会合を開催することとする。

また、編集委員より検討したい事案が提出されたときには、編集長は編集委員会を開催できるものとする。

3. 編集長と編集委員の就任当初の任期は3年とし、特別な事由がある場合を除き自動的に継続されるものとする。
4. 編集委員会の会合に出席する者に対しては、日本分子生物学会の旅費支給内規に準じ旅費を支給することができる。

但し、年会の会期中（会期の前後の日を含む）に開かれる会合には、原則として旅費を支給しない。

5. そのほか、編集方針等については投稿規定によるものとする。

2018年11月27日第20期第3回理事会（第20期・第21期合同理事会）において、上記運営方針を Genes to Cells 編集委員会運営内規と定める。

-
- 5) 第21期理事会の体制、各幹事、各種委員会委員長・委員の委嘱について

阿形第21期理事長より、役員・幹事・各委員会名簿（案）が配付され、調整中であるキャリアパス委員会構成を除いて、原案どおりに承認された。21期のキャリアパス委員会は12月中には決定できる予定である。21期執行部は実務を担当してもらっているすべての幹事と現在までに決定している2019年以降のすべての年会長に参画いただいた構成となっている。なお、執行部メンバーにすべての年会長に入ってもらったので、21期では集会幹事は設置しないこととした。

続いて、阿形次期理事長より、学会の国際対応、特にアジアでの今後の国際戦略、について意見表明がなされた。学会のあり方、アジアにおける学会活動の方向性、等々について活発な意見交換がなされた。本件については、21期理事会にて継続して検討していきたい。

6) 第21期監事候補の選任

杉本第20期理事長から、第21期の監事候補として小安重夫会員、町田泰則会員が推薦され、承認された。監事については第41回通常総会で承認を得た後、正式選任となる。

7) 第21期副理事長の選任

稲田庶務幹事より副理事長選出に関する細則の説明がなされ、その後、21期出席理事により投票が行われ、副理事長として、佐々木裕之氏と塩見美喜子氏が選任された。

8) 年会運営に際しての災害対応（損害保険加入）について

今夏は、地震（大阪北部地震、北海道地震）や豪雨（西日本豪雨）、列島縦断の台風など自然災害が多く続き、第41回年会（石野年会長）の組織委員会において災害対応の必要性が議論された。年会事務局、学会事務局で情報収集に当たったところ、現在は「興行中止保険」（東京海上日動火災㈱）といった損害保険商品があり、本学会の年会も加入できることが事務局（福田）より報告された。補填してもらいたい内容と金額、根拠となる費用の積算について、事務局と年会事務局（エー・イー企画）にて詳細な検証作業を行い、まずは第41回年会予算をモデルとして、その収支試算結果を保険代理店に提出した。その結果、今年の横浜年会の現条件下での「興行中止保険案内（東京海上日動）」を入手し、同資料をもとに説明がなされた。

どのタイミングで災害被害にあうか、開催中止に追い込まれる会期が何日あるか、等々の諸条件で学会が負担すべき経費も異なってくるが、今回の試算では以下のような金額となった。

■第41回年会収支概算での開催中止費用：最大補償額（学会が必要とする額）

⇒約5700万円（会期3日とも中止となった場合の不足額）

〈2日中止となった場合は1580万円、いずれか1日中止となった場合は2860万円〉

↓

■上記最大5700万円を補填してもらうための保険料見積額は、約92万円であった。

【分子生物学会年会における興行中止保険の概要は以下のとおり】

- (1) 対象となる事故：不測かつ突発的な事由による開催中止（地震を含む自然災害）。
- (2) 会期および前日の準備日いずれか一日でも中止となった場合は補償対象となる。
- (3) 災害が発生し、開催中止となった時点によっ

て、どこまでの支出が免責となるのか、どこまでの委託業務（各種発注）の支払いを伴うのか、可能な限りの試算を含めた。

(4) 開催中止となった場合、事前参加登録者（一般演題発表者）には参加費を返金することを想定（いわゆる善良なる管理者の注意を払っての会員対応を基本ポリシーとする）。

(5) この保険はオーダーメイド保険であり、イベントごと、つまり毎年の年会ごとに収支明細を提出し契約を交わす必要がある（複数年契約による値引き交渉は保険会社に却下された）。

(6) 保険期間は1ヵ月：年会の会期最終日より1ヵ月を逆算。

毎年の年会運営の災害リスク対応として、学会本部負担（保険料負担）による損害保険加入により、今後、年会を主催される年会長も安心して企画準備に当たることができると思われる。（*財務的な最終責任は、年会組織委員会ではなく法人としての学会理事会にある）

検討の結果、学会として本損害保険に加入することを決定した。来年以降（2019福岡年会より）、毎年の年会ごとに契約を交わす必要があるが、契約準備（当該年会の収支試算を保険会社に提出し、保険料交渉を行う）、事務手続き・保険料支払いは学会事務局が担当する。なお、契約を正式に取り交わす前に、事務局は必ず、当該年会長と執行部の了承を得てから契約することが確認された。

9) その他

最後に杉本理事長より退任の挨拶がなされた。20期執行部では過去10年くらいの各種のデータを見直し、客観的数値をもとに各種の資料提示をしてきたつもりである。前19期からの申し送り案件については、一定の方向性を示すことが出来たと考えている。本日の活発な議論を聞いていて、本学会がさらなる次のステージへ進んでいくことを強く感じた次第である。

ご協力いただいた執行部・理事各位に感謝したい。

上記、第20期・第21期合同理事会の議決および確認事項を明確にするため、この議事録を作成し、議事録署名人はここに記名押印する。

2018年11月27日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

第20期・第21期合同理事会

議長 杉本 亜砂子 ㊞

議事録署名人 後藤 由季子 ㊞

議事録署名人 原 英二 ㊞

特定非営利活動法人 日本分子生物学会 平成31年度(第41回)通常総会記録

日 時：平成30年11月29日(木) 19:15～20:15

場 所：パシフィコ横浜

会議センター3階 313 + 314 (第7会場)

社員数(正会員+名誉会員+シニア会員+次世代教育会員)：

8,842名

出席者数：4,527名(本人出席30名、表決委任者4,497名)

議事内容：

1. 定款第25条に基づき、杉本亜砂子理事長より本総会議長として荒木弘之会員が指名された。さらに定款第29条に基づき、議事録署名は、石野史敏会員(第41回年会長兼)と杉本理事長が担当することが確認された。
2. 荒木議長より、定款第26条(総会の定足数)に基づき、上記表決委任者(委任状)を含めて出席4,527名となり、本総会は成立する旨報告された。
3. 経過報告(事業報告)

1) 理事長報告

杉本理事長より、総会資料(2頁：2018年度事業報告)に基づき、事業活動全般と、さらに下記5点について報告が行われた。

①本学会創立40周年記念事業として対談企画を実施した。本学会ならびに日本の分子生物学草創期からの歴史に詳しい6名の研究者(石浜明、大石道夫、小川英行、関口睦夫、由良隆、吉田光昭の各氏〔五十音順〕)に語り手を依頼し、その弟子世代の聞き手と対談を行っていただいた。各対談には理事会執行部がファシリテーターとして参加した。各氏からは分子生物学や学会の現在・未来に向けて示唆に富んだメッセージをいただくことができた。対談は会報及び学会HPに掲載している。

②国際対応について

20期では19期からの申し送りであった国際対応に関する案件も集中的に検討した。2017年4月、理事長委嘱により国際化対応ワーキンググループ{第20期国際化対応WG：林茂生(座長)、石川冬木、篠原彰、菅澤薫、深川竜郎}が設置され、(1)国際会議支援事業を継続するかどうか、(2)Cold Spring Harbor Asiaをはじめとする国際学会組織との提携の可能性について、(3)その他、学会の国際化に関すること、について検討いただいた。「第20期国際化対応ワーキンググループ答申」は、執行部(20期将来計画委員会)の確認を経て、

2017年12月の定例理事会で承認され、骨子版をホームページで公開しているのをご覧いただきたい。

③第20期将来計画委員会提言について

執行部では前理事会からの継続案件であった年会開催方針について、詳細な検討作業を行ってきた。客観的データを集め、それを元に提言案を策定し、理事会において検討を行った。結果、2018年9月14日付にて以下3点につき承認されたことが、杉本理事長より報告された。○第20期将来計画委員会提言「年会の開催方針について」

○年会開催ルール細目

○研究発表に関する指針

11月27日開催の20期21期合同理事会にて、年会開催ルール細目の一部修正と条文追加(年会開催の災害対応ルール)がなされ、その最終版を学会HPで公表する予定である(*本年会終了後、学会HPで公開された)。

④2018年から2年間、日本生態学会と連携して学際的な研究を推進する試みが行われている。第41回である本年会及び2019年の第42回福岡年会においては、日本生態学会会員が本学会会員と同等の資格で参加・発表できるものとし、また本年会の初日には両学会による合同ワークショップ・フォーラムを企画・実施した。2019年3月の第66回日本生態学会大会においても合同企画シンポジウムが予定されている。

⑤11月27日開催の20期21期合同理事会において、第45回(2022年)年会長を深川竜郎会員(大阪大学大学院生命機能研究科)にお願いすることが決定した。

2) 庶務報告

稲田利文庶務幹事より以下の報告が行われた。

①会員現況：〔2018年11月1日現在〕正会員8763名、シニア会員64名、次世代教育会員15名、学生会員4034名、賛助会員23社、総計12899名(前年11月対比、+11)

②生物科学学会連合：10月1日にシンポジウムが開催された。加盟する生命科学系の31団体が集まり、活動内容等を発表した。本学会からは杉本理事長が出席して報告を行った。なお同連合の次期代表には現在本学会のキャリアパス委員長を務める小林武彦氏が就任予定である。

3) 編集報告

上村匡編集幹事より『Genes to Cells』について以下の報告が行われた。

- ①本年4月より西田栄介3代目編集長が就任し、引き続き皆様に親しまれるジャーナルを目指したいとのメッセージを会員に向けて発信した。年会最終日(11月30日)の夕方に編集委員会を開催する。
- ②若手研究者を中心として新たに6名の編集委員に加わっていただくことになった。
- ③昨年、岡田清孝・近藤寿人両監事からの指摘があったことを受けて、編集委員会の運営に関する内規を作成し、11月27日の合同理事会で承認がなされた。

4) キャリアパス委員会報告

小林武彦キャリアパス委員長より以下の報告が行われた。

- ①本年11月「第4回日本分子生物学会男女共同参画実態調査報告書」を作成した。分析結果については年会2日目のランチョンセミナーの冒頭でも報告を行った。
- ②本年8月、男女共同参画学協会連絡会への参加形態を正式加盟学会からオブザーバー学会に変更した。
- ③例年同様、本年も夏の演題登録時に発表者等の属性調査を実施した。今年は年会組織委員の働きかけもあり、シンポジウム・ワークショップのオーガナイザーと正会員の男女比率がほぼ同じ(女性が約20%)になった。
- ④今年も例年同様、年会託児室の設置・運営を行っている。
- ⑤委員会企画として、年会初日(11月28日)に「日本の基礎生命科学の源流と未来」、2日目(29日)に「研究にまつわるお金の話」と題してランチョンセミナーを開催した。
- ⑥小林委員長からの報告に関連して、監事の近藤寿人会員より、女性研究者へのアファーマティブアクションに加え、海外での研究経験者を優遇する施策に結び付けるよう学会として継続した働きかけが必要ではないかとの発言があった。本件は次期のキャリアパス委員長に申し送りがなされることとなった。

4. 議事

1) 平成30年度(2018年度)決算承認の件

三浦正幸会計幹事より総会資料(3~16頁)に基づき、平成30年度活動計算書の収支について詳細報告が行われた。

2018年10月26日、公認会計士宮城秀敏氏

の会計監査を受け(総会資料の独立監査人の監査報告書を参照)、同年11月8日に岡田清孝監事、近藤寿人監事の監査を受けた。

審議の結果、本決算は異議なく承認された。

2) 平成31年度(2019年度)活動予算書承認の件

三浦会計幹事より総会資料(18~19頁)に基づき、平成31年度活動予算書について説明が行われた。

審議の結果、同活動予算書は異議なく承認された。

なお、11月27日開催の合同理事会にて年会運営に際しての災害対応が検討され、来年以降の年会を対象に学会として損害保険に加入することが決定された。その保険料も本予算に計上されていることが三浦会計幹事より報告された。

3) 第21期監事選任の件

定款第14条に基づき、杉本理事長より第21期監事として小安重夫会員、町田泰則会員が推薦され、承認(選任確認)された。

5. 第41回(2018年)年会長挨拶

石野史敏第41回年会長より年会開催状況について報告が行われた。

天候にも恵まれ、参加者数は前回単独開催した2016年会時と同様に7000名を超える見込みである(*最終の参加者数は7519名であった)。本年会では夏の演題登録の締切延長を行わなかった。その影響もあってか演題数は例年よりやや伸びなかったが、Late-Breaking Abstractsで持ち直した。

本年会ではできるだけ分子生物学会の基本である「ディスカッションを盛り上げること」に集中し、それ以外の支出はできるだけ抑えるよう努めた。昨年同様ポスター発表を昼間にしたことは、展示会場での人の行き来もでき、出展企業からも好評である。企業ランチョンセミナーは既存のものだけでなく新規に開拓された先も含まれている。組織委員各位と年会事務局(エー・イー企画)、学会事務局の尽力に感謝したい。

国際的な視点を意識して、本年会ではオーガナイザーの女性比率が1/3以上となるよう努めた。本年会では海外若手研究者招聘企画を復活した。また、西日本豪雨災害・北海道地震で本人または実家が被災した学生については、参加費全額免除対応を行ったことが報告された。

最終日には佐藤優氏に講演「科学にひそむ宗教的思考の危うさ」を依頼している。本年会のテーマは「日本からオリジナリティーを発信しよう!」であるが、生物と自然との関係に関する日本人と外国人の感性の差を理解した上で日本のオリジナリティー

を発信することが重要である。その鍵のひとつとなりうるのがキリスト教圏の外国人にとっての「人間中心主義」であることから、今回このようなタイトルで佐藤氏に講演をお願いした。ご期待いただきたい。

6. 第42回(2019年)年会長挨拶

佐々木裕之第42回年会長より2019年の年会開催企画案と準備状況について報告が行われた。

- ・会期：2019年12月3日(火)～6日(金)
- ・会場：福岡国際会議場、マリメッセ福岡

人工知能や分析・可視化技術の革新による学問分野の変貌を踏まえて、「分子生物学のネクストステージ」を基調コンセプトとした。もうひとつのコンセプトは、食の都福岡での開催ということで「大いに食べて、大いに飲んで、大いに議論しよう」である。

国際化の一環として、すべてのシンポジウムを英語のセッションとし、海外演者を入れる。また採択されたワークショップで海外演者を招聘する場合には旅費・宿泊費の補助を行う予定である。海外演者(特にトップ研究者)の招聘を促すため、例年3月頃まで行っているワークショップ公募を本年会では2019年1月末日締切として、既にワークショップの公募を始めている。

7. 第43回(2020年)年会長挨拶

上村匡第43回年会長より2020年の年会開催企画案と準備状況について報告が行われた。

- ・会期：2020年12月2日(水)～4日(金)の3日間
- ・会場：神戸国際会議場、神戸国際展示場、神戸ポートピアホテル

ボトムアップの基礎研究を取り巻く厳しい状況の中でも、研究テーマやアプローチの多様性が醸し出す華やかさや未来への期待を象徴する年会テーマを設定したい。

シンポジウム・ワークショップでは若手の方の提案を積極的に取り入れ、新風を巻き起こしても

らえるよう期待したい。シンポジウム・ワークショップはすべて英語で行う方向で調整中である。また、キャリアパス委員会企画のランチョンセミナー2枠のうち1枠を年会及びHFSP(ヒューマン・フロンティア・サイエンス・プログラム)との合同企画とし、海外での研究生生活と帰国後のキャリアについて考える場を設けたい。

なお、神戸会場にはスライド視聴環境に改善の余地があると思われる部屋があり、対応策を検討中である旨報告がなされた。

8. 次期理事長挨拶

阿形清和次期理事長より挨拶があった。

これまで国内での年会のあり方に関する議論が続き、世界を見据えた議論があまりなされてこなかった感がある。次期21期の方針としては「世界で戦う実力のある会員を増やす」ことを目指したい。具体的には、年会における英語化の推進などが挙げられる。また若い世代を育てるために、ディベート重視のセッションの検討なども考えうる。21期の執行部には2019～2022年会長全員に参画いただいたので、緊密な連携を保ちながらこのミッションに取り組んでいきたいとの表明がなされた。

9. 荒木議長より閉会の挨拶があり、第41回総会が終了した。

上記、平成31年度通常総会の議決および確認事項を明確にするため、この議事録を作成し、議事録署名人はここに記名押印する。

平成30年11月29日

特定非営利活動法人日本分子生物学会
平成31年度通常総会
議長 荒木 弘之 ㊞
議事録署名人 杉本 亜砂子 ㊞
議事録署名人 石野 史敏 ㊞

平成 30 年度（2018 年度） 決算報告

平成 30 年度（2018 年度） 活動計算書

平成 29 年 10 月 1 日から平成 30 年 9 月 30 日まで

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

科 目		金 額	
I	経常収益		
1	受取入会金		
	正会員受取入会金	464,000	
	学生会員受取入会金	1,121,000	
	次世代教育会員入会金	4,000	1,589,000
2	受取会費		
	正会員受取会費	52,626,500	
	学生会員受取会費	8,568,500	
	賛助会員受取会費	1,040,000	
	シニア会員受取会費	171,000	
	次世代教育会員会費	84,500	62,490,500
3	受取寄付金	8,450,000	8,450,000
4	受取助成金	2,866,400	2,866,400
5	事業収入		
	(1)学術集会、研究発表会、講演会の開催等による分子生物学に関する学術研究事業	179,509,798	
	(2)分子生物学に関する機関誌及び論文図書等の発行事業	16,238,339	
	(3)その他目的を達成するために必要な事業	0	195,748,137
6	その他収益		
	受取利息	8,210	
	雑収入	102,910	111,120
	経常収益計		271,255,157
II	経常費用		
1	事業費		
	(1)人件費		
	給与手当	11,058,454	
	法定福利費	1,734,769	
	福利厚生費	35,541	
	人件費計	12,828,764	
	(2)その他経費		
	業務委託費	109,403,480	
	編集業務費	4,622,734	
	印刷費	17,749,483	
	通信運搬費	6,455,931	
	旅費交通費	5,247,022	
	会議費	984,985	
	支払手数料	1,692,888	
	消耗品費	2,158,562	
	会場費	38,717,000	
	機材費	18,016,830	
	諸会費	70,000	
	広報費	3,024	
	補助金	2,500,000	
	雑費	558,298	
	その他経費計	208,180,237	
	事業費計		221,009,001
2	管理費		
	(1)人件費		
	給与手当	17,140,709	
	法定福利費	2,690,675	
	福利厚生費	55,129	
	人件費計	19,886,513	
	(2)その他経費		
	事務所家賃	3,764,750	
	業務委託費	1,766,880	
	会員管理システム運用管理費	2,462,400	
	印刷費	1,567,583	
	通信運搬費	3,399,801	
	旅費交通費	2,028,620	
	会議費	299,665	
	支払手数料	1,504,535	
	消耗品費	869,079	
	雑費	754,472	
	租税公課	1,570,100	
	寄付金支出	100,000	
	特定預金支出（退職給付引当金）	1,720,200	
	その他経費計	21,808,085	
	管理費計		41,694,598
	経常費用計		262,703,599
	当期正味財産増加額		8,551,558
	前期繰越正味財産額		194,058,155
	次期繰越正味財産額		202,609,713

(単位：円)

平成 30 年度（2018 年度）貸借対照表

平成 30 年 9 月 30 日現在

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

科 目	金 額		
I 資産の部			
1 流動資産			
現金預金	232,594,028		
前払費用	10,465,518		
立替金	7,847,444		
流動資産合計		250,906,990	
2 固定資産			
工具器具備品	1		
敷金	1,802,000		
固定資産合計		1,802,001	
資産合計			252,708,991
II 負債の部			
1 流動負債			
未払金	671,028		
未払法人税等	70,000		
未払消費税	757,000		
前受会費	418,000		
前受金	1,000,000		
預り金	33,582,850		
流動負債合計		36,498,878	
2 固定負債			
退職給付引当金	13,600,400		
固定負債合計		13,600,400	
負債合計			50,099,278
III 正味財産の部			
前期繰越正味財産		194,058,155	
当期正味財産増加額		8,551,558	
正味財産合計			202,609,713
負債及び正味財産合計			252,708,991

(単位：円)

平成 30 年度（2018 年度）財産目録

平成 30 年 9 月 30 日現在

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

科	目	金	額
I	資産の部		
1	流動資産		
	現金預金		
	現金	34,960	
	郵便振替 00110-1-901302	40,646,424	
	普通預金 三菱 UFJ 銀行 春日町支店	1,181,612	
	普通預金 三菱 UFJ 銀行 所沢支店	2,471,883	
	普通預金 三菱 UFJ 信託銀行 上野支店	224,626	
	普通預金 三井住友銀行 飯田橋支店	58,170,103	
	普通預金 三井住友信託銀行 芝営業部	347,531	
	普通預金 みずほ銀行 本郷支店	101,729	
	普通預金 静岡銀行 東京営業部	4,415,160	
	定期預金 三菱 UFJ 銀行 春日町支店	10,000,000	
	定期預金 三井住友銀行 飯田橋支店	30,000,000	
	定期預金 三菱 UFJ 信託銀行 上野支店	10,000,000	
	定期預金 三井住友信託銀行 芝営業部	36,000,000	
	定期預金 みずほ銀行 本郷支店	10,000,000	
	定期預金 静岡銀行 東京営業部	29,000,000	
	前払費用 事務所家賃 10 月分	313,060	
	前払費用 事務所火災保険 H30.10—H32.8	23,958	
	前払費用 2018 年分 Genes to Cells オンライン費用	5,019,960	
	前払費用 第 41 回年会開催補助金	5,000,000	
	前払費用 新理事会会場費	108,540	
	立替金 編集経費（2018 年 1 月分以降）	7,847,444	
	流動資産合計		250,906,990
2	固定資産		
	工具器具備品 電話取付一式	1	
	敷金 学会事務所・編集室	1,802,000	
	固定資産合計		1,802,001
	資産合計		252,708,991
II	負債の部		
1	流動負債		
	未払金 法定福利費	521,654	
	未払金 業務委託費（セコム）	23,760	
	未払金 通信運搬費（宅急便代、NTT、メールサーバ）	52,011	
	未払金 印刷費（コピーカウンター料）	22,973	
	未払金 雑費（外部倉庫、PC サポート）	50,630	
	未払法人税等	70,000	
	未払消費税	757,000	
	前受会費 平成 31 年度以降会費	418,000	
	前受金 GTC 編集費・出版社補助金	1,000,000	
	預り金 富澤基金	33,415,160	
	預り金 源泉所得税	167,690	
	流動負債合計		36,498,878
2	固定負債		
	退職給付引当金	13,600,400	
	固定負債合計		13,600,400
	負債合計		50,099,278
III	正味財産の部		
	前期繰越正味財産	194,058,155	
	当期正味財産増加額	8,551,558	
	正味財産合計		202,609,713
	負債及び正味財産合計		252,708,991

（単位：円）

「日本分子生物学会 若手研究助成 富澤純一・桂子基金」

平成 30 年度（2018 年度）会計報告

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

●平成 30 年度（2018 年度）富澤基金 決算報告書

平成 29 年 10 月 1 日から平成 30 年 9 月 30 日まで

科 目	決 算 額	備 考
収入の部		
預金利息	3,851	
当期収入合計	3,851	
前期繰越金	45,796,930	
合 計	45,800,781	
支出の部		
研究助成金	12,000,000	第 8 回研究助成者は 4 名（1 人 300 万円）
選考経費 / 会場費	150,269	ヒアリング（2018.5.12）
選考経費 / 旅費	130,900	〃
事務・雑費	104,452	貸金庫使用料（静岡銀行）25,920 円、 送金手数料等 3,132 円、遠方からのヒアリング 出席者（* 不採択）旅費支払 75,400 円
当期支出合計	12,385,621	
次期繰越金	33,415,160	
合 計	45,800,781	

●平成 30 年度（2018 年度）富澤基金 貸借対照表

平成 30 年 9 月 30 日現在

借 方		貸 方	
科 目	金 額	科 目	金 額
資産の部		負債の部	
普通預金	4,415,160	流動負債	0
定期預金	29,000,000	基金会計（期首）	45,796,930
		今年度収支差額	- 12,381,770
		基金正味財産	33,415,160
合 計	33,415,160	合 計	33,415,160

●平成 30 年度（2018 年度）富澤基金 財産目録

平成 30 年 9 月 30 日現在

科 目	摘 要	金 額
普通預金	静岡銀行 東京営業部	4,415,160
定期預金	静岡銀行 東京営業部	29,000,000
合 計		33,415,160

平成 30 年度（2018 年度） 計算書類の注記

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

1. 重要な会計方針

計算書類の作成は、NPO 法人会計基準（2010 年 7 月 20 日 2011 年 11 月 20 日一部改正 NPO 法人会計基準協議会）によっております。

(1) 固定資産の減価償却の方法

有形固定資産の減価償却は定率法を採用しております。

(2) 引当金の計上基準

退職給付引当金は従業員の退職給付に備えるため、当期末における退職給付債務に基づき当期末に発生していると認められる金額を計上しております。

なお、退職給付債務は期末自己都合要支給額に基づいて計算しております。

(3) 消費税等の会計処理

消費税等の会計処理は、税込方式を採用しております。

2. 事業費の内訳

別紙（59 頁参照）

3. 固定資産の増減内訳

（単位：円）

科目	期首取得価額	取得	減少	期末取得価額	減価償却累計額	期末帳簿価額
工具器具備品	955,847	0	0	955,847	△ 955,846	1
敷金	1,802,000	0	0	1,802,000	0	1,802,000
合計	2,757,847	0	0	2,757,847	△ 955,846	1,802,001

【監査報告】

平成 30 年度（2018 年度）決算に関して、平成 30 年 10 月 26 日、独立監査人 宮城秀敏公認会計士の監査を受けました。その計算書類が、我が国において一般に公正妥当と認められる会計基準に準拠して、平成 30 年度の収支、正味財産増減の状況及び同年度末日現在の財政状態をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。との監査報告書の提出を受けました。その後、同年 11 月 8 日に岡田清孝監事、近藤寿人監事による監査を終了しました。（両監事による会計監査は、帳簿並びに係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きにより行われた）ここにご報告いたします。

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

第 20 期理事長 杉 本 亜砂子

理事（会計幹事）三 浦 正 幸

平成 30 年度 (2018 年度) 事業費の内訳

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
(単位：円)

科 目	(1)学術集会、研究発表会、講演会の開催等による分子生物学に関する学術研究事業				(2)分子生物学に関する機関誌及び論文図書等の発行事業				(3)その他の目的を達成するために必要な事業				合 計	
	年会 (ConBio2017 分子生物学会 負担分)	年会その他	国際会議支援	会報発行	Genes to Cells 編集	Genes to Cells オンライン	ホームペー ジ関係	社会貢献・教 育活動	各種委員会 (シンポジウム・ 研究協議・ その他)	事業費その他 (研究協議・ その他)	事業費計	管理部門	合 計	
I 経常収益														
1. 受取入会金	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,589,000	1,589,000	
2. 受取会費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	62,490,500	62,490,500	
3. 受取寄付金	8,450,000	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8,450,000	0	8,450,000	
4. 受取助成金	2,866,400	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2,866,400	0	2,866,400	
5. 事業収入											0			
(1)学術集会、研究発表会、講演会の開催等による分子生物学に関する学術研究事業	179,509,798	0	0	0	0	0	0	0	0	0	179,509,798	0	179,509,798	
(2)分子生物学に関する機関誌及び論文図書等の発行事業	0	0	0	0	16,238,339	0	0	0	0	0	16,238,339	0	16,238,339	
(3)その他の目的を達成するために必要な事業	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
事業収入計	179,509,798	0	0	0	16,238,339	0	0	0	0	0	195,748,137	0	195,748,137	
6. その他収益	0				0	0	0	0	0	0	0	111,120	111,120	
経常収益計	190,826,198	0	0	0	16,238,339	0	0	0	0	0	207,064,537	64,190,620	271,255,157	
II 経常費用														
(1) 人件費														
給与手当	3,425,040	0	0	769,324	769,324	0	1,262,295	1,400,456	3,116,479	315,566	11,058,454	17,140,709	28,199,163	
法定福利費	535,478	0	0	119,486	119,486	0	199,144	221,272	491,224	48,679	1,734,769	2,690,675	4,425,444	
福利厚生費	10,971	0	0	2,448	2,448	0	4,080	4,533	10,064	997	35,541	55,129	90,670	
人件費計	3,971,489	0	0	891,258	891,258	0	1,465,489	1,626,261	3,617,767	365,242	12,828,764	19,886,513	32,715,277	
(2) その他経費														
事務所家賃	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3,764,750	3,764,750	
業務委託費	101,821,598	0	0	0	0	4,691,940	1,944,000	0	726,342	219,600	109,403,480	1,766,800	111,170,360	
編集業務費	0	0	0	0	4,622,734	0	0	0	0	0	4,622,734	0	4,622,734	
会員管理システム運用管理費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2,462,400	2,462,400	
印刷費	14,017,665	0	0	3,660,390	0	0	0	0	71,388	40	17,749,483	1,567,483	19,317,066	
通信運搬費	2,285,881	0	0	4,153,026	0	0	0	0	17,024	0	6,455,931	3,399,801	9,855,732	
旅費交通費	4,082,682	0	0	0	0	0	0	64,100	314,800	785,440	5,247,022	2,028,620	7,275,642	
会議費	669,908	3,791	0	0	0	0	0	0	183,684	127,702	984,985	299,665	1,284,650	
支払手数料	1,676,256	0	864	3,240	0	0	0	2,484	5,400	4,644	1,692,888	1,504,535	3,197,423	
消耗品費	1,927,133	0	0	231,429	0	0	0	0	0	0	2,158,562	869,079	3,027,641	
会費	38,656,098	0	0	0	0	0	0	0	0	0	38,656,098	0	38,656,098	
機材費	18,016,830	0	0	0	0	0	0	0	0	60,982	18,077,812	0	18,138,794	
諸会費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
広報費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
補助金	0	0	2,500,000	0	0	0	0	0	0	50,000	2,550,000	0	2,550,000	
雑費	524,716	0	0	0	0	0	0	30,000	0	3,582	558,298	754,472	1,312,770	
租税公課	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,570,100	1,570,100	
寄付金支出	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	100,000	100,000	
特定預金支出 (退職給付引当金)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,720,200	1,720,200	
その他経費計	183,678,577	3,791	2,500,864	8,048,085	4,622,734	4,691,940	1,944,000	96,584	1,338,638	1,255,024	208,180,237	21,808,085	229,988,322	
経常費用計	187,650,066	3,791	2,500,864	8,939,343	5,513,992	4,691,940	3,499,489	1,722,845	4,956,405	1,620,266	221,009,001	41,694,598	262,703,599	
増減額	3,176,132	△ 3,791	△ 2,500,864	△ 8,939,343	10,724,347	△ 4,691,940	△ 3,499,489	△ 1,722,845	△ 4,956,405	△ 1,620,266	△ 13,944,464	22,496,022	8,551,558	

※ 事務所の人件費 (給与手当等) は担当業務別に合わせ、事業費の各科目に按分しています。
※ 第 40 回年会 (ConBio2017) 決算の収支は、NFO 法人会計基準に基づき本事業内訳書にて科目振分けがなされています。

【補足資料】 ConBio2017 収支決算書

【収入の部】

(単位：円)

項 目	内 訳	金 額	金額【分子生物学会】
I 参加費収入		91,610,000	59,546,500
1 会費 事前		50,743,000	32,982,950
2 学生会員 (大学院生・学部学生) 事前	11,000×4,613 名	7,923,000	5,149,950
3 学生会員 (大学院生・学部学生) 事前	3,000×2,641 名	1,330,000	864,500
4 学生会員 事前	5,000× 266 名	5,134,000	3,337,100
5 会費 当日	17,000× 302 名	12,337,000	8,019,050
6 学生会員 (大学院生・学部学生) 当日	13,000× 949 名	775,000	503,750
7 学生会員 (大学院生・学部学生) 当日	5,000× 155 名	2,884,000	1,874,600
8 学生会員 (大学院生・学部学生) 当日	7,000× 412 名	10,406,000	6,763,900
9 展示会見学	22,000× 473 名	78,000	50,700
II 主催団体補助金		7,692,308	5,000,000
1 日本分子生物学会本部		5,000,000	5,000,000
2 日本生化学会本部		2,692,308	—
III プログラム販売		2,559,000	1,663,350
1 プログラム集	3,000× 822 冊	2,466,000	1,602,900
2 オンライン要旨 ID/PW (会員)	3,000× 11 件	33,000	21,450
3 オンライン要旨 ID/PW (非会員)	10,000× 6 件	60,000	39,000
IV 助成金		4,409,846	2,866,400
1 中内財団助成金		2,000,000	1,300,000
2 Meet in KOBE (神戸市) 寄付金		1,000,000	650,000
3 JST サテライト(神戸)ボジウム開催助成		909,846	591,400
4 日本医学会連合		500,000	325,000
V 広告関係費		4,006,800	2,604,420
1 プログラム広告 (表 2)	259,200× 1 頁	259,200	168,480
2 プログラム広告 (表 3)	237,600× 1 頁	237,600	154,440
3 プログラム広告 (表 4)	291,600× 1 頁	291,600	189,540
4 プログラム広告 (後付カラー 1 頁)	194,400× 3 頁	583,200	379,080
5 プログラム広告 (後付カラー 1 頁)	162,000× 1 頁	162,000	105,300
6 プログラム (後付白黒 1 頁)	129,600× 3 頁	388,800	252,720
7 プログラム (後付白黒 1 頁)	108,000× 1 頁	108,000	70,200
8 ホームページバナー広告	6 枠	1,080,000	702,000
9 ホームページバナー広告 (UJA)	1 枠	32,400	21,060
10 シンポジウム協賛 (フレゼン)	32,400× 13 枠	421,200	273,780
11 スクリン広告	108,000× 4 枠	432,000	280,800
12 ポスターチェイスピンナップ広告	10,800× 1 枠	10,800	7,020
VI 展示出展料		155,651,120	101,173,228
1 A タイプ (2 次)	453,600× 250 小間	113,400,000	73,710,000
2 A タイプ (2 次)	486,000× 49 小間	23,814,000	15,479,100
3 B タイプ (2 次)	140,400× 21 小間	2,948,400	1,916,460
4 B タイプ (2 次)	162,000× 2 小間	324,000	210,600
5 AC タイプ	239,200× 24 小間	6,220,800	4,043,520
6 NBRP コーナー	139,300× 38 小間	5,293,400	3,440,710
7 BioDB コーナー	163,080× 14 小間	2,283,120	1,484,028
8 最先端技術支援コーナー	1 式	741,000	481,650
9 面談ブース	388,800	388,800	252,720
10 その他小間収入	129,600× 3 小間	237,600	154,440
VII ランチョンセミナー他		21,330,000	13,864,500
ランチョンセミナー共催費	1,404,000× 14 枠	19,656,000	12,776,400
キャンセル料	702,000× 1 枠	702,000	456,300
学生採用説明会企画 (チンブスタッフ)	486,000× 1 枠	486,000	315,900
フォーラム (オリンパス)	270,000× 1 枠	270,000	175,500
フォーラム (第一三共)	108,000× 1 枠	108,000	70,200
フォーラム (塩野義製薬)	108,000× 1 枠	108,000	70,200
VIII 寄付金		14,029,000	9,118,850
1 日本製薬団体連合会		13,000,000	8,450,000
2 旅行会社 協賛金		1,029,000	668,850
IX その他		-17,000	-11,050
I 当日現金授受ミス		-17,000	-11,050
合 計		301,271,074	● 195,826,198

※ ConBio2017 決算では、分子生物学会 65%：生化学会 35%の比率で収支が按分されています。

上記、収入合計 ●195,826,198 円－本部補助金 5,000,000 円＝190,826,198 円が

本体会計の事業費内訳「年会」経常収益計に一致します。

【支出の部】

(単位：円)

項 目	金 額	金額【分子生物学会】
I 事前準備関係費	49,673,047	32,287,480
1 旅費・交通費	660,700	429,455
2 庁費	49,012,347	31,858,025
(1) 印刷費・制作費	34,634,616	22,512,500
(2) 通信・運搬費	3,511,836	2,282,693
(3) 会費・旅費	57,223	37,195
(4) 事務費	10,808,672	7,025,637
II 当日運営関係費	231,205,782	150,283,758
1 人件費	15,312,607	9,953,195
2 旅費・交通費	4,087,270	2,656,725
3 会場関係費	59,470,781	38,656,008
4 機材・備品費	32,062,563	20,840,666
5 看板装飾費	20,694,366	13,451,338
6 展示関係費	40,519,248	26,337,511
7 招請関係費	1,861,610	1,210,046
8 オンデマンド配信費	13,495,599	8,772,139
9 会場関係費	828,750	538,688
10 業務委託費	42,872,988	27,867,442
III 事後処理費	1,703,598	1,107,339
1 プレナリー演者ご訪問	227,610	147,947
2 アンケートシステム利用・集計作業費	303,113	197,023
3 税理・会計事務経費	261,765	170,147
4 会計監本費	766,610	498,297
5 最終組織委員会経費	144,500	93,925
IV 学会繰越金 (本体会計への精算)	18,688,647	
合 計	301,271,074	● 195,826,198

※支出合計 ●195,826,198 円－学会繰越金 12,147,621 円＝183,678,577 円が

本体会計の事業費内訳「年会」のその他経費計に一致します。

監査報告書

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
理事長 杉本 重砂子 殿

平成30年11月8日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

監事 岡田清孝

平成30年11月8日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

監事 近藤寿人

私たちは、日本分子生物学会の平成30年度における財産並びに収支の状況について監査を行った。帳簿並びに関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きを用いて計算書類の正確性を検討した結果、計算書類は、財産並びに収支の状況を正しく示していると認める。

以上

独立監査人の監査報告書

平成30年10月26日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
理事長 杉本 重砂子 殿

宮城公認会計士事務所

公認会計士 宮城 寛太郎

私は、特定非営利活動法人 日本分子生物学会 の平成29年10月1日から平成30年9月30日までの平成30年度の計算書類、すなわち、活動計算書、貸借対照表及び財産目録並びに平成29年10月1日から平成30年9月30日までの平成30年度の富澤基金 会計報告、すなわち、富澤基金 決算報告書、貸借対照表及び財産目録について監査を行った。この計算書類及び会計報告の作成責任は理事者であり、私の責任は独立の立場から計算書類及び会計報告に対する意見を表明することにある。

私は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、私に計算書類及び会計報告に重要な虚偽の表示がないかどうかの合理的な保証を得ることを求めている。監査は、試験を基礎として行われ、理事者が採用了会計方針及びその適用方法並びに理事者によって行われた見積もりの評価も含め全体としての計算書類及び会計報告の表示を検討することを含んでいる。私は、監査の結果として意見表明のための合理的な基礎を得たと判断している。

私は、上記の計算書類及び会計報告が、我が国において一般に公正妥当と認められる会計基準に準拠して、特定非営利活動法人 日本分子生物学会 の平成30年度の収支、正味財産増減の状況及び同年度末日現在の財政状態並びに 富澤基金 の平成30年度の収支及び同年度末日現在の財政状態をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

特定非営利活動法人 日本分子生物学会 と私との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

平成 31 年度（2019 年度）活動予算書

平成 31 年度（2019 年度）活動予算書

2018 年 10 月 1 日から 2019 年 9 月 30 日まで

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

科 目	金 額		
I 経常収益			
1 受取入会金			
正会員受取入会金	500,000		
学生会員受取入会金	1,100,000	1,600,000	
2 受取会費			
正会員受取会費	52,600,000		
学生会員受取会費	8,660,000		
シニア会員受取会費	180,000		
次世代教育会員受取会費	100,000		
賛助会員受取会費	960,000	62,500,000	
3 受取寄付金	5,500,000	5,500,000	
4 受取助成金	1,600,000	1,600,000	
5 事業収入			
(1)学術集会、研究発表会、講演会の開催等による分子生物学に関する学術研究事業	188,310,000		
(2)分子生物学に関する機関誌及び論文図書等の発行事業	14,000,000		
(3)その他目的を達成するために必要な事業	0	202,310,000	
6 その他収益			
受取利息	10,000		
雑収入	110,000	120,000	
経常収益計			273,630,000
II 経常費用			
1 事業費			
(1)人件費			
給与手当	11,550,000		
法定福利費	1,830,000		
福利厚生費	50,000		
人件費計	13,430,000		
(2)その他経費			
業務委託費	106,100,000		
編集業務費	4,500,000		
印刷費	19,320,000		
通信運搬費	6,290,000		
旅費交通費	3,100,000		
会議費	940,000		
支払手数料	1,510,000		
消耗品費	1,740,000		
会場費	48,070,000		
機材費	18,850,000		
諸会費	70,000		
広報費	20,000		
補助金	5,000,000		
雑費	480,000		
その他経費計	215,990,000		
事業費計		229,420,000	
2 管理費			
(1)人件費			
給与手当	17,150,000		
法定福利費	2,700,000		
福利厚生費	50,000		
人件費計	19,900,000		
(2)その他経費			
事務所家賃	4,000,000		
業務委託費	1,850,000		
会員管理システム運用管理費	2,880,000		
印刷費	1,600,000		
通信運搬費	3,400,000		
旅費交通費	2,300,000		
会議費	400,000		
支払手数料	1,500,000		
消耗品費	800,000		
雑費	1,500,000		
租税公課	1,600,000		
特定預金支出（退職給付引当金）	1,780,000		
その他経費計	23,610,000		
管理費計		43,510,000	
経常費用計			272,930,000
当期正味財産増加額			700,000
前期繰越正味財産額			202,600,000
次期繰越正味財産額			203,300,000

(単位：円)

平成 31 年度 (2019 年度) 活動予算 事業費の内訳

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
(単位：円)

科 目	(1)学術集会、研究発表会、講演会の開催等 による分子生物学に関する学術研究事業			(2)分子生物学に関する機関誌及び論文図書等の発行事業				(3)その他の目的を達成するために必要な事業			合 計	
	第 41 回年会	年会その他	国際会議支援	会報発行	Genes to Cells 編集	Genes to Cells オンライン	ホームページ 関係	社会貢献・ 教育活動	各種委員会 (キャリアパス・男女共同 参画・その他)	事業費その他 (研究倫理・ その他)	事業費計	合計
I 経常収益												
1. 受取入会金	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,600,000
2. 受取会費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	62,500,000
3. 受取寄付金	5,500,000	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5,500,000	5,500,000
4. 受取助成金	1,600,000	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,600,000	1,600,000
5. 事業収入											0	0
(1)学術集会、研究発表会、講演会の開催等による分子生物学に関する学術研究事業	188,310,000	0	0	0	0	0	0	0	0	0	188,310,000	188,310,000
(2)分子生物学に関する機関誌及び論文図書等の発行事業	0	0	0	0	14,000,000	0	0	0	0	0	14,000,000	14,000,000
(3)その他の目的を達成するために必要な事業	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
事業収入計	188,310,000	0	0	0	14,000,000	0	0	0	0	0	202,310,000	202,310,000
6. その他収益	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	120,000
経常収益計	195,410,000	0	0	0	14,000,000	0	0	0	0	0	209,410,000	273,630,000
II 経常費用												
(1) 人件費												
給与手当	3,500,000	0	0	800,000	800,000	0	1,300,000	1,500,000	3,300,000	350,000	11,550,000	17,150,000
法定福利費	540,000	0	0	130,000	120,000	0	220,000	240,000	530,000	50,000	1,830,000	2,700,000
福利厚生費	20,000	0	0	0	0	0	10,000	10,000	10,000	0	50,000	100,000
人件費計	4,060,000	0	0	930,000	920,000	0	1,530,000	1,750,000	3,840,000	400,000	13,430,000	19,900,000
(2) その他経費												
事務所家賃	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4,000,000
業務委託費	98,450,000	350,000	0	0	0	4,650,000	2,000,000	0	500,000	150,000	106,100,000	1,850,000
編集業務費	0	0	0	0	4,500,000	0	0	0	0	0	4,500,000	4,500,000
会員管理システム運用管理費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2,880,000
印刷費	15,000,000	0	0	3,500,000	0	0	0	100,000	700,000	20,000	19,320,000	1,600,000
通信運搬費	2,150,000	0	0	4,100,000	0	0	0	40,000	0	0	6,290,000	3,400,000
旅費交通費	2,200,000	50,000	0	0	0	0	0	200,000	450,000	200,000	3,100,000	2,300,000
会議費	240,000	0	0	0	0	0	0	0	500,000	200,000	940,000	400,000
支払手数料	1,500,000	0	0	0	0	0	0	0	10,000	0	1,510,000	1,500,000
消耗品費	1,500,000	0	0	230,000	0	0	0	10,000	0	0	1,740,000	800,000
会費	47,620,000	0	0	0	400,000	0	0	0	50,000	0	48,070,000	0
機材費	18,850,000	0	0	0	0	0	0	0	0	0	18,850,000	0
諸会費	0	0	0	0	0	0	0	0	20,000	50,000	70,000	0
広報費	0	0	0	0	0	0	0	0	20,000	0	20,000	0
補助金	0	0	5,000,000	0	0	0	0	0	0	0	5,000,000	0
雑費	400,000	0	0	0	0	0	0	80,000	0	0	480,000	1,500,000
租税公課	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,600,000
特定預金支出 (通算給付引当金)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,780,000
その他経費計	187,910,000	400,000	5,000,000	7,830,000	4,900,000	4,650,000	2,000,000	430,000	2,550,000	620,000	215,990,000	231,000,000
経常費用計	191,970,000	400,000	5,000,000	8,760,000	5,820,000	4,650,000	3,530,000	2,180,000	6,890,000	1,020,000	229,420,000	272,950,000
増減額	3,440,000	-400,000	-5,000,000	-8,760,000	8,180,000	-4,650,000	-3,530,000	-2,180,000	-6,890,000	-1,020,000	-20,010,000	700,000

学術賞、研究助成の本学会推薦について

本学会に推薦依頼あるいは案内のある学術賞、研究助成は、本号に一覧として掲載しております。そのうち、応募にあたり学会等の推薦が必要なものについての本学会からの推薦は、賞推薦委員会または研究助成選考委員会の審査に従って行います。応募希望の方は、直接助成先に問い合わせ、申請書類を各自お取寄せのうえ、ふるってご応募下さい。

本学会への推薦依頼の手続きは次の通りです。

1. 提出物

- 1) 本申請に必要な書類（オリジナルおよび募集要項に記載されている部数のコピー）
- 2) 本学会の選考委員用および学会用控に、上記申請書類のコピー計6部
- 3) 申込受付確認のための返信封筒（返信用の宛名を記入しておいて下さい）
- 4) 論文（別刷は各種財団等応募先の必要部数をご用意下さい。委員会用の論文は不要です）

2. 提出先

※賞推薦についての送付先

日本分子生物学会・賞推薦委員長 正井 久雄
〒102-0072 千代田区飯田橋 2-11-5
人材開発ビル 4階
日本分子生物学会事務局気付

※研究助成についての送付先

日本分子生物学会・研究助成選考委員長 吉森 保
〒102-0072 千代田区飯田橋 2-11-5
人材開発ビル 4階
日本分子生物学会事務局気付

3. 提出期限

財団等の締切りの1カ月前まで。提出期限後に受取った場合や、提出書類が不備な場合は、選考の対象にならないことがあります。推薦手続きのことでご不明な点がございましたら、学会事務局までお問い合わせ下さい。

※研究助成（学会推薦）に関する留意事項

学会推薦した会員が財団等の研究助成対象者となった場合には、その研究成果を将来、学会誌「Genes to Cells」に論文あるいは総説として発表して頂くように要請いたします。

応募に際しては、その旨をご了解くださるようお願いいたします。

※各種学術賞（学会推薦）に関する留意事項

- 委員会の内規により、外部財団等の各種学術賞への推薦は、原則として一人につき年度あたり1件となっておりますので、ご了解ください。

（本学会の事業年度は10月1日から翌年9月30日までです）

- 重複申請があった場合、すでにある賞等の推薦が決定されている候補者は、それ以降審査する他の賞等の推薦候補者として原則的に考慮いたしません。応募に際し、ご留意くださるようお願いいたします。

学術賞、研究助成一覧

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
第 50 回三菱財団 自然科学研究助成	(公財)三菱財団 ☎ (03) 3214-5754 〒 100-0005 千代田区丸の内 2-3-1	総額 3 億 3,000 万円	2019 年 2 月 6 日	1 件当たり 2,000 万円まで	自然科学のすべての分野にかかわる独創的かつ先駆的研究を支援。2019 年度は 50 周年記念特別助成として「若手助成」を新設。
山田科学振興財団 2019 年度研究援助		15 件程度 (本学会の 推薦枠は 5 件)	2019 年 2 月 22 日	1 件当たり 100 ～ 500 万円、 総額 3,000 万円	自然科学の基礎的研究に対しての研究費援助。 「推薦書は山田財団HPより ダウンロード http://www.yamadazaidan.jp/ 」
山田科学振興財団 国際学術集会開催助成 (2021 年開催)	(公財)山田科学振興財団 ☎ (06) 6758-3745 〒 544-8666 大阪市生野区巽西 1-8-1	総額 800 万円以内	2018 年 4 月 1 日～ 2019 年 2 月 22 日 (募集期間)	総額 800 万円以内	以下の要件を満たす学術集会を山田コンファレンスもしくは山田シンポジウムと称し、これらの開催を援助する。 ①基礎科学の適切なテーマについて、国際的視野で最高レベルの研究を総括する。 ②研究者の世代間の対話によって、若い世代の研究の発展の基礎を構築する。 ③異分野間の交流を図り、cross-disciplinary な討論を通じて新しい発展を模索する。 詳細 山田財団 HP 参照。
第 35 回国際生物学賞	国際生物学賞委員会 ☎ (03) 3263-1724 〒 102-0083 千代田区麹町 5-3-1 日本学術振興会内	1 件 (1 件)	2019 年 * 4 月 20 日	賞状、賞牌、 1,000 万円	生物学の研究において世界的に優れた業績を挙げ、世界の学術進歩に大きな貢献をした研究者。授賞分野は、国際生物学賞委員会が毎年決定する。授賞分野は、国際生物学賞委員会が毎年決定する。
2019 年度 持田記念学術賞		2 件以内 (1 件)	2019 年 * 5 月 20 日	1 件 1,000 万円	学術賞は次の 6 項目の研究分野で、研究の進歩発展のため顕著な功績のあった研究者に贈呈。 (1)バイオ技術を基盤とする先端医療に関する研究
2019 年度 研究助成	(公財)持田記念医学薬学振興財団 ☎ (03) 3357-1282 〒 160-0003 新宿区四谷本塩町 3-1 四谷ワイズビル	総額 2 億 7,000 万円 90 件	2019 年 * 5 月 10 日	1 件 300 万円	(2)バイオ技術を基盤とするゲノム機能 / 病態解析に関する研究
2019 年度国内または 海外留学補助金		総額 1,000 万円 20 件	2019 年 * 5 月 10 日	1 件 50 万円	(3)免疫 / アレルギー / 炎症の治療ならびに制御に関する研究 (4)循環器 / 血液疾患の病態解析 / 治療制御に関する研究 (5)創薬・創剤の基盤に関する研究 (6)創薬の臨床応用に関する研究
2020 年度笹川科学 研究助成	(公財)日本科学協会 ☎ (03) 6229-5365 〒 107-0052 港区赤坂 1-2-2 日本財団ビル	生物系で103件 (2018年度実績)	募集期間 2019 年 * 9 月 17 日～ 10 月 15 日	1 件当たり 100 万 円まで	人文・社会科学および自然科学(医学を除く)の独創性・萌芽性をもつ研究に関するもの。4 月 1 日現在、35 歳以下の若手研究者へ助成。
上 原 賞	(公財)上原記念生命科学財団 ☎ (03) 3985-3500 〒 171-0033 豊島区高田 3-26-3	2 件以内 (1 件)	2019 年 * 9 月 5 日	金牌、 3,000 万円	生命科学の東洋医学、体力医学、社会医学、栄養学、薬学一般および基礎医学、臨床医学で顕著な業績を挙げ、引き続き活躍中の研究者。
第 36 回井上学術賞		5 件以内 (2 件)	2019 年 * 9 月 20 日	賞状、金メダル、 200 万円	自然科学の基礎的研究で特に顕著な業績を挙げた者(ただし締切日現在、50 歳未満の者)。
第 36 回井上研究奨励賞	(公財)井上科学振興財団 ☎ (03) 3477-2738 〒 150-0036 渋谷区南平台町 15-15-601	40 件	2019 年 * 9 月 20 日	賞状及び銅メダル、 50 万円	過去 3 年間に、理学・工学・医学・薬学・農学等の自然科学の基礎的研究において、新しい領域を開拓する可能性のある優れた博士論文を提出し博士の学位を取得した研究者で、37 歳未満の者。
第 12 回井上リサーチ アワード		4 名以内 (うち 1 名以上 女性研究者)	2019 年 * 7 月 31 日	1 人当たり 500 万円	開拓的発展を目指す若手研究者の独創性と自立を支援する目的で、研究を助成。研究期間は 2 年。
第 28 回木原記念財団 学術賞	(公財)木原記念横浜生命科学振興財団 ☎ (045) 502-4810 〒 230-0045 横浜市鶴見区末広町 1-6	1 件 (1 件)	2019 年 * 9 月 30 日	賞状、 200 万円	生命科学の分野で優れた独創的研究を行っている国内の研究者であり、今後のさらなる発展が大きく期待できる者。原則として締切日現在 50 歳以下を対象とする。

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
第3回バイオ インダストリー大賞	(一財)バイオインダストリー協会 ☎ (03) 5541-2731 〒 104-0032 中央区八丁堀 2-26-9 グランデビル 8F	1 件	2019 年 * 4 月 23 日	賞状、賞牌、 副賞 300 万円	バイオサイエンス、バイオテク ノロジーおよびバイオインダス トリーの分野の発展に大きく貢 献した、または今後の発展に大 きく貢献すると期待される業績 を上げた個人、少人数のグルー プまたは組織に授与される。
第3回バイオ インダストリー奨励賞		10 件以内	2019 年 * 4 月 23 日	賞状および 副賞 30 万円	バイオサイエンス、バイオテク ノロジーに関連する応用を指向 した研究で、 ④医薬・ヘルスケア ⑤食品・第一次産業 ⑥化学・材料・環境・エネルギー などの分野で産業を生み出す研 究であり、これらの分野に携わ る有望な若手研究者を対象とす る。年齢 45 歳未満。
住友財団 2019 年度 基礎科学研究助成	(公財)住友財団 ☎ (03) 5473-0161 〒 105-0012 港区芝大門 1-12-6 住友芝大門ビル 2 号館	総額 1 億 5,000 万円 90 件程度	2019 年 * 6 月 30 日 (データ送信の 締切日: 6 月 7 日)	1 件当たり 500 万 円まで	理学(数学、物理学、化学、生物学) の各分野及びこれらの複数にま たがる分野の基礎研究で萌芽的 なもの。若手研究者(個人また はグループ)を対象とする。
第 61 回藤原賞	(公財)藤原科学財団 ☎ (03) 3561-7736 〒 104-0061 中央区銀座 3-7-12	2 件 (1 件)	2019 年 * 12 月 20 日	副賞 1,000 万円	推薦の対象は自然科学分野に属 するもの。わが国に国籍を有し、 科学技術の発展に卓越した貢献 をした者。
科学技術分野の文部 科学大臣表彰科学技 術賞および若手科学 者賞	文部科学省 研究振興局振興企画課奨励室 ☎ (03) 6734-4071 〒 100-8959 千代田区霞が関 3-2-2	科学技術賞95 件(年)のうち、 研究部門は 43 件(30 年度) 若手科学者賞 は 100 名程度 (学会推薦枠は定 まっていないが推 薦は若干名まで)	2019 年 * 7 月 25 日	表彰状及び副賞	我が国の科学技術の発展等に寄 与する可能性の高い独創的な研 究又は発明を行った個人又はグ ループを表彰。 萌芽的な研究、独創的視点に立っ た研究等、高度な研究開発能力 を示す顕著な研究業績を挙げた 40 歳未満の若手研究個人。
2019 年度島津賞	(公財)島津科学技術振興財団 ☎ (075) 823-3240 〒 604-8445 京都市中京区 西ノ京徳大寺町 1	1 件 (推薦件数に制 限なし)	2019 年 * 7 月 31 日	賞状、賞牌、 副賞 500 万円	科学技術、主として科学計測に 係る領域で、基礎的研究および 応用・実用化研究において、著 しい成果をあげた功労者を対象 とする。
2019 年度島津奨励賞		3 件 (推薦件数に制 限なし)	2019 年 * 7 月 31 日	賞状、賞牌、 副賞 100 万円	わが国の科学技術振興を目的と して、科学技術、主として科学 計測に係る領域で、基礎的研究 および応用・実用化研究におい て独創的成果をあげ、かつその 研究の発展が期待される研究者 を表彰する。対象者は 45 歳以下。
島津科学技術振興 財団研究開発助成		総額 2,300 万円	2019 年 * 7 月 31 日	1 件当たり 100 万円以下	科学技術、主として科学計測に 係る領域で、基礎的研究を対象 とする。国内の研究機関に所属 する 45 歳以下の新進気鋭の研究者。 国籍不問。
東レ科学技術賞	(公財)東レ科学振興会 ☎ (03) 6262-1655 〒 103-0021 中央区日本橋本石町 3-3-16 (日本橋室町ビル)	2 件以内 (2 件)	2019 年 * 10 月 10 日	1 件につき 賞状、金メダル、 500 万円	理学・工学・農学・薬学・医学(除・ 臨床医学)の分野で、学術上の 業績顕著な者、学術上重要な発 見をした者、効果が大きい重要 な発明をした者、技術上の重要 問題を解決し貢献が大きい者。
東レ科学技術研究助成		総額 1 億 3,000 万円 10 件程度 (2 件)	2019 年 * 10 月 10 日	特に定めず最大 3,000 万円程度 まで	今後の研究の成果が科学技術の 進歩・発展に貢献するところが 大きいと考えられる、独創的、 萌芽的な研究を活発に行ってい る若手研究者(原則として 45 歳 以下)。
ノバルティス研究 奨励金	(公財)ノバルティス科学振興財団 ☎ (03) 6899-2100 〒 106-6333 港区虎ノ門 1-23-1 虎ノ門ヒルズ森タワー 29F	約 35 件 指定機関から の推薦必要	2019 年 * 9 月 13 日	1 件 100 万円	生物・生命科学、関連する化学 および情報科学の領域における 創造的な研究に対して助成。

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
第 51 回内藤記念科学振興賞	(公財)内藤記念科学振興財団 ☎ (03) 3813-3861 〒 113-0033 文京区本郷 3-42-6 NKD ビル 8F	1 件 (1 件)	2019 年 * 10 月 1 日	金メダル、 1000 万円	人類の健康の増進に寄与する自然科学の基礎的研究において、独創的テーマに取り組み、その進歩発展に顕著な功績を挙げた研究者。
第 51 回海外学者招へい助成金		前期・後期各 10 件以内 (前期・後期 各々 1 件)	2019 年 * 6 月 1 日・ 10 月 1 日	1 件 20 ～ 80 万円 まで (エリアによる)	同上のテーマに取り組み、国際的に高い評価を得ている外国の研究者を招へいする受入れ責任者(当該学術集会の組織委員長)に助成。
ブレインサイエンス財団研究助成		15 件以内	2019 年 * 10 月 11 日	1 件 80 ～ 100 万円	脳科学の広い分野における独創的な研究計画への助成。
塚原伸晃記念賞	(公財)ブレインサイエンス振興財団 ☎ (03) 3273-2565 〒 104-0028 中央区八重洲 2-6-20	1 件		賞牌ならびに 副賞 100 万円	生命科学の分野において優れた独創的研究を行っている 50 歳以下の研究者。
海外派遣研究助成		若干件	2020 年 * 1 月 10 日	1 件 30 万円まで	我が国における脳科学の研究の促進を図るため、国際学会、シンポジウム等への参加、あるいは短期間の研究者の海外派遣を助成。
海外研究者招聘助成		若干件		1 件 30 万円まで	脳科学研究分野において独創的テーマに意欲的に取り組んでいる外国人研究者の短期間の招聘を助成。
2019 年 コスモス国際賞	(公財)国際花と緑の博覧会記念協会 ☎ (06) 6915-4513 〒 538-0036 大阪市鶴見区緑地公園 2-136	1 件 (1 件)	2019 年 * 4 月 12 日	賞状、メダル、 副賞 4,000 万円	花と緑に象徴されるすべての生命現象に関し、地球的視点における生命体相互の関係性、統合の本質を解明しようとする研究や業績を対象とする。
2020 年度研究助成	(公財)長瀬科学技術振興財団 ☎ (06) 6535-2117 〒 550-8668 大阪市西区新町 1-1-17	20 件程度	2019 年 * 11 月 14 日	1 件 250 万円	有機化学(材料化学を含む)及び生化学並びに関連分野における研究が助成対象。
第 16 回日本学術振興会賞	(独)日本学術振興会 研究者養成課 「日本学術振興会賞」担当 ☎ (03) 3263-0912 〒 102-0083 千代田区麹町 5-3-1	25 件程度 (機関長推薦 扱いとして 学会推薦枠 も若干件あ り)	2019 年 * 4 月中旬 (受付日)	賞状、賞碑、 研究奨励金 110 万円	人文、社会科学及び自然科学にわたる全分野が対象。博士の学位を取得しており、国内外の学術誌等に公表された論文、著書、その他の研究業績により学術上特に優れた成果を上げたと認められた研究者(45 歳未満)。
第 10 回日本学術振興会育志賞		16 件程度 (1 件)	2019 年 * 6 月中旬 (受付日)	賞状、賞碑、 学業奨励金 110 万円	我が国の学術研究の発展に寄与することが期待される優秀な大学院博士課程の学生を顕彰(34 歳未満)。
(一財)材料科学技術振興財団 山崎貞一賞	(一財)材料科学技術振興財団 ☎ (03) 3415-2200 〒 157-0067 世田谷区喜多見 1-18-6	各分野 1 件	2019 年 * 4 月 26 日	賞状、金メダル、 300 万円	授賞対象は、「材料」、「半導体及び半導体装置」、「計測評価」、「バイオサイエンス・バイオテクノロジー」の 4 分野からなり、うち 2 分野が毎年の授賞対象とされる。論文の発表、特許の取得、方法・技術の開発等を通じて、実用化につながる優れた業績をあげている者。
平成 31 年度研究助成	(公財)光科学技術研究振興財団 ☎ (053) 454-0598 〒 430-0926 浜松市中区砂山町 325-6	20 ～ 30 件 総額 5,000 万円	2019 年 * 7 月 12 日	助成金総額 約 5,000 万円	光科学に関係する研究に対して助成。対象課題有り。
2019 年度朝日賞	朝日新聞社 CSR 推進部 「朝日賞」事務局 ☎ (03) 5540-7453 〒 104-8011 中央区築地 5-3-2	ここ最近 は 4 ～ 5 件 (1 件)	2019 年 * 8 月 23 日	正賞(ブロンズ像) と副賞 500 万円	学術、芸術などの分野で傑出した業績をあげ、わが国の文化、社会の発展、向上に多大の貢献をされた個人または団体に贈られる。
第 31 回加藤記念研究助成	(公財)加藤記念バイオサイエンス研究振興財団 ☎ (042) 725-2576 〒 194-8533 町田市旭町 3-6-6	総額 5,000 万円	2019 年 * 9 月 30 日	1 件 200 万円	バイオサイエンスの基礎分野において、独創的かつ先駆的研究をめざす国内の若手研究者(40 歳以下)を支援する。

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
第 9 回 (2019 年度) 三島海雲学術賞	(公財)三島海雲記念財団 ☎ (03) 5422-9898 〒 150-0012 渋谷区広尾 1-6-10 ジラフファビル	自然科学部門 で 2 件以内 (2 件)	2019 年 * 9 月 30 日	賞状、 副賞 200 万円	自然科学部門は、食の科学に関する研究が対象。国内外の学術誌等に公表された論文、著書、その他の研究業績により独創的で発展性のある顕著な業績を挙げている 45 歳未満の若手研究者。
2019 年度 三島海雲学術研究 奨励金		全部門計 60 件程度	2019 年 1 月 10 日 ～ 2 月 28 日	個人研究奨励金は 1 件 100 万円	食の科学に関する学術研究。若手研究者および女性研究者の積極的応募を期待する。
第 7 回ヤマト科学賞	ヤマト科学㈱内 ヤマト科学賞選考委員会事務局 ☎ (03) 5639-7070 〒 135-0047 江東区富岡 2-11-6 HASEMAN ビル	1 件	2019 年 * 11 月 29 日	賞状、賞牌、 副賞 100 万円	独創性、創造性に富む、気鋭の研究者を顕彰。対象分野はライフサイエンス、マテリアルサイエンス、インフォメーションサイエンス等の自然科学、技術分野およびその融合領域分野。
2019 年度 小野医学研究助成	(公財) 小野医学研究財団 ☎ (06) 6232-1960 〒 541-8526 大阪市中央区道修町 2-1-5	12 件以内	2019 年 * 6 月 3 日 ～ 7 月 31 日 (受付日)	1 件 200 万円	助成テーマは脂質代謝異常に伴う疾患の病態生理に関する研究(2018 年度)。①基礎医学②臨床医学③疫学④薬学⑤その他の領域 研究奨励助成は満 40 歳以下に限る。
2019 年度 小野医学研究奨励 助成		16 件以内		1 件 100 万円	
第 3 回早石修記念賞		1 件 (1 件)	2019 年 * 8 月 30 日	正賞 (楯)、 副賞 500 万円	脂質研究において、独創的な研究による新しい分野の確立等、その進展に著名な功績をあげた研究者。

●件数の（ ）内は、応募に当たり学協会等からの推薦が必要な場合、本学会の推薦枠を示しています。

*は、本年度の案内を受取っておらず、昨年締切日を参考に示してあります。

締切日を過ぎているものは、本年度応募は終了していますが、参考資料として掲載しました。

各種学術集会、シンポジウム、講演会等のお知らせ

○千里ライフサイエンスセミナー

がんシリーズ第7回「がん微小環境：がん細胞と免疫系の対峙」

日 時：2019年5月21日(火)10:30～16:20

場 所：千里ライフサイエンスセンタービル 5階
山村雄一記念ライフホール

趣 旨：

近年のがん免疫療法、とりわけ免疫チェックポイント阻害剤の臨床応用は、がん治療に新たな選択肢を提供し、大きな変革をもたらしています。このような免疫チェックポイント阻害剤によるがん免疫療法の開発の功績により James P. Allison 教授、本庶 佑教授にノーベル生理学・医学賞が授与されました。がん免疫療法は、従来の外科的治療・化学療法・放射線療法といったがん自体を標的とする治療と異なり、宿主の免疫系を活性化することで、がん細胞を攻撃、駆逐します。免疫チェックポイント阻害剤の臨床効果は、多くの福音をもたらす一方で、全てのがん患者に有効ではないこと、また、がんが様々な免疫抑制機構により免疫系からの攻撃を逃避していることを明らかにしました。本セミナーでは、これらのがん免疫療法の臨床展開から明らかにされた問題点をもとに進んだがんが持つ免疫抑制機構の研究、及び新たながん免疫療法の臨床展開について議論します。

プログラム：

1. CCR2 会合分子 FROUNT を標的とした腫瘍浸潤マクロファージ制御によるがん免疫治療
松島綱治（東京理科大学生命医学研究所 教授）
2. がん微小環境での免疫抑制ネットワークとがん免

疫療法

西川博嘉（国立がん研究センター研究所 分野長）

3. セリンリン脂質の免疫抑制作用とがん

青木淳賢（東北大学大学院薬学研究科 教授）

4. 抑制性免疫補助受容体によるがん免疫と自己免疫の制御

岡崎 拓（徳島大学疾患プロテオゲノム研究センター 教授）

5. Proteogenomics によるネオアンチゲンの探索

鳥越俊彦（札幌医科大学医学部 教授）

6. 遺伝子改変 T 細胞の輸中療法 — 特異性、コンストラクト、細胞 —

珠玖 洋（三重大学大学院医学系研究科 教授）

コーディネーター：

西川博嘉（国立がん研究センター 研究所）

佐藤昇志（札幌医科大学名誉教授）

参 加 費：無料

申込要領：氏名、勤務先、所属、〒所在地、電話番号、Eメールアドレスを明記の上、Eメールで下記宛お申し込み下さい。件名は「千里ライフサイエンスセミナー N1」として下さい。

申 込 先：千里ライフサイエンスセミナー N1 係

E-mail：sng-2019@senri-life.or.jp

URL：http://www.senri-life.or.jp/seminar-1.html

主 催：公益財団法人 千里ライフサイエンス振興財団

担 当：湯通堂隆（Takashi Yutsudo, PhD.）

公益財団法人 千里ライフサイエンス振興財団

Tel：06-6873-2001 FAX：06-6873-2002

日本分子生物学会 賛助会員一覧

(2019 年 2 月現在)

アサヒグループホールディングス株式会社
株式会社エー・イー企画
科研製薬株式会社 薬理部
コスモ・バイオ株式会社
サーモフィッシャーサイエンティフィック ライフテクノロジーズジャパン株式会社
株式会社 SeeDNA 法医学研究所
第一三共株式会社 モダリティ研究所
タカラバイオ株式会社 事業開発部
株式会社ダスキン 開発研究所
株式会社東海電子顕微鏡解析
東洋紡株式会社 ライフサイエンス事業部
株式会社トミー精工
ナカライテスク株式会社 開発企画部広報課
日本甜菜製糖株式会社 総合研究所第二グループ
日本たばこ産業株式会社 植物イノベーションセンター
浜松ホトニクス株式会社 システム営業部
富士レビオ株式会社 研究推進部 バイオ研究グループ
フナコシ株式会社
三菱ケミカル株式会社
ヤマサ醤油株式会社 R & D 管理室
湧永製薬株式会社 湧永満之記念図書館
ワケンビーテック株式会社 学術部

(22 社、50 音順)

■第 42 回（2019 年）日本分子生物学会年会 公式サイト

URL: <https://www2.aeplan.co.jp/mbsj2019/>

■日本分子生物学会 Facebook 公式アカウント

URL: <https://www.facebook.com/mbsj1978/>

特定非営利活動法人

日本分子生物学会 事務局

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋 2-11-5

人材開発ビル 4 階

TEL: 03-3556-9600 FAX: 03-3556-9611

E-mail: info@mbsj.jp



第42回

日本分子生物学会年会

2019年12月3日(火)～6日(金)

年会長 佐々木裕之 (九州大学生体防御医学研究所)

会場 福岡国際会議場・マリンメッセ福岡

URL <https://www2.aeplan.co.jp/mbsj2019/>

演題登録期間

2019年 7月1日(月)～7月31日(水)

※延長はいたしません。ご注意ください。

事前参加登録期間

2019年 7月1日(月)～10月11日(金)



【連絡先】第42回 日本分子生物学会年会事務局(株式会社エー・イー企画 内)

〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋 2-4-4 一ツ橋別館4F Tel:03-3230-2744 FAX:03-3230-2479 E-mail:mbsj2019@aeplan.co.jp

The Molecular Biology Society of Japan NEWS

日本分子生物学会 会報

(年3回刊行)

第122号 (2019年2月)

発行——特定非営利活動法人 日本分子生物学会

代表者——阿形 清和